

文学と将棋

スタディーズ

将棋と文学研究会

目次

【巻頭言】文学と将棋は似ているか？

小谷 瑛 輔

4

1 現代メディアの中の将棋

メディアが発信してきた

「将棋めし」と「観る将棋ファン」

小 笠 原 輝

8

IT進展による新しいメディアと、
将棋とファンとの関係性の変遷

椎 名 秀 明

30

2 近代メディアの中の将棋

「稽古事」から「興行」へ？

——将棋と文学の出会わない雑誌としての『将棋新報』

瀬 尾 祐 一

32

始発期『将棋世界』と作家たち

矢口貢大

47

新聞将棋の始まりから発展へ

山口恭徳

61

3 将棋と文学の交錯

復刻 菊池寛将棋関連文章

西井弥生子

86

坂口安吾はなぜ木村義雄を書いたのか

本多俊介

98

将棋場と文学場の交差

——木村義雄の人生観を契機として

近藤周吾

113

将棋と棋士をこよなく愛した作家の山口瞳への追想

田丸昇

123

文壇ゴシップと詰将棋

三浦卓

131

日本の近代小説は将棋から始まった？

小谷瑛輔

132

【巻頭言】文学と将棋は似ているか？

小谷瑛輔

第一五九回芥川龍之介賞を受賞した高橋弘希は、『文春オンライン』の受賞インタビュー¹で、かつてプロ棋士を目指していたことを明かし、「将棋って、小説を書いていく過程と似ているところがあるんです」と述べている。

文学は将棋と似ているのだろうか？そもそも、日本において文学は将棋といかほど近接してきたのだろうか？文学は娯楽や遊戯^{ゲーム}のようなものと考えてよいのだろうか？将棋と文学研究会が問うてきたのも、まさにこのような問題である。

見方によっては、将棋と文学は当然のように並べて考えられたりもする。近年盛んな人工知能研究では、将棋ソフト開発を牽引してきた松原仁が、将棋ではコンピュータは既にプロレベルに達したとして、小説を書く人工知能の開発にシフトしたことが知られている。ここでは人間が知能を駆使して行う活動として、将棋と文学は、もちろん多くの違いを含みながらも、互

いに延長上にあるものとして位置付けられてもいる。

チェスをはじめとする遊戯^{ゲーム}と西洋文学の関係ならば、議論が繰り返されてきた。ジャック・デリダ、ロラン・バルト、ジュリア・クリステヴァら、フランス系文学理論の多くの論者たちが共有している、テキストとは記号の jeu（戯れ・ゲーム・遊び）である、という発想は、言語をチェスの比喩によって考えたソシュールにさかのぼることもできる²し、さらには功利主義をめぐるベンサムとミルの有名な議論で詩の快楽とブッシュピンの遊びの快楽が比較されたことを想起することもできよう。また近年の文学理論家も、ミシェル・ピカール『遊びとしての読書』³（一九八六）、ケンダル・ウォルトン『フィクションとは何か——こっこ遊びと芸術』⁴（一九九〇）、J・ヒリス・ミラー『文学の読み方』⁵（二〇〇二）など、遊戯^{ゲーム}との関わりに注目することから文学を捉えようとするものは多い⁶。ウラジーミル・ナボコフ『ディフェンス』（一九三〇）のようなチェス小説はこうした文化的な文脈において書かれたのであり、若島正⁷が論じるように、ここでは文学作品の構成原理が遊戯^{ゲーム}の論理によってもたらされることがメタフィクションを成立させている。

日本でも、遊戯^{ゲーム}はそれ自体、重要な批評対象と見なされるようになってきている。『動物化するポストモダン』⁸『ゲーム的リアリズムの誕生』⁹など、遊戯^{ゲーム}を対象とした批評で存在感を示し

た東浩紀は、平成三〇年の『ゲンロン』八号、九号でいずれも遊戯^{ゲーム}を特集している。遊戯^{ゲーム}を考えることは、今や文化を考える上で欠かせない視点となっている。

しかし日本近代文学研究においては、将棋と文学の関係についてこれまで問われることは、その重要性に比して乏しかったと言わざるを得ない。そこで将棋と文学研究会では、日本文学研究の視点だけでなく、文化史研究、メディア論、外国文学研究者、そして様々な形で将棋と関わる世界で活躍する人々や、それを支える人々など、多様なメンバーが集まって、将棋と文学の関わりの研究をスタートさせた。

論集『将棋と文学スタディーズ』およびシンポジウム「将棋と文学」は、研究会のこれまでの成果をまとめ、さらに新たな視点を導入することで、研究を次の段階へと進めていくためのものである。そこで扱われることになる問題系を概観しておきたい。

日本の近代文学の大きな思想的テーマといえは、共産主義革命と戦争である。将棋は、坪内逍遙が考えたように人生や社会のドラマの再現でもあるが、さらに直接には戦争のメタファーでもあり、また「逆転の遊戯^{ゲーム}」と言われるように、革命のメタファーと結び付くのかどうか、といったこともたびたび問題となる¹⁰。そう考えると、将棋を考えることは、実は日本近代文学の核心に繋がる切り口となり得ることが見えてくる。日本に

において新聞小説が定着したのは、日露戦争の終結後、ある種の娯楽コンテンツとして機能してきた戦争記事の代替物としての役割を果たすものが求められたからだということが指摘されている¹¹が、まさにその時期にそれと同様に戦争記事に代わる娯楽コンテンツとして定着したのが、囲碁将棋記事であった。戦争中の文学については研究が蓄積されてきているが、その時期将棋は時局との関わりの中でどのような意味を持ったのか。また共産主義革命の理念との関わりについては、戦後に将棋文化振興を支援し、現在でも将棋界の重要な後援者となっている日本共産党は、なぜ、そしてどのように将棋と関わってきたのか。

将棋と文学は今日、空前の結び付きを示している。高橋弘希、いとうせいこう、朝吹真理子、松浦寿輝といった「純文学」的な作家たちが将棋に大きな関心を寄せ、また将棋小説が隆盛し、マンガやアニメ、映画などの多様な物語ジャンルにおいて、将棋は重要なモチーフとなっている。また近年では、インターネット技術の発達によって従来とは全く異なる特徴を持つメディアが登場しているが、将棋の表象はそこでいかに変容しているのだろうか。文学は、メディアの中で将棋と並んで娯乐的なものとして位置付けられたりもするコンテンツであると同時に、将棋をモチーフとして取り入れるメディアでもあり得るといって、二重の性格を持つている。こうした関係を解きほぐすためにも、明治期以降、

将棋がメディアの中でどのように表象されてきたのかの歴史を明らかにすることが、その基礎としてまずは重要であろう。

こうした様々な点についての堅実な調査研究に基づいて、将棋と文学が交錯してきたありようについての具体的な検討がなされることとなる。

先にも述べた通り、将棋と文学研究会の研究の特徴的な点は、日本文学研究者だけでなく、様々な分野で活動するメンバーが集まっていることにある。本論集に寄せられた論文も、いわゆる文学研究のアカデミッくなディシプリンとは異なる文体や体裁で書かれたものも少なくない。しかし、そのように狭義の研究場に閉じることのない横断性こそがこの研究プロジェクトの可能性を担保するものに他ならない。本論集では、ある程度の監修は小谷が行ったが、書式などを統一することは最低限にとどめ、そうした横断性が可視化された形とすることを試みている。

この巻頭言は、こうした多様な研究の試みを俯瞰するには不十分な見取り図に過ぎない。将棋と文学という視座の有効性は、個々の研究の実践の中で具体的な意味が見出されていくことになるだろう。

1 「芥川賞受賞・高橋弘希インタビュー」『小説と将棋は似ている

かもしれない」(『文春オンライン』平成三〇年七月二三日、<http://bunshun.jp/articles/-/8250> 平成三〇年一〇月二九日閲覧)

2 立川健二、山田広昭『現代言語論』(新曜社、平成二年六月)

3 邦訳は及川馥、内藤雅文訳 ミシエル・ピカール『遊びとしての読書』(法政大学出版局、平成二年六月)

4 邦訳は田村均訳、ケンダル・ウォルトン『フィクションとは何か——ごっこ遊びと芸術』(名古屋大学出版会、平成二八年五月)

5 邦訳は馬場弘利訳、J・ヒリス・ミラー『文学の読み方』(岩波書店、平成二〇年一月)

6 ただし、西洋においても、遊戯と文学の関わりは自明のものというわけではない。たとえばミシエル・ピカールは前掲書で「遊びは文学研究から抑圧を受けている」と述べ、それへの抵抗を唱えている。

7 若島正「訳者解説」(ウラジミール・ナボコフ『ディフェンス』

河出書房新社、平成二一年二月)

8 東浩紀『動物化するポストモダン』(講談社、平成一三年一月)

9 東浩紀『ゲーム的リアリズムの誕生』(講談社、平成一九年三月)

10 木村政樹「遊戯的なものと反語的批評——将棋からみる『戦後文学』状況」(日本近代文学会口頭発表、平成二八年六月二六日)

はこの点と関わるものであった。また、升田幸三が「共産党は将棋が流行してゐる間は、あきまへんな。将棋は王将を大事にするもんやさかい」と述べたという、織田作之助「二流文楽論」(『改造』昭和二年一〇月)が紹介するエピソードも興味深い。

小森陽一「文学の時代」(『文学』平成五年四月)、小森陽一「へゆらぎ」の『日本文学』(日本放送出版協会、平成一〇年九月)など。

1

現代メディアの中の将棋

メディアが発信してきた

「将棋めし」と「観る将棋ファン」

小笠原輝

1. はじめに

将棋棋士の食事情報、所謂「将棋めし」が最近よく話題になる。その将棋めしを、メディアがどのように発信してきたか、また、将棋ファンがそれをどう受け止めてきたかを考える事が本稿の目的である。

2. 「将棋めし」の始まり

将棋界に食事情報を持ち込んだのは、倉島竹二郎である。一九三二（昭和七年）より『國民新聞』に棋狂子名義で観戦記を書き始めるのだが、最初の観戦記に早速食事情報が出てくる。

「まだ、ほんの子供でしたが、其頃から将棋が飯より好きで、幾晩も夜ふかしを續けたものでした、それでも親父が怖いので晝間仕事だけはやつてゐましたが、或日、餘り睡眠不足が重つたせゐか、たう／＼仕事最中に死にましてね」

「死んだつて？」と、傍で冷麦を啜つてゐた土居八段が、思はず鳩のやうに眼を圓くした「え、何時間か死んでゐたんですよ。やつと蘇つたものゝ、後から理由が知れて、親父から叱られるの、叱られないのつて——それでも将棋だけはどうしてもやめられませんでした」

（中略）

——晝食休憩時間の、ふとした挿話。¹

昼食休憩中のエピソードで、土居八段が冷麦を食べている。それまでの『國民新聞』の将棋欄は、対局者の感想と大崎熊雄八段の講評、といった形で将棋の指手のみで構成されていて、将棋に興味のない読者にとっては無味乾燥のものであった。ところが、棋狂子が観戦記を書き始め、この観戦記の金八段のように細かな人物描写を描いた事で、大変な反響を呼ぶことになる。

棋狂子の観戦記は近來の読み物です。小生は餘り将棋の事は知らず従つて興味もなかつたのですが、今度は知らず／＼讀ま

されました。まるで連載小説のやうに明日が待たれます。筆者は何人にや?大いに敬意を表する次第です。²

将棋を知らない人でも文学のように楽しめるものとして、棋狂子の観戦記が読まれましたようだ。そこで、倉島は次の観戦記において、棋士の人物描写と食事情報を結びつける事を考えた。

溝呂木七段が這入つてきて食事にはどうかと勧めた。小泉六段はてつか井をあるらへた。此處のは滅法旨い—といふ。山本七段もひきずられて同じ物を注文した。(中略)てつか井が来ると一と先づ對局を中止する。食事中山本氏は涙をポロポロとこぼした。何故つて?あまり山葵がきゝ過ぎてゐたからだ。が、小泉氏は平氣なもので、うまい—と食つてゐる。「よう、江戸のお兄いさん!」と黄いろい掛聲がかゝりさうだ。³

「先づ腹拵へ」という題で食事にフォーカスを当てているのに注目したい。内容も、下町の魚屋生まれの小泉六段が山葵を苦にしないという、棋士の特徴を巧く掘んでいるもの。ただ鉄火井を食べたという事ではなく、鉄火井を食べた小泉六段に意味を求めるのが将棋めしであり、倉島が発見した新しい視点であった。倉島は当時をこう振り返っている。

私のねらいは、読者をして勝負の場の空氣を實際に観戦しているように感じさせることであつた。それまでもそうした描写が全然ないではなかつたが、それは刺身のツマ程度で、私のやうにそれに主力を注いだものはあまりなかつた。時には編集部の方から「将棋指しが昼飯になにを食つたか、そんなことまで書く必要はないじゃないか」と横槍の出たこともあつたが、私は「そんなばかな話はない。鰻井を平らげると、筑蕎麦ですませるのでは違う。それでその棋士の嗜好もわかれば風貌もおのずと感じられ、読者は親しみをますじゃないか」と、反駁して改めようとしなかつた。

幸い、これは読者に受けて将棋欄がおもしろくなつたという投書がくるようになったし、その後あちこちの観戦記で私流の対局描写を見うけるようになった。私は鉾脈の一つをさぐり當てた気がしてうれしかった。⁴

当時の将棋ファンは新聞の観戦記を通してプロ棋士の将棋を楽しんでいたのだが、そうしたファンにも将棋を観ているやうに感じて欲しい、そのために食事の情報を活用しよう、という意図が倉島にあつたようだ。将棋めしは、その始まりから「将棋を観る」ことを目的としていたようである。實際に、それに

反応した読者投稿も見られる。

棋狂子先生に左の件を希望致します。

現在棋客の出生地、年齢、性格、嗜好、趣味、将棋道に入門の年齢、師匠、出世の道程、記念すべき対局——等、毎日一人づつでも御紹介願へないでせうか？⁵

将棋の盤上の戦いでなく、棋士個人の情報が知りたい、という層の投稿である。菅谷北斗星はこうしたファンはゴシップの興味を将棋に求めているとしているが⁶、盤上で繰り広げられる将棋の対局ではなく、盤側の棋士やその周辺の情報を欲する層は戦前からいたようで⁷、そういう人たちに将棋めしが楽しまれていたようである。名人戦の開幕局⁸や『将棋世界』創刊号⁹には花田長太郎八段や金八段の食事エピソードが入るなど、名人戦や『将棋世界』の歴史は、将棋めしとともに始まっている。

3. 一九七六年名人戦騒動後の、

将棋を観る、コンテンツの発展と将棋めし

将棋めしは戦後食糧難の影響を受けつつも、食糧事情が落

ち着く一九五〇年頃に新しく「食事量が形勢のバロメーター」という概念を得て¹⁰、観戦記や雑誌等で言及されてきた。その情報量が増えるのが一九八〇年代であるが、まず、その情報量の増え方の流れを、将棋を観る、コンテンツの発展とともに見ていきたい。

名人戦が毎日新聞社に移った事に伴い、王将戦はスポーツニッポン社も主催に加わり、王将戦の観戦記や記事は『スポーツニッポン』紙面に掲載されるようになった。その最初の第二七期王将戦の第六局二日目において、一三時より、「観戦と大盤解説会 対局の生観戦」と銘打って無料で観客を集っている。以降関西の対局で対局の生観戦付きの大盤解説会が行われるようになる。そして一九八〇年の第二九期王将戦からは「王将戦二四時」というタイムテーブルを掲載し、以後当欄で食事情報が載るようになった。担当記者である松村久は当時をこう振り返っている。

観客のいない対局室で、タイトルを争う二人は何をしているのかを可能な限り読者に伝えられるように「王将戦二四時間ドキュメント朝・昼・夜」という囲み記事もスタートさせた。

「加藤王将はおやつに明治の板チョコを特注。ペロリと三枚とも平らげた」

「昼食は厚焼きトーストを五枚食べた」

あるいは「大山十五世名人は相手が長考に入るとすぐ控室に現れ、雑談をする。今日は四回だった」

——対局者のやったこと、話したこと、食事の身中……ありとあらゆることを、こと細やかに書いた。

一局を七、八譜に分けて連載の形で載せる通常の観戦記とは違って、勝負のエキスを六十〜八十行にまとめなければならぬ対局翌日紙面の「勝負本記」には、盛り込みきれない両者の動きも何とか網羅したかったからだ。¹¹

倉島と同じく、松村も対局室の空気を読者に伝えるために、食事情報を用いていた事がわかる。

『毎日新聞』紙面の方では、一九八二年三月一六日の夕刊において、「将棋指し〱の一番長い日」という題で、前日行われた挑戦者決定リーグ最終局の特集記事が井口昭夫・加古昭光両記者によって書かれた。名人挑戦と降級という人生が懸かる所謂「将棋界の一番長い日」をコンテンツ化しようという試みである。翌年の『将棋世界』一九八三年五月号の「名人リーグ最終日 棋士の一番長い日 関西編 関東編」、『将棋マガジン』一九八四年五月号の「名挑戦リーグ最終日 挑戦者は森安八段」などの特集記事を井口・加古が書き、以降最終日の特集記

事が恒例化する。棋士の一日を追うという事で、必然的に食事やおやつ注文の様子に言及された。『週刊将棋』一九八六年三月一九日号の「ザ・ロングゲスト・デー」からは『週刊将棋』が特集記事を引き継ぐ事になり、「将棋界の一番長い日」の食事情報が以降定番となった。

『週刊将棋』は、創刊号である一九八四年一月二五日号の巻頭記事「第三期棋聖戦第三局」の書き出しを、森安秀光棋聖が食べた特製うどんから始めるなど、速報性のある媒体で積極的に食事情報を展開するようになる。この『週刊将棋』創刊の頃から、『毎日新聞』の名人戦観戦記の食事情報も充実してくる。第四二期名人戦第四局観戦記¹²では、江國滋が全体の半分の半を使い、挑戦者の森安八段と同じ物を注文する谷川名人が挑戦者に同調している様子を見て名人が負けるのではないかと、当時感じた事を「メニユーが告げた」という題で書き残している。第四三期名人戦第一局観戦記¹³では、二日目夕食を中原王将が半分残したのではないかと、というNHKディレクターからの情報を基に井上光晴が取材をし、夕食の松島御膳の全メニユーを一二六文字使って書いている。この第四三期名人戦では第二局を『将棋世界』が密着取材をしており¹⁴、対局前日移動日の昼食から、対局翌日福岡を離れる前の昼食まで、対局時以外の食事情報も網羅して掲載する等、特に食事が注目された名人戦

でもあった。この期は第一局終了後毎日新聞社に勝敗を問い合わせる電話が約七〇〇本入る等ファンの注目も加熱し、翌一九八六年の第四期名人戦第二局では、銀波荘の大盤解説を初めて有料（一五〇〇円）で行い七十余人を集め、昼食休憩前に対局室の見学をさせる等、対局の公開が進んでいく。そして一九八九年の第二期竜王戦第一局では初の終局までの公開対局を行い、NHK衛星放送での生中継も放送。それと同時に『週刊将棋』では、『読売新聞』の小田尚英記者がタイムテーブルを掲載。小田はほぼ全ての昼食情報を記述し、ここにタイトル戦の全食事情報が公開されるスタイルが一九八九年末に誕生した。第四九期名人戦第二局¹⁵では、福井逸治が「対局の二、三日前に食べた物が盤上に花を咲かせる」としてとうとう自宅での食事を取材するまでになり、ここで食事情報は一つのピークを迎える。

一九八〇年代は、将棋を観るコンテンツが発展していったとともに、食事情報の見せ方・取り上げ方も発展していった一〇年であった。そして、関係者やファンの意識も変わった一〇年でもある。

まずは関係者の意識から。当時の『将棋世界』は新春に座談会を掲載しているが、一九八六年一月号で河口俊彦が以下の発言をしている。

河口 僕はね、とにかく将棋が知らない人が読んでも興味を持つことができるような観戦記がほしいと思うね。

（中略）

河口 加古さん、僕は名人戦なんか、酒場や喫茶店なんかでも話題になってほしいわけです。で、観戦記はその話題を提供しなくちゃならないと思うのです。野球ファンが多いと言っても、その大半は、お茶の間でテレビ見てるテレビテレビファンでしょ。で、野球なんかやったこともないのがフォークの握りはどうかとか、カーブはどうかと言うわけでしょ。将棋もそういった能書きが言えるような材料を観戦記で提供してほしいんです。今の観戦記は、ちよつとプロの読みとか権威を押しつけ過ぎですよ。

加古 なるほど、将棋を知らない人に興味を持たせる視点は必要だね。¹⁶

河口が「観る将棋ファン」層に向けて観戦記を書く必要がある、という指摘をし、『毎日新聞』の加古がそれに気付かされる、というもので、この時点では河口の意識は共有されていない。それが、二年後の一九八八年二月号では、「見せる」とい

う事を意識するようになっていいる。

司会 棋界全体の事として、より発展させる企画というか、近い未来で実現させたいような事というのはないでしょうか。

山田 それに関しては是非言いたい事がありましてね。タイトル戦か、大きな一番を、公開でね、やればと。

河口 この機会に竜王戦でやったらどうですか。タイトルマッチまでは半年以上あることだし、今決めておけば可能だと思っけれどもなあ。なんといつてもファンは生の対局をみたいんだし、お好みの席上対局とは全然迫力が違うもの。

それで、棋士も見られるのを嫌がる時代じゃなくなってきたいるんだから、いい設備もそろっている時代なんだしね。

山田 ともかく真剣勝負を生で見せるということですよ。

河口 興行的に成りたつかどうかは検討するとしても、やらなきゃいけませんよ。世間の関心と呼ぶべきや。

山田 これからは有線TVも使える時代でしょう、一日中将棋の事を放映することも可能な訳ですし、「見せる」事を考えなければね。

河口 その意味では棋士も映像に対しては考え方とか意識を変えて行かなきゃね。素人が気軽に口を出せる雰囲気を作らないと。

(中略)

司会 女性ファンを増やす妙案はないですかね。

河口 それはやはり地道にやっていくしかないんだけど、催し物をやってもアフターケアをしないとね、一回こっきりじゃついでこないよ。

石堂 セールスマンがいないとね。

山田 それと、女性の大会を開くのも大事だけれど、知らない人に「見せる」という方向を作らないとね。スポーツだってルールを知らないファンが見ることがあるんだから。

河口 こまめなフォローと持続性だね。待っていちやだめだよ。¹⁷

河口が提唱し、『将棋マガジン』の対局日誌等で実践してきた将棋を知らない層への普及が、一〇年かけて関係者間で共有されるようになり、その結果、第二期竜王戦の公開対局に繋がっている。

将棋ファンについても、同じような流れができていいる。観る

将棋ファンと言えるような層が、一九八〇年代に入って『将棋世界』の読者投稿「声の団地」に投稿するようになったのだ。二例紹介したい。

一〇日遅れの将棋世界をここプリンス市でも愛読しております。

もちろん、主人の済んだあとで、棋譜の部分を抜かして読むのですから、正確には、将棋人口の内へは入れてもらえない部類に属するのでしょう。

（中略）

将棋そのものは、ほとんど知らない私が、これほどまで魅力を感じるようになったのも、主人の影響も有るのですが、倉島竹二郎氏の純文学と断言出来るほどすばらしい観戦記を知ってからなのです。

氏の文章は、元々文学をめざしただけあって、駒と駒の戦いだけに終らず、人生であり、それ自体が独立した名作といっても過言ではないでしょう。言葉の一句一句がその時の風のそよぎ、虫の音、対局者の息づかい、澄み切った目に宿る意志の輝きを著し、その場に居る以上に優雅にと同時に鋭く激しく表現される。¹⁸

かく言う私の将棋は、全く進歩していない。

（中略）

そういうわけで、今は将世を読むとか、テレビ観戦の方が面白い。

棋界はキャラクターが豊富だから、誰が対局し、解説し、文章を書いても、その方の人となりが出ていて楽しめる。

対局場のぴりつと張りつめた空気も好きだ。床の間の生け花、和室のしつらえ、逸品の駒と盤、お茶などのすべてが、棋士の考える風景に溶け込んでいる。日本の文化が凝縮されている感じだ。男の人の着物姿の美しさを再認識したのも、将棋を知ってからだ。

（中略）

将棋のとらえ方は十人十色。勝負だ、いや芸術だ、文化だ、娯楽だ、暇つぶしだと色々あった方が楽しい。幅を持たせることが、普及の第一歩だと思うから。¹⁹

前者では、「棋譜を抜かして読むので将棋人口のうちには入ってもらえない部類に属する」としながら、倉島の描く対局場の様子を魅力を感じている。後者ではもっと明確に、テレビ観戦で観る対局場の様子を魅力を感じている。どちらも将棋の盤面ではなく、将棋を観る事に魅力を感じている。

一九八〇年代までは、将棋を指す人の事を将棋ファンと捉えていた。よって一九八四年の投稿では、今なら観る将棋ファンに分類される女性は、自分自身を将棋ファンと分類していない。ところが、一九九〇年の投稿に入ると、「将棋の楽しみ方は色々あった方が楽しい」と言い切る女性が出てきていて、ファンの間でも将棋を観る事に対する意識が進んでいる事が分かる。一九八〇年代に食事情報が増えたのもそういった関係者の努力の一つで、当時の観る将棋ファン層は将棋めしを楽しみ、倉島ファンの読者投稿はその代表的な例ではないか。

4. インターネット時代の、観る将棋ファンと将棋めし

二〇〇一年頃から、各新聞社のサイトで将棋中継が徐々に始まるようになり、その中で食事情報も取り上げられるようになる。例えば王将戦は第五〇期より現場実況が始まり、第五局一日目には食事写真が掲載されている。二〇〇三年五月に『名人戦棋譜速報』が始まると、青葉記者が食事情報を順位戦にも広げた。二〇〇四年九月二日には青葉記者が対局者と同じ食事注文をして画像を公開し始める。これによって、将棋めしは一つの変化を向かえる。今までのタイトル戦の食事情報や食事写真は、どこか遠くの出来事であったが、将棋会館での対局で食

事写真を公開することによって、千駄ヶ谷に行けば同じ物が食べられるという、将棋めしがより身近なものとなったのである。反響も大きく、二〇〇四年二月一六日には記者投稿されていない対局者の食事情報を求める投稿が出るなど、食事情報を求める声がより強くなる。二〇〇六年九月一五日には、烏記者が出前注文の店名を公開。以前より個別の質問で店名を答えていた事はあったが、この時に初めて店名と注文がセットで提供された。二〇一〇年三月一二日に烏記者が夕食の店名を公開した後は、関東の食事には必ず店名がつくようになり、『名人戦棋譜速報』の食事情報のフォーマットが完成した。

二〇一〇年七月五日に『日本将棋連盟モバイル』が開始されると、『名人戦棋譜速報』と同じく食事情報が提供されるようになる。こうして将棋中継に食事情報があるのが当たり前になった後、二〇一二年四月一日、第七〇期名人戦第一局二日目より、インターネットによる棋戦の完全生中継が始まる（以前にも中継はあったが、タイトル戦の全対局を終局まで生中継するスタイルが始まる）。放送中に対局者がおやつを食べる様子が写り、対局者の食事メニュー、解説者の昼食アンケート（初期は昼食クイズ）等、将棋の対局がよく理解できない層でも簡単に理解できるものとして食事情報が活用され、食事情報が生中継に欠かせないものとして扱われるようになった。

この名人戦中継に影響されたのか、二〇一二年七月一六日(深夜)に日本テレビの「月曜から夜ふかし」で「今気になる話題」として「将棋メシがうまそうに見える件」が紹介される。内容は、タイトル戦でおやつが出ることを紹介し、タイトル戦で注文されたカレーを紹介するというものであった。メディア上で「将棋めし」という単語が出てきて、その情報が消費される時代も始まった。この頃から増えていく観る将棋ファンと食事情報が相乗効果で増えていく。ニコニコ生放送における、昼食休憩中に解説・聞き手が食事写真の公開やタイトル戦のおやつの時間に合わせて行うの「お三時コーナー」といったものは、対局とは関係ないものであるが、観る将棋ファンの棋士を知りたいという需要を満たすものである。そうして対局者や対局者以外の食事情報が出てくる将棋中継を見た人が、食事が面白い、といった理由で興味を持ち観る将棋ファンになった例も散見される。将棋生中継以前は、将棋めしは将棋を観る雰囲気を楽しむためのものであったが、将棋生中継以後は、流れてくる将棋めしがきっかけになって将棋を観るファンも増えてきた、ということになる。二〇一六年七月五日には『コミックフラッパー』にて松本渚のマンガ「将棋めし」が連載開始。この年の一〇月に藤井聡太四段が誕生し、マスコミが藤井四段の情報を求めて殺到。「将棋めし」というワードとともに、一般メディアが食事情報

を取材して記事にするようになってきている。

現在、藤井聡太ブームにより対局者の食事情報が一般メディアにも取り上げられるようになった結果、対局者の食事情報の公開は更に進んでいる。一般メディアが藤井七段の注文をニュースとして流すことにより、藤井七段の対局相手が注文なのであっても個別に取材するケースも出てきた。棋譜中継においても情報公開が進んでいる。リコー杯女流王座戦は第一期からはほぼ全ての対局で中継があるのだが、昨年の第七期で初めて本戦の全食事情報が公開された。今期第八期では二次予選の全対局の食事情報も公開され二、名人戦・順位戦を除くと、予選から本戦・タイトル戦まで全ての対局の食事情報が公開される初めての棋戦となった。

Twitterにおいても、ニコ生公式将棋@nicoshogiが二〇一七年九月一四日から#将棋めしタグで食事情報と食事写真をツイート、アベマTV将棋ch@abematv_shogiは二〇一八年一月二五日から、日本将棋連盟【公式】@shogi_jsは二〇一八年七月一八日より『名人戦棋譜速報』の写真を用いる形で食事情報をツイートしており、今では対局のある日は有料コンテンツに課金をしていない将棋ファンであっても、手軽に将棋めしを楽しめる時代がやってきている。今や、プロの将棋の対局に将棋めしは欠かすことのできないものになっている。

5. おわりに

将棋めしは、将棋ファンが観戦できない対局場を観戦しているように感じさせる目的で誕生し、発展していった。将棋ファンは将棋めしを知ることによって将棋を観ているような体験をし、また、将棋棋士に対して親近感を覚えるツールとして活用してきた。インターネットによる生中継で対局場が観戦できるようになった現在においても、観る将棋ファンが求める情報の一つとして、今もなお将棋ファンに愛され続けている。これからも、プロ棋士の将棋の対局が続く限り、将棋めしは語られていくであろう。

引用・参考文献

- 1 棋狂子「この人を見よ」『国民新聞』一九三三年八月二七日
- 2 『国民新聞』「読者の聲」一九三三年九月四日
- 3 棋狂子「先づ腹拵へ」『国民新聞』一九三三年九月十一日
- 4 倉島竹二郎『昭和将棋風雲録』講談社、一九八五、一九頁
- 5 『国民新聞』「読者の聲」一九三三年九月二六日
- 6 菅谷北斗星『菅谷北斗星選集 秘録篇』日本将棋連盟、一九七八、七六頁
- 7 棋狂子「将棋」『文藝春秋』一九三四年九月号、一四一頁

- 8 樋口金信「相縣りの典型」『東京日日新聞』一九三五年七月八日
- 9 『将棋世界』一九三七年創刊号「棋界ナンセンス」六二頁
- 10 三猿子「食欲と優劣」『東京タイムズ』一九五〇年一月九日や、三象子「名人挑戦者決定戦」『朝日新聞』一九五〇年二月四日が代表例
- 11 松村久「私の観戦記4」『週刊将棋』一九八七年四月二九日
- 12 江國滋「メニユーが告げた」『毎日新聞』一九八四年六月二日
- 13 井上光晴「寄せを誤る谷川」『毎日新聞』一九八五年四月二五日
- 14 『将棋世界』一九八五年六月号「名人戦第二局密着レポート」五八、六一頁
- 15 福井逸治「カツオ対かしわ」『毎日新聞』一九九一年四月二六日
- 16 『将棋世界』一九八六年一月号「痛快座談会 86年は制度改革の年だ!」四二、四三頁
- 17 『将棋世界』一九八八年二月号「新春特別二天企画第二段 辛口座談会」五四、五五頁
- 18 『将棋世界』一九八四年二月号「声の団地」「拝啓倉島竹二郎様」一八二頁
- 19 『将棋世界』一九九〇年五月号「声の団地」「将棋は文化だ 活劇だ」二〇二、二〇三頁

〔将棋めし研究家〕

の狭間』『ユリイカ』7月号（第49巻第11号（通巻704号）） 青土社、P188-189

小暮克洋（2012）『王座戦観戦記』『日本経済新聞』2012年5月25日夕刊

近藤正高（2017）『棋士たちの伝説はいかにして生まれたか』『ユリイカ』7月号（第49巻第11号（通巻704号）） 青土社、P97

佐々木裕一（2018）『ソーシャルメディア四半世紀』 日本経済新聞出版社、P69-70、P349-350

鈴木大介（2017）『第7章 炎の七番勝負を振り返って』 日本将棋連盟書籍編集部 編『天才棋士降臨・藤井聡太』 日本将棋連盟、P152-153

奈良智之（2018）『新興メディア・AbemaTV とは何か?』『週刊プロレス』No.1954 ベースボール・マガジン社、P58-59

羽生善治・川上量生 他（2013）『ドキュメント電王戦』 徳間書店、P45

藤本耕平（2015）『つくし世代』 光文社、P139、P171-174

山川公生（2017）『将棋、ネット放送も熱戦 「アベマTV」が参入』『日本経済新聞』2017年2月13日夕刊

渡辺明（2007）『頭脳勝負』 筑摩書房、P98

- 8 [奈良 2018] P58-59 参考。
- 9 2017 (平成 29) 年 2 月 1 日開局。「ラス前」と呼ばれる A 級順位戦第 8 回戦の全 4 局を中継。
- 10 [鈴木 2017] P152-153 参考。
- 11 [山川 2017] 参考。
- 12 竹俣紅。女流初段。
- 13 里見咲紀。女流初段。
- 14 2010 (平成 22) 年、第 22 回将棋ペンクラブ大賞の Web 中継企画賞を北海道新聞社メディア局が受賞。「マスコミ人ならではの視点で。描かれ、多くの「観る将棋ファン」に喜ばれた、王位戦・女流王位戦ネット中継および中継ブログに対して。」が受賞理由であり、「見る将棋ファン」という用語が認知され始めたことがうかがわれる。
- 15 () 内は筆者補足。
- 16 「表 31-17 新聞社の売り上げ」公益財団法人 矢野恒太記念会 編集『日本国勢図絵 2018/19 年版』、P409、参考。
- 17 「図表 1-1-1-2 スマートフォン個人保有率の推移」総務省 (2017)『平成 29 年版 情報通信白書』、P3
<http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h29/pdf/29honpen.pdf>
- 18 「図表 1-1-3-4 スマートフォンのネット利用時間 (項目別)」注 17 同、P11
- 19 注 17 同、P8
- 20 「専門家に聞きました! SNS の過去・現在・未来」[風間・岡本 2018] でのインタビューに対する天野彬のコメント。
- 21 「Twitter でのアンケート機能による調べ」(投票数 191、2018 年 5 月 16~17 日) 田代深子「「観る将棋ファン」の情報受容について」「将棋と文学研究会」2018 年 5 月例会報告参考。
- 22 総務省『社会課題解決のための新たな ICT サービス・技術への人々の意識に関する調査報告』、2015 年、P45、http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/linkdata/h27_06_houkoku.pdf、(2018 年 10 月 17 日閲覧)
- 23 [岡本 2015] P191-198 参考。
- 24 [天野 2017]、P73 参考。

参考文献

- 天野彬 (2017)『シェアしたがる心理』 宣伝会議、P226
- 梅田望夫 (2013)『羽生善治と現代』 中央公論新社、P98-99 (初出は同 (2009)『シリコンバレーで将棋を観る 羽生善治と現代』)
- 大川慎太郎 (2018)「公式棋戦の動き」『将棋世界』2018 年 8 月号 日本将棋連盟、P191
- 大崎善生 (2011)「升田幸三 伝説の棋士」『NHK こだわり人物伝』2011 年 2-3 月 NHK 出版、p10-11
- 岡田斗司夫 (2011)『評価経済社会』 ダイアモンド社、P168
- 岡本亮輔 (2015)『聖地巡礼』 中央公論新社 P191-198
- 風見ひなた・岡本大介 (構成・文) (2018)『推しが尊すぎてしんどいのに語彙力がなさすぎてしんどい』 一迅社、P113
- 久保明教 (2017)「強い (かわいい) とは何か—将棋ソフトからみる加藤一二三と「ひふみん」

など、難解な内容に終始してしまうと、視聴者は離れてしまうという懸念があった。はからずも「指さない人」がいかに楽しめる内容にするのか、という課題が番組の制作サイドに生じるようになった。「将棋」そのものを知らない視聴者も楽しめるよう、藤井の幼少期に体験したモンテッソーリ教育、玩具のキューボロ、さらに「将棋めし」や「おやつ」、彼の身につけているグッズなども話題として取り上げられていた。

また、藤井の対局相手となった棋士にスポットがあたるきっかけともなっている。

大橋貴洸、澤田真吾、増田康弘、佐々木勇気など、有望でキャラクターも魅力的な若手棋士が「見る将」はじめファンに知られるきっかけともなっていた。

「藤井フィーバー」により、「見る将」的な楽しみ方が、「拡散」していったと評価できるのではないだろうか。

まとめ

1. メディアが新たに立ち上げ、利用者を獲得し、拡大を模索するときに、相当程度ボリュームのある将棋ファンは魅力的な層であり、アプローチをかけることは有力な手段であった。
2. IT の進展に伴い、個人の情報発信が容易に行える環境になった。マスコミからの一方的な受け手にとどまらずに、ファンは互いに共有・承認しあうことで「見る将棋ファン」という楽しみ方も認知され、将棋を語る一部分を形成しつつある。

-
- 1 第30期名人戦。1971（昭和46）年4月～6月、大山康晴に升田幸三が挑戦。「升田式石田流」を採用し、最終局までもつれ込む熱戦を繰り広げた。
 - 2 『読売新聞』1987年8月8日夕刊 参考。
 - 3 1988（昭和63）年4月14日、NHK衛星第一/BS1で第46期「将棋名人戦」第1局一第1日一として放映されたものが衛星放送でタイトル戦中継の最初。
 - 4 小川博義「第37期王位戦インターネット速報（4号,1997.3.3）」『かけはしアーカイブズ-将棋を世界に広める会』ホームページ (<http://shogi-isps.org/kakehashi/2004/07/4199733-9592.html>)（2018年10月13日閲覧）。
 - 5 [佐々木 2018] P69-70 参考。
 - 6 [羽生・川上他 2013]、初出は『週刊ダイヤモンド』2013年4月13日号。
 - 7 山田泰弘、又吉龍吾「ドワンゴは、だから採算度外視で将棋をやる 一人類とコンピュータの勝負は新たな段階へ」『東洋経済 ONLINE』ホームページ（2015年7月4日更新）(<https://toyokeizai.net/articles/-/75247>)（2018年10月14日閲覧）

「情報」や「共感」を、身体を媒介しての「体験」をくぐらせることで、より深く「繋がって」ゆく

そうして生まれてきた聖地巡礼の〈作法〉は一部の将棋ファンにも見て取れるのである。

いまや、対局中に昼食や夕食として棋士が出前を注文するメニューも、中継ブログや棋譜中継のコメントなどでも欠かせないコンテンツとなっている。

「将棋めし」として取り上げられる飲食店を巡り、棋士が注文する裏メニューを頼み、SNSで投稿しているファンもいる。「丸山定食」(＝唐揚げ定食に3個増量)や佐々木勇気の「餅トッピング」定跡は「見る将」にはよく知られている。

最近の傾向として目を引くのが前夜祭や就位式などのタイトル戦などに関連するセレモニーに参加するファンの姿である。以前では関係者、または地元の愛好者が大半であったが、今では募集されれば多数のファンが参加するようになっている。いわゆる「遠征」をして参加するファンも見受けられる。

そうしたイベントなどに参加した棋士の画像、コメントやふるまいなどが、SNSなどに投稿されるようになり、フォロワーはそれらを見て、そこでの様子を垣間見るように共有し、共感や拡散してゆくのである。

×「思い出に写真を撮る」



○「写真映えする思い出をつくる」(それをSNSで人に見せたい)

と定型化して、それを「インサイトの逆転」と天野彬が指摘した²⁴ように、これらのSNSで投稿することを念頭に置いた、動機と行為が逆転しているかのように思える行動の選択は、現代においては全く違和感を抱くものではないという。

こうして、③[体験]は①[共有]～②[承認]にフィードバックされていく。

①、②、③が循環、重層的に行われ、それらが相乗効果を生みだすことによって「沼におちる」と比喻されるように「見る将棋ファン」の「熱」が帯びてゆくのである。

「藤井」フィーバー

2016(平成28)年12月24日、名人経験者であり「神武以来の天才」といわれた加藤一二三相手のプロデビュー戦(竜王戦)から無敗の快進撃を続ける、藤井聡太。

「棋士の高野秀行は藤井について「性能の良いマシンが参戦する」と聞き、フェラーリやベンツを想像していたら、ジェット機が来たという感じ」と評している[近藤 2017]。

連日の報道によって、さらに視聴者の関心が高まってゆく。しかし、対局内容の解説

② [承認]

「将棋に関心を持ち始めたばかりのとき、誰か身近に将棋ファンはいましたか?」というアンケートでは、身近に将棋ファンがいた :17%、一人で興味を持って観始めた :83% という結果が現れている²¹。

自分の共感や関心を模索して追求できるような繋がりを、リアルな人間関係の中に新たに構築することはなかなか難しいことでもある。しかし前項①で検討したように IT の進展により個人にとって他者と「共有」することは容易になってきている。

ツイッターなどの投稿に対して、RP (リプライ = 返信)、RT (リツイート) や、ファボ (お気に入り) したり、そのアカウントをフォローすることによって、共感や同意などの意思表示をすることはボタンひとつタップすることで可能になっている。ツールによって、何らかの反応や意思表示をすることに心理的障壁が格段に下がっていることがうかがわれる。

2015 年、総務省の調査²²によると「SNS で情報を拡散するときに、情報が「社会的に重要な内容かどうか」(26.9%) や「情報の信憑性が高いかどうか」(23.5%) よりも、「内容に共感したかどうか」(46.2%) や「内容が面白いかどうか」(40.4%) が多くの人にとっての基準になるという。」[佐々木 2018]

これらにみられるように、個人にとっての「気持ち」や「共感」が情報の拡散の動機ともなりうることが示されている。

マスコミ的な情報流通の中では取り上げられなかった「見る将」的な楽しみ方も、SNS などの普及や進化によって「共有」が容易になり、共感する誰かに発見されやすくなった。「そうやって追求してみると、自分と同じような感性を持つ人が、世の中にはたくさんいることも分かってくる。そこで同じ感性を持つ人同士がさらにつながって、より追求が深まっていく。[藤本 2015]」と互いに「承認」を交わしあっていく中でそれらは育まれて、拡散・深化してゆくことになる。

③ [体験]

いわゆる「聖地巡礼」は『らき☆すた』が先駆けであるといわれている²³。2007 (平成 19) 年、埼玉県鷲宮町 (現 久喜市) の商工会と角川書店の連携によるものである。その後、『ガールズ & パンツァー』と茨城県大洗町の展開が、観光ツーリズムの成功例として有名である。

本来はフィクションであるはずの「物語」の舞台を訪れる行為。

が「受ける側」でもあります。

[岡田 2001]

他者からの発信を「共有」(= シェア) して影響を受け、さらには自分からの発信が他者とも「共有」されていくのである。それは、マスコミ的な「一方通行」な情報経路だけでなく、個人から個人へ、あるいは共感した多数が反応・拡散していくなど、ボトムアップ的な発信も少なからず行われている状況がみてとれるのである。

SNS が浸透したことで、どんなマイナーな言葉でも目に触れる環境が整いました。最近では、感度の高いインフルエンサーが出始めの面白い言葉を拾って拡散することで、次第にその言葉が使われ始めていくこともよくありますね。(中略) 例えば「草生える」のように文字特有の文化からネット用語を、上手に話し言葉に変換し、それを日常会話で使っていくケースも多いです²⁰。

[風間・岡本 2018]

「指導対局はデート」というフレーズもツイッターからファンに認識・拡散していったものである。憧れの棋士との指導対局。事前に緊張したり、その様子を伝えるときに使われる比喩的な表現である。また「指導対局はデート」なのだから、周囲から邪魔をするのはマナー違反である、というような使われ方もされている。

また、久保明教は藤井猛を「てんでー」、木村一基を「千駄ヶ谷の将棋の強いおじさん」と呼ばれている例を挙げながら、

将棋を指すことよりも観ることを楽しむ将棋ファン、いわゆる「観る将」が好む語り口には、棋士の「かわいさ」を際立たせるものが少なくない。(中略) これらの語り口は、『将棋世界』のような専門誌ではあまり見られないものの、棋士をめぐる捉え方の大きな部分を形成しつつある。

[久保 2017]

と分析している。「見る将」から発信され定着してゆくことばや流行も、将棋を語る上で一つのピースを形成しつつあることがうかがわれる。

を表した糸谷哲郎をはじめ、関西所属の若手棋士たちは「新しい将棋の楽しみ方を提案するユニット」西遊棋を 2013（平成 25）年に立ち上げ、それまでとは違ったアプローチでの普及を模索し始めた。

出演するだけのイベントとは一線を画し、棋士自らが企画・運営する形で交流イベントを実施。囲碁将棋チャンネルでは「月刊西遊棋」が放送。白鳥士郎『りゅうおうのおしごと』の監修もおこなっている。2013 年 2 月からツイッターによる発信も開始され、ファンは棋士個々のキャラクターに親しむようになっている。

「先生」と呼ばれ、遠くて偶像的な存在になりがちだった棋士が、ファンから「推し」もらえる棋士という関係性が生まれてゆく契機ともなったのではと、考えられるのである。

IT 環境の変化

個人のスマートフォン（スマホ）の保有率の推移をみると、2011 年に 14.6% であったものが、2016 年には 56.8% と 5 年間で 4 倍に上昇している。また、30 歳代以下の世代では、2013 年にはすでに 6 割を超えていた¹⁷。特に 10 代、20 代はスマートフォンの利用時間が長く、内訳をみると SNS の利用時間が長い傾向がある¹⁸。

そうした環境の変化は、私たちのライフスタイルに変化を及ぼしていくことになる。それはファンと将棋との関係性の変化、さらに「見る将棋ファン」（見る将）の顕在化にもつながっていったと、とらえられるのではないだろうか。そこで① [共有]、② [承認]、③ [体験] の 3 つの側面から検討してみたい。

① [共有 (= シェア)]

「40 代以下の世代は、既にパソコンよりもスマートフォンの利用率が高くなっており、若い世代から順次、パソコンからスマートフォンへ利用の中心がシフトしつつある」¹⁹ スマホの特徴として、個人で使用する情報端末であることが第一にあげられる。私たちはスマホを帯同して過ごすようになってきている。これはインターネット経由で自分以外と常時繋がっている環境にあることを意味している。

今までマスメディアからの影響を一方的に受け入れるだけの存在だった一般人が、初めて自分から不特定多数の人に向けて自分の意見を述べるシステムを手に入れたのです。ネット内では誰もが情報発信者、つまり影響を「与える側」になり得るし、同時に誰も

る情報の発信は棋譜や解説を理解できる棋力を持つ、ある程度のリテラシーを持った「指す将棋ファン」を前提としたものであったといえる。対局の状況描写やエピソード、「将棋めし」のような記述があっても、それらは対局結果や棋譜を伝えるストーリーにおける、スパイスのような役割であった。

一般的なイメージとして、将棋は楽しむのも何か難しそうに思われてるのではないのでしょうか。

[渡辺 2007]

将棋と言えばあくまでも「指す」もの、将棋とはふたりで盤をはさんで、戦うもの、というのが常識である。(中略) 将棋を指さない人、将棋を弱い人は、将棋を観てもきっとわからないだろう、と思われている。

[梅田 2013]

2009 年以前では「見る将棋ファン」は顕在化していないことがうかがわれる¹⁴。

将棋を指すのは弱くとも、「観て楽しむ」ことは十分できます

将棋もそんなふう（スポーツをみるよう）¹⁵に無責任に楽しんでほしい

[渡辺 2007]

渡辺、梅田が提唱していたものは「見る将棋ファン」（見る将）の姿に重なって見える。将棋とファンとの関係性は当時と現在とではどこに差違があるのだろうか。

「西遊棋」の活動

日本将棋連盟にとって新聞社は主要なステークホルダーである。しかし、インターネットの進展に伴い、新聞社は従来のビジネスモデルでは立ち行かなくなるのではと不安視されていた。販売収入は 12,839 億円（2000 年度）から、10,208 億円（2016 年度）の減少にとどまっているものの、広告収入では 9,012 億円（2000 年度）から、3,801 億円（2016 年度）と大幅に落ち込んでいる¹⁶。

そうした将棋を取り巻く環境が先行き不透明な中で、「将棋界は斜陽産業」と危機感

AbemaTV

2016 年 4 月にインターネットテレビ AbemaTV が本放送を開始した。

サイバーエージェントの藤田晋が「10 年腰を据えて」⁸ という決意のもとに、巨額の資本を投じ、テレビ朝日との共同出資でこれを開局させた。多チャンネルで番組のクオリティーも高く、地上波の放送との差異がなくなりつつある。

将棋においても「将棋チャンネル」が開設される⁹ こととなり、「目玉企画が欲しい」という要望に応える形で、鈴木大介と野月浩貴がプロデュースすることになり¹⁰、新四段がトップ棋士と対局するという異例の企画が実現した。史上最年少でプロデビューした藤井聡太。若手からトップ棋士まで選抜された棋士達を相手に七番勝負を繰り広げた。

毎週日曜日 19 時から放映され（2017（平成 29）年 3 月 12 日～4 月 23 日放映）、1～2 勝でさればという大方の予想だったが、6 勝 1 敗という結果は将棋ファンに衝撃を与え、開設まもない「将棋チャンネル」は注目を集めることに成功した。

AbemaTV の編成部プロデューサー塚本泰隆は「将棋の対局は長時間に及ぶので、チャンネルを頻繁に切り替えて楽しむ視聴者に対応しやすいネット放送とは相性が高い」¹¹ と、多数のチャンネルを展開する中に、「将棋」番組が共存するメリットを説明している。

6 月 7 日、竹俣¹²–里見咲¹³ 戦がアベマ TV で中継されたのだ。女流棋戦のタイトル戦ですらめったに放送されないのに……。

[大川 2018]

タイトル戦のほかにも、最終局ではないが注目度の高い順位戦や他棋戦の下位予選でも、注目度の高い棋士の対局を中継するなど、視聴者に訴求する番組編成も行われている。

また、収録された対局であっても、いつでも見始められるオンデマンド視聴にはせず、放送時間が固定されているリニア視聴にしている点も、番組の視聴を習慣化してもらおうという狙いを見て取れるのである。

2. 「ファン」にとってのメディア、「見る将棋ファン」の顕在化

冒頭では名人戦の報道を心待ちにする将棋ファンの姿を紹介した。当時の将棋におけ

「自らのニックネームとして「みうみう」を公認し（中略）、一気にはじけまくって話題を呼んだ。」[小暮 2012] と、それまでは朴訥で研究一途というイメージだった三浦弘行のように、視聴者とのやり取りの中で棋士のキャラクターが垣間見えることもある。これもニコニコ生放送での将棋中継の特長の一つである。

ドワンゴの将棋中継は、将棋ソフトとプロ棋士との対決の歴史に重なってゆく。

2010（平成 22）年 10 月、清水市代と「あから 2010」の対局。2012（平成 24）年 1 月、米長邦雄と「ボンクラーズ」との対局が行なわれた。

ドワンゴの川上量生は羽生善治との対談の中で、「アニメ、政治、そして将棋」をニコニコ動画の三大コンテンツと発言している⁶。この当時（2013 年）のドワンゴがユーザー拡大にむけ、どの分野に関心をもっていたかがうかがわれる。

第 2 回将棋電王戦は対抗戦形式で行われた。2013（平成 25）年 3 月、ponanza が佐藤慎一を破り、将棋ソフトは初めてプロ棋士に勝利した。また、敗勢の形勢を 230 手に持将棋（引き分け）に持ち込んだ塚田泰明—Puella a の対局は翌日のニュース番組「真相報道 バンキシャ!」（日本テレビ 4 月 14 日放送）で特集された。

2015（平成 27）年 2 月、西武ドームにて「電王戦× TOYOTA「リアル車将棋」」が行われた。野球場に巨大な将棋盤が設置され、自動車を将棋の駒に見立てて、羽生善治と豊島将之の対局が行われた。羽生の駒となるトヨタの過去の名車 8 車種は、普段見られない車種ということで話題となり、ドライビングテクニックも見どころの一つとなっていた。この生放送は 10 時間にもおよび、50 万人以上の視聴数を記録した。

「熱心なファンが多い将棋コンテンツを充実させることは、年齢が高いユーザーへのアプローチとして有効な手段になる」と、ドワンゴ広報のコメントを紹介した上で、東洋経済の山田泰弘、又吉龍吾は次のように分析している⁷。

有料会員の獲得に加え、広告収入の拡大も重要なカギとなる。将棋という伝統と格式のあるジャンルに力を注ぐことで、高単価の広告を出稿する大企業の関心を高めていくのがドワンゴの戦略だ。

ドワンゴはタイトル戦を主催するまでに将棋との関係を深めていく。叡王戦はタイトル戦に昇格し、序列 3 位のタイトルと位置付けられた。新棋戦の主催が IT 関連の企業ということは、これまでの時代の趨勢が現れて象徴的なことである。

ライト放送と時間帯をすみ分ける形で放送されていた。

「銀河戦」や他の将棋関連番組が放送され、アマチュアであった瀬川晶司が好成績をおさめ、その後のプロ入りへつながる契機ともなった。

2015（平成 27）年 6 月より、将棋番組専門のインターネットサービスとして「将棋プレミアム」を開始する。後述の AbemaTV の例もあるが、利用者にとってはインターネット上における放送と通信の区別が曖昧になりつつある。

ネット中継

1996（平成 8）年、西日本新聞とリコー将棋部による王位戦における棋譜速報が、インターネットにおけるプロの将棋対局の棋譜速報では最初の例といわれている。

リコー将棋部で提供していた『棋譜鑑賞のページ』の形式を転用し、盤面・棋譜解説のページ（HTML ファイル）を作成。西日本新聞のサーバーへ転送。という作業フローで実現された。

「将棋の七番勝負の棋譜ですら入手が難しい中、インターネットを利用して速報に近い形で勝負の行く末を楽しむことができ、画期的なイベントになる」⁴と、情報を渴望された当時の状況がうかがえる。

また同年、倉敷市が「インターネット 1996 ワールドエキスポジション」のネット博覧会に参加。その一環として倉敷藤花戦の LIVE 中継がおこなわれた。

当時のインターネットはダイヤルアップの時代で、電話回線からアクセスポイントに接続する形で行われており、電話料金に従量で課金されていたため、常時接続して楽しむことはまだまだ程遠い状況であった。ヘビーユーザー向けに深夜時間帯に定額サービス「テレホーダイ」が導入されていた。

しかし、本格的に環境が整うにはブロードバンド接続の普及を待たなければならなかった。自宅でパソコンからインターネットを利用している世帯のうちブロードバンド利用世帯は 2003 年末に 47.8%、2004 年末に 62.0% となり、消費者向けのネットサービスがある程度の規模になるのは 2004 年以降であった⁵。

ニコニコ生放送（現：niconico）

ニコニコ動画の特徴の一つに、視聴者のコメントが動画上に「弹幕」のように流れて見える画面設計がある。動画とコメントをあわせて見ることで、誰かと観ている、という一体感も加わってくる。

IT 進展による新しいメディアと、 将棋とファンとの関係性の変遷 ——「見る将棋ファン」を中心に

椎名秀明

1. 「将棋」をとりまく新しいメディア

届けられたばかりの新聞をポストから取り出すと、部屋に持ち帰るのももどかしく、玄関のコンクリートの上で広げ、紙面をめくります。(中略) 私は、コンクリートの上に正座したまま、時の過ぎるのも忘れて、熱戦の一手一手を伝える棋譜や記事を食べ入るように読み続けていました。

[大崎 2011]

47 年前、名人戦¹の推移を知ろうと新聞の配達を心待ちにしていた将棋ファンの少年の様子が描写されている。将棋史の重大なトピックスとなった、この時の名人戦であっても主催ではない他紙では結果を伝える十数行程度の記事であった。将棋の情報は紙面の制約もあり情報量は限定的で速報性を伴うものではなかった。

衛星放送 (BS・CS)

1989 (平成元) 年、川崎市民プラザ (川崎市) において竜王戦第 1 局 2 日目の午後 3 時から終局まで約 400 人ものファンに公開された。

さらに、対局の様子が衛星放送で中継されるようになる。しかし、受信設備設置にかかる費用の割高感もあり、衛星放送の受信契約は鈍い出足となっていた²。普及のために地上波放送との差別化を図り、優良コンテンツが求められていた。前述の竜王戦に先駆けて、1988 (昭和 63) 年 4 月に名人戦³の対局中継がされており、NHK-BS では竜王戦、名人戦の中継が定着した。

1991 (平成 3) 年に囲碁将棋チャンネルがケーブルテレビ向けに配信を開始する。CS 放送は当初、郵政省から「放送にあたる恐れがある」との疑念から、集合住宅向け、CATV 経由での放送に限定された経緯がある。囲碁将棋チャンネルは日建学院のサテ

2

近代メディアの中の将棋

文学と将棋
スタディーズ

「稽古事」から「興行」へ？

——将棋と文学の出会わない雑誌としての『将棋新報』

瀬尾祐一

「将棋は学問です、こゝらの先生方が医学を研究していると同じ事なんです

「マア、呆れた、学問なんて、将棋は床屋とか車屋のおつ、さんが指してるでしょう、あゝ云ふ人達に学問の研究なんか出来るでしょうか。

「将棋礼賛（其一）」『将棋月報』五月号（一九二九）傍点原文

一 はじめに

「将棋と文学」という主題のもとで検討を行いうる対象のひとつに、商業専門誌が挙げられる。本論集所収の矢口（二〇一八）では、この主題を「将棋雑誌」とその書き手としての作家」

という形で解きほぐしつつ、専門的知識を供する媒体としてのあり方と、広範な読者に訴える媒体としてのあり方の両者に折り合いをつけるため、『将棋世界』において、同時代の愛棋家作家による寄稿が求められていたことが示されている。

本論文では、矢口論文で示される主題のパラフレーズを引き継ぎつつも、専門誌と文学者の間に見られるこのようなあり方が未だ自明ではない時代に目を転じてみたい。そのうえで、作家が専門誌に関わらないという事態を記述することを通じて、将棋と文学が関わるといふ事態の特異さを理解する手立てにしたい。

ここでは、作家と専門誌の出会わない場の一例として『将棋新報』（明治四十一年二月～大正一二年八月）をとりあげる。『将棋世界』上で作家が要請されるにあたつて認められていた課題を、「商業専門誌が、広範囲にわたつて読者を維持・獲得することを目的として、専門的知識を教授する媒体としての性格と非専門的情報を掲載する媒体としての性格の間で、どのように折り合いをつけるか」と定式化するなら、『将棋新報』において訴求をめぐるこの課題は、どのような形であらわれ、どのようななかたちで対処されていたのか。本論では、『将棋新報』自身が宣言する役割に注目することで、この間に答えていきたい。本論の構成は以下のとおりだ。まず第二節では、従来の将棋史では焦点があたりにくかった『将棋新報』および関連団体と

しての将棋同盟社についての基本的な情報を述べる。続いて三節では、『将棋新報』上での言明や目次構成から、雑誌の性格を指摘する。この節での検討を踏まえて、四節では『将棋新報』を芸能の商品化という大勢の中に位置づけることで、文学と将棋が出会うという事態の意味を探っていく。

二 『将棋新報』と将棋同盟社

本節では『将棋新報』の内容に関する分析に進む前の準備として、雑誌の基本的な特徴を、将棋同盟社という団体との関係、とりわけ雑誌の書き手とコンテンツの二つの面から確認する。

二一 将棋同盟社の設立と書き手の供給

一九〇八（明治四一年）九月一日、社主・黒岩周六の趣味の広さもあり娯楽記事の開拓に熱心だった『万朝報』¹の一面で、事前に選抜していた高段者たちの対局の棋譜が掲載された。

その三か月後の同年一二月、『将棋新報』が将棋新報社から発刊された。将棋同盟社の設立は、雑誌の発刊からさらに数ヶ月遅れてのことだった。団体は次に述べる定式会、つまり定期的な公開対局の場の主催を主な活動としていたが、早くも第二号で次のような社告が出ていることは興味深い。

購読者を会員組織として、市内の人々のために毎月二、二回の定式会を催ふし（略）候へ共「ば」、購読者中にて毎月三十錢以上五十錢以下、（雑誌共）の会費支出のもの百人を得ざれば会場維持の方法がたし事と存じ候に付暫く時機を待ち兎も角購読者諸君の御意見を伺ひ置き候ふ

「社告のいろいろ」『将棋新報』一巻二号（一九〇九

但し旧字体は新字体にあらためた。以下同じ

雑誌の発行による読者の組織化は、定式会開催の下準備となっていた節がある。当時の将棋界の関係者にとって定式会が重視されていたことが察せられる。

一九〇九（明治四二年）年八月に結成された同盟社（発足当時の名は将棋同盟会）は、その後雑誌にとって主要な書き手を供給するとともに、団体の分立に伴って雑誌を機関誌化することになる。後で紹介する雑誌目次からも分かるように、団体と雑誌の関係はまずもって人材面で密接だった。そもそも雑誌社自体、『万朝報』で将棋や相撲の記事を担当していた三木貞一が主催したものだったこともあり、当初から万朝報の棋戦出場者が多く書き手や評者として登場していた。雑誌原稿の多くが棋士たちによる無報酬か、それに近い対価での協力だったとくり返し述べられている。雑誌のメインコンテンツとなった講座

類は、そのほとんどが棋士の名の下で書かれていた。

二二 定式会によるコンテンツの供給

書き手の面に加えて、雑誌のコンテンツの面での関わりも確認しておこう。

同盟社は二十名程度の棋士を抱える一方、それとは別に「毎月三十銭を拠出するもの」を正社員としており³、一定の技量を備えた人々に加えて、一定の社費の支払い能力を備えた人々を取り込む会員制をとっていた。後年（一九二〇年）のデータになるが、『将棋新報』に掲載された会員リストから支援者層を推測するならば、東京府・東京市、とりわけ本所・深川・日本橋・京橋・本郷の在住者が多い⁴。そもそも、同盟社の発足時にあたっては日本橋区を中心とする商人らの支援も大きかった⁵。いわゆる「下町」への支援者層の偏りは、これらの会員が所属棋士の稽古筋であったり所属棋士が師範をつとめる将棋会所の来訪者であったりするなど、稽古を受ける「客」としてすでに棋士と知遇を得ていた人である可能性が高いことを示している。

そして定式会には所属棋士に出席義務が課せられていたこと⁶、会のおほとんどが日本橋・京橋の貸座敷で開催されたこと⁷、参会者を意識して会を居心地のよい場所にしようとする工夫が

随所に施されていたこと⁸、会の出席にあたつて社員の参加を無料にしていたこと、社員以外も参加可能な開かれた場だったことなどから、定式会が愛棋家Ⅱ支援者への支援の見返りのための場であり、また参会者の中から社員となる人を発掘するための場だったことがわかる。当時の雑誌は、定式会という場を次のように伝えている。

此会〔定式会〕は同盟社の棋士が技術の研究を兼ねて親睦を計り来客に対しては対局をお目に懸けると云ふのが主意となつて居りますので来客諸君は此日には十分各棋士の指口と体度とを見て参考とも為し楽しみとも為すことが出来ます

〔天狗将棋会の発案〕『将棋新報』二巻四号（一九一〇）

定式会は、『将棋新報』にとつてもまた重要な原稿の供給源だった。所属者による継続的な棋譜の生産を行う団体とのつながりにより、雑誌は新聞などには出ず将棋新報でしか見ることのできない棋譜を、常に独占的に供給することができた。やや後の時代の雑誌に掲載された言を見てみよう。

本誌が斯く永続して行くのは記者だけの手柄ではありません、（略）第二には同盟社の棋士が定式会に於る棋譜を登載す

ることを特約して居てくれるので斯界に於ける新しい智識を供給することが出来るためもあります。単に棋譜と云えば昔からのものが何幾もありますが、斯るものにも昔のままばかりでは固定して面白くありません、新らしき時代には又新しき指しぶりも顕われますので、何しても生れた人が新らしく指たものには別の又新らしき気分が迸ばし居りますので、必ずしも棋譜でさえあれば昔も今も同じであると申すことは出来ません

「棋壇近況」『将棋新報』九巻四号（一九一七）

傍線部は引用者。以下同じ。傍点原文

このように、団体にとつても自らを存続させるうえで重要な活動だった定式会の主催は、同時に雑誌にとつても大きな意味を持っていた。後に見るように、定式会の棋譜は毎号「現今名家手合」として継続して掲げられ、雑誌の主要なコンテンツである「講座・解説物」の主軸を担っていくこととなる。

三 雑誌の性格の検討

検討する『将棋新報』が、その発刊時から書き手やコンテンツの面で、同時代の棋士団体と深い関係を持っていたことを述べた。団体とこのような関係を持った『将棋新報』は、具体的

にどのような内容を盛り込むべきとされていたのか。ここでは、『将棋新報』自身が明示する役割や、その役割を受けてどのように誌面が構成されていたのかを明らかにしたい。そうすることで、広範な層に訴求するいうときに、文学者の執筆を求めることは異なる方策が取られていたこと、ゆえに将棋雑誌といえどもその「文学」との関係は、後継の雑誌と大きく異なるものであることを確認する。

三―「研究」のための雑誌

棋譜だけを並べたかつての『将棋新誌』などと異なり、¹⁰、そもそも『将棋新報』にはさまざまなことばから成る文章が載っており、それまで定式会とセットで発刊されていた定期行物とは一線を画していた。つまり『将棋新報』では、後の『将棋世界』と同様、将棋に関する専門的な知識以外の情報も積極的に掲載されうる余地があった。

しかし、雑誌が自らに課した役割についてくりかえし言及している個所を見ると、『将棋世界』とは異なる自己規定が見えてくる。「本誌は●●にとつて有用である」「この雑誌は●●のためのものである」と明言がなされるのは、発刊から数年間が特に顕著である。ここでは、発刊からまだ幾何も経過していない頃に見られる自己規定をいくつか引用してみよう。

一寸将棋の練習に就て一言いたしますが将棋は習ふには左程困難なものではありません、(略)但し習ふにも道がありまして唯滅茶苦茶に指して居つては何時迄経つても進歩しません。其れには定跡といふものがあつて駒落は駒落、平手は平手の指方がありますから定跡を稽古しなくては不可ません、将棋は一に定跡、二に寄せ、三に詰と云ふ位で定跡が一番必要であります。其れゆえ本誌に於ても定跡講義は最も力を尽くしてあります。又現今名家手合といい、名家棋譜といい多少は違つても皆定跡に依つて指してありますから之れを順序良くお調べあらば直に長足の進歩を来すようになります

「雑説」『将棋新報』一卷七号(一九〇九)

〔定跡を研究することによつて弱くなった、という投稿に答えて〕

定跡を稽古せずに指して居る人は所謂笨党で初段へ二枚落ち位までは自流の力で指しましてもソレから上へは十年たつても決して上達はいしません(略)若し心棒「ママ」して定跡に依つて稽古いたしますと段々将棋と云ふ物の真理が分つて参りまして笨党の指すのが隙だらけに見えて参ります(略)。

従来の定跡書に依りますと昔の東海道五十三次を歩いて行く如

きものでありましたが新報の定跡講義は之を汽車で行くやうに速成せしめんと考へてありますがよしや徒歩と汽車ほどの相違はなくとも普通汽車と急行車ぐらゐの便利はあらうと思ひます

「定跡を字ばずして将棋の上達せし人ありや」

『将棋新報』一卷八号(一九〇九)

将棋を指すならば勝たなくては娯楽の目的を達しません、強くなうとする希望を抱いて居らなくては娯楽になりません、将棋新報は読者諸君に此娯楽の目的を達せしむべく種々の材料を供給して行くのでありますが、ソレには毎度申す如く定跡の研究が第一の要点であります

「将棋は如何にして勝ち如何にして負けるか」

『将棋新報』一卷九号(一九〇九)

これらの文章から、『将棋新報』が(少なくとも発刊当初において)自ら明示的に押し出していた役割は、読者の定跡研究に資する教材であつたことが理解できる。定跡を研究する必要性を説く記事は、定跡の研究に資する雑誌としての、『将棋新報』を打ち出す文章中に多く掲出されている。たとえば、はじめの二つの引用は進歩・上達という技量の向上に資するためとして明示されている。三つ目の引用では、将棋に興じる中で果たさ

れるべき目的（勝つこと）を置いたうえで、その目的を達成するために定跡研究が必要であること、定跡研究のためには『将棋新報』が有用であることが並べられ、将棋の楽しみと定跡研究の必要性と『将棋新報』の有用性が結びつけられている。ここから、少なくとも発刊当初において『将棋新報』は、定跡を「習う」「稽古する」ための雑誌として登場していたことがわかる。

定跡研究の必要性を読者へ啓蒙するという取り組みは、発刊から数年後に変化を見せ始める。たとえば発刊三年目に入ったある号では、次のように宣言している。

将棋新報は平易を旨として定跡の講義を出し之まで我流に指

して居た処の笨党に対して本筋のことを吹き込む考へであつたが読者は兎角に研究よりも噛み合ひを好んで定跡に依つて順序に上達するのを面倒のやうに心得て雑誌を引續て研究することを中止し相手を求めて指し合ふ（略）を楽しみとするものが多く折角雑誌で気永に講義しても面倒がつて喜んでくれぬのは困る次第である。併し何百人の読者は第一号より引き続き愛読して居てくれるから之れ等の人々は必ず利益を得て居ることであらうと考へる故に本雑誌は益す今の目的を貫く主意ではあるが然りとて初心者に分らぬと云ふ人のあるのに「何に分らぬ

事はない」と威張て居ても読者の意に背くことゝなるので今後は時々笨党の喜ぶことも掲載して行く事に致さうと思ふ

「笨将棋」「将棋新報」三巻四号（一九一）

ここに見られるのは、定跡研究に馴染みのない「笨党」にも受け入れやすい、ごく平易な内容の講座を置く試みだ。教材の易化を図り、より研究意欲やレベルの低い者にあわせて誌面づくりを行おうとしているのが見て取れる。同種の試みは、三年ほど経過した「初心者への記事」（『将棋新報』六巻三号（一九一四））にも見られる。要約を示すと（「」内は引用部）、『将棋新報』は研究材料も載せていく方針であり、従来定跡の変化だけを並べるだけでなく、いちいち講義をつけたほうがいいということをやってきた。しかし「多くの読者中には今一層初心のものを掲げよとの注文が沢山ありまして」、これももつともなことなので「極々平易で如何なる初心者にも心に入るように将棋の心得から定跡のお話を掲げることといたしました」。このような平易な解説は、力量のある人ではなく初心者に読んでもらうもので力量ある人は大目に見てほしい——。このような文句の下、同号から始まる「将棋魁之巻」では「将棋の上達は先づ定跡を学ぶに在り」と、あらためて定跡を学ぶことの必要性が、戦争における陣法の比喩をまじえながら丁寧に解説され

る。発刊当初の自己規定と数年後の文章を比較すると、定跡研究の必要性を説き読者を啓蒙することから、啓蒙に与することのない読者層（研究よりも囃み合ひを好んで定跡に依って順序に上達するのを面倒のやうに心得て雑誌を引続て研究することとを中止し相手を求めて指し合ふ）者たち）のため誌面自体を変えてゆこうとすることへ、雑誌の取り組みに変化が生じていることがうかがえる¹¹。

しかしながら、本論でもっとも注目したいのは、この変化の中でも雑誌が自らに課した教授的な役割は容易に薄れていないという点だ。発刊から数年後においてもなお、雑誌が訴求すべきであり訴求しようと考えられた読者は、あくまでも研究意欲に乏しい者たちであり、言い換えるなら雑誌を教材として用いる可能性を秘めた人々だった。

三二 まじわらない講座・解説物と娯楽物

定跡研究に資する教材的な役割を自ら言明するような文章は、必ずしも事あるごとに明示されていたわけではない。しかし、この性格は雑誌発刊中、大きく揺らぐことはなかったと考えられる。このことを目次から裏付けてみたい。

本研究会のHP上に公開されている『将棋新報』総目次¹²では、確認することのできた『将棋新報』目次および当該コンテ

ンツの掲載されたページの一覧を見ることができる。

先の引用（「雑誌」『将棋新報』一卷七号（一九〇九）に現れている「定跡講義」、「現今名家手合」、「（古今）名家棋譜」の三つは出版当初から廃刊までおおむね毎号一五〜二〇ページ程度と半分以上を占めており、量的に見て主要なコンテンツだった（雑誌全体のページ数は変化しているものの、約三〇ページ強で推移している）。さらに実際の対局の棋譜を素材として解説を行う「実戦講話」（四巻三号（一九二二））や、江戸時代の棋書の採録（「将棋精選註釋」など）を加えると、手筋や定跡といった専門的情報を教授することを念頭に置くコンテンツで、誌面の大部分が埋められていることがわかる。

こうしたコンテンツを「講座・解説物」と呼ぶならば、『将棋新報』の教材的な側面を担っていた講座・解説物は、ページのなかでも常に大半を占めていた。もちろん『将棋新報』は講座・解説物のみに埋めつくされていたわけではなく、たとえば研究に関する啓蒙的記事、小説・随筆など読み物、棋士の活動や将棋会の動向を伝えるもの、読者・記者による意見表明、将棋や棋士にまつわる小話、他雑誌の文章転載——などがあつた。ただしこれらは分量としても少なく、だいたい冒頭と末尾に数ページおかれる程度だった。

もっとも、古今の棋士にまつわるエピソード、棋士を主人公

とした小説、棋士自身による漫遊録など、小説・随筆のような娯楽的な読み物はあつた点は注意したい。だがこれらの読み物記事は、①雑誌の末尾にまとめて置かれることが多くかつ毎号掲載されているわけではなかったこと、②書き手は多くの場合、匿名か筆名であったこと¹³、③分量自体が僅少なことで、④上で触れた『将棋新報』にとつての課題に基づく様々な工夫の中で直接扱われなかったこと¹⁴——という四点において、講座・解説物に比べ劣位にあつたと考えられる。たとえば「棋士魔窟に入る」(八巻一〇号(一九一六))のようなフィクションの連載が、あくまでも「七六歩、三四歩の倦きた時のお慰み」と明示されていたように、「主」のコンテンツとして講座・解説物があり、「従」としてここに示したような記事があつた。娯楽的な読み物記事は、あくまでも「従」に属していたのであつて、「棋士と読み物陣が両輪となつて…紙面を構成する」というイメージ(矢口二〇一六四)とは比すべきものもなかった。上記のような不均衡な関係のため、講座・解説物と娯楽的な読み物は同じ誌面上にあつても、書き手の面ではほとんど交わることはなかった。「現今名家手合」「定跡講義」「古今」名家棋譜」「実戦講話」、江戸期の棋書解説などは、いずれも棋士の名の下で書かれていたが、それ以外の記事は(一部を除き)棋士の名の下での誌面作成はなされていなかった。

三・三 『将棋新報』にとつての課題と対応

以上を見たらうえて、『将棋新報』の発刊にあたつて、どのような課題が認識されていたのかを確認する。

まず、定跡研究の必要性を説いたり、教授する内容を变化させたりする際、将棋を研究する姿勢を持たない人々についてくりにかえし言及している点に注目したい。定跡を研究する必要性をくり返し述べるのは、そもそもその必要性を強く受け入れていないか、仮に受け入れていたとしても継続的な購読を行うほどには研究をする姿勢が根づいていなかった層がいる¹⁵、という認識があつたからだろう。そこで問題となつていたのは「定跡に依つて順序に上達するのを面倒のやうに心得て雑誌を引続て研究することを中止し相手を求めて指し合ふ」と言われるやうに、いったん購読をはじめても中止してしまう読者が多数いるということだ。難易度を下げた講座の開始も、定跡研究を行わないために棋力も低いであろうと考えられる読者らが、継続的に研究購読を続けられるようにするための工夫だったと考えられる。つまり『将棋新報』で課題とされていたのは、たとえば将棋そのものが指されていないとか普及していないということではなく、特定の遊び方(研究)について価値を認めない層、研究の重要性を認識し、継続的に購読を続ける層が少ないということだった。

この課題は容易に解決しなかったようで、発刊百号を記念した冒頭の文章の中でも嘆き交じりに述べられている。

元来を申せば囲碁よりも将棋の方が一般的に行われて居るのでありますが何ゆゑか将棋を弄ぶ人には書籍又は雑誌等に依つて研究的に上達を計ると云ふよりも只々打ち合つて一時間に三番も五番も指して楽しんで居るものが多く本誌が何ほど研究の資を供したいと思つても之を補けて發達させようとの志のものが少ないので今日百号に至つても著しき進歩を見ることが出来ないであります

「棋壇近況」『将棋新報』九卷四号（一九一七）

この文章から、雑誌が問題視していたのは普及具合ではなく（むしろその面では囲碁よりもすぐれている、と書き手は認めていた）、遊び手の態度であつたことがはっきりとわかる。

ここから続けて指摘できるのは、『将棋新報』が、あくまでも自らが明言し続ける教材としての役割を保ちながら、その範囲内においてこの課題の解決を図ろうとしたことだ。課題に対して試みられたのは、講座・解説物以外のページに多くの量を割いたり、外部の作家に依頼した随筆を載せたりするという対応ではなかつた。雑誌は、読者に研究（購読）を続けてもらう

ため内容を易化したり研究の必要性を説いたりするというように、教材的側面を担うコンテンツの魅力を高めるという方向で対応していた。その意味で、雑誌は教材としての性格を終始変えることはなかつた。

ここまでの議論をまとめると、次の三点が指摘できるだろう。

- ① 講座・解説物を主眼とする教材的な側面が自覚され、かつそれが読者に向けて表明されていたこと。
- ② 研究を続ける姿勢を持った層が少なく講座・解説物を主眼とする雑誌が継続的に購読されない点が課題とされていたこと。
- ③ しかし、上記の課題解決への取り組みはいずれも、教材的な性格を維持したまま、講座・解説物の工夫という形で行われたこと（＝教材としての役割を担わないその他記事の増加という方向をとらなかつたこと）。したがつてこのような取り組みがなされる程度には、雑誌の教材的な側面が強く意識されていたこと。

このような特徴を備える雑誌では、娯楽的な読み物を担当する中で書き手が将棋の内容に批評的なまなざしを向けること（矢口論文で述べられるようなまなざし）などは起こりにくかつたといえる。

四 「稽古事」から「興行」へ

ここまで、将棋と文学が出会わない場としての『将棋新報』を見てきたが、以上の検討を踏まえたうえで、両者が出会うという事態をどのように理解できるだろうか。

芸能史・遊芸史の領域では、江戸時代において芸能教授の商品化の趨勢が進む中¹⁶、お稽古に興じる人口の拡大と¹⁷、全書や図説、啓蒙書、手引書といった出版物の隆盛の結び付きが注目されてきた¹⁸。膨大な数の門弟を抱えたジャンルにおいて、教授者たちは自ら生計を営むため、人¹⁹による教授のみならず印刷物を介した教授までも盛んに行ってきた。この動向は、明治期以降マスメディアの発達の中でいっそう加速していった。

明治時代末年ぐらいから諸芸能が出版文化の世界に本格的に進出しはじめる。(略)教科書や月刊誌の出版、あるいは新聞を通しての不特定多数の弟子を対象に芸能の普及がすすめられた。初期の芸能の雑誌類も創刊・廃刊を繰り返すことが多かった²⁰。

将棋もまた、芸能教授の商品化という大勢の中にあつた遊芸の一ジャンルであり、²¹この盤上遊戯に関する高度な知識を用いて職業的活動に従事することは、明治維新を経て御三家が解

体された後もなお可能だった²²。

講座・解説物の量の多さや、書き手の面で棋士が中心だったことを踏まえると、『将棋新報』も、紙上を通じて教授を行うことを目的とした印刷物文化の延長にあるものとして理解できる。たとえば、師匠につくと大変な費用や手間がかかるという点に触れつつ、「本社は此遺憾を減ずるために本誌に於て種々独習の上達法を研究して昔に無い定跡講義とか実戦講話其他いろ／＼のことを掲げて月々師につくの暇と費用を省くことを考へて居ります」という誌上の言明(「将棋の研究に就て」『将棋新報』八巻九号(一九一六)や、「斯道に関する口伝秘密を丁寧心に編したれば親く大家に就て稽古すると同様何人も有段に至るべき唯一の教科書なり」(『万朝報』大正三年二月三日)という広告に端的に現れるように、講座・解説物は、人による教授と類比的に捉えられていた。三節で見た雑誌の取組は、「書き手―読み手」という関係を「師匠―弟子」と言いうるような関係に重ね合わせることで、研究意欲の乏しい読者を勤勉な「弟子」として馴致していくものだった、とまとめられる。

他方、神田由築が指摘するように、遊芸というジャンルは教授とは異なる商品化の局面があつた。

遊芸の商品化に関しては、すでに江戸時代において「興行体系の文脈に取り込まれつつある局面」と、稽古代や免許料とい

う形で進行する局面の分岐が生じていた²⁵。ひとまず前者の局面を「興行」化、後者を「稽古事」化と呼ぶなら、「稽古事」化とは教授活動の商品化であり、そこでは「師匠―弟子」という関係の編成を伴っていた²⁴。

一方、『将棋世界』が発刊され始めた昭和一〇年代にあつて、団体と愛棋家はこれとは異なる関係を着実に構築していた。明治末から始まった新聞棋戦事業²⁵が、大正末期の報知新聞による団体間棋戦の開始、昭和初期の読売新聞の参入、そして東京日日新聞による名人戦創設などを経て大規模化する中で、棋士団体と愛棋家の関係は、棋士団体内部のメンバーが対局を行い、それを愛棋家が観るという関係、いわば「演者―観客」とでもいうような興行的関係の下で再編成されつつあった。

もちろん、すでに将棋同盟社の活動期にもこうした関係があつたことは、定式会が、「棋士が技術の研究を兼ねて親睦を計り来客に対して其の対局をお目に懸ける」ことができる²⁶とされていたことから明らかだ。同盟社にとって、この会の参加者が支援者と重なっていたことは、二節で述べたとおりである。

だが、新聞棋戦事業は、参観の禁止という措置をとることにより、対局の現場にすることができないもの（「読者」）に対して対局の秘匿性を高めながら、同時にその場に居合わせることでできる唯一の存在（「観戦記者」）による報告を紙上に掲載す

ることで、将棋の対局を、紙上を介しての興行として成立せしめた点で特異だった²⁶。そして、対局をその場に不在の「観客」（「愛棋家」）へ向けて書くため新聞社が召喚したのが、大衆文学の執筆に通じた者たち（菊池寛であれ菅谷北斗星であれ）だった。

このことを踏まえると、将棋と文学の出会いとは、単に文学（者）が将棋の商品化に関わつたというだけに留まらず、将棋という一芸能の商品化を支える論理が転換したことの現れと捉えることができる。この転換とは、（少なくとも）新聞棋戦事業と積極的に手を結んでいった大都市部の専門棋士団体にとつては、団体が訴求する愛棋家を、「弟子」という修練の途上にいるポジションから、団体メンバーのパフォーマンスを観る観客的存在へと位置づけることによって団体としての存続を図ろうとする中で生じたものだった。

五 本稿の結論と限界

本論では、矢口論文における主題のパラフレーズを引き継ぎつつ、「将棋と文学」が出会っていない事態の記述を通じて、両者の出会いの意味を理解することを目指した（第一節）。そのために『将棋新報』という雑誌に注目し、当時の棋士団体との関係から『将棋新報』についての基本的な事柄を確認した（第

二節) 後、雑誌の内容を検討した。そこからわかった雑誌のあり方は、書き手(棋士)と読者を「師匠―弟子」という関係の下で結びつけるような教材的な性格を保持していたことだった(第三節)。この雑誌は江戸時代以来の遊芸の商品化のひとつの局面であった「教授」の商品化を色濃く受け継いだものであることがいえる。他方、矢口論文が対象とした時期には、もうひとつの芸能の商品化の局面、すなわち「興行」化が進展しており、この局面を支えたのが作家・文学者たちだった。ここから文学と将棋の出会い、将棋の商品化に関する論理が「稽古事」から「興行」へと転換するうえで欠かざるべきものだったと解することができると述べた(第四節)。

「稽古事」と「興行」という異なる商品化のあり方を認めることによって、文学者と将棋が関わる以前の事態を、現在とは異なる芸能の商品化のありようとして理解することができる。このことは、ひいては将棋史研究の中で半ば自明のものとされている見方、つまり明治―大正期を棋道の衰退期という暗黒史に追いやるものとは異なる、別の歴史記述を構想することにつながるだろう。

本稿の限界を述べよう。

本稿では、「稽古事」から「興行」へというように、二つの

性格を単純な移行のプロセスとして位置づけたが、すでに同盟社における定式会について述べたように、二つの性格は絶えず将棋というひとつのジャンルの中で共存してきたと考えたほうが適當だろう。たとえば対局の観戦記は、将棋を学ぼうとするものにとっては(専門誌よりも敷居が低い)教材としての役割も果たしただろうし、観戦を通じて将棋を習うという遊び方へと導かれる愛棋家の存在は時代を問わずいたことだろう。また遊芸に限らずとも、他のスポーツや娯楽活動全般に眼を転じて見れば、競技等で求められる技量の習熟を目指しそのことに楽しみを見出す「稽古事」的な性格と、第三者の高度な技量を観戦することに楽しみを見出す「興行」的な性格の二つが共存していることは容易に分かる(「観る」野球と「する」野球など)²⁷。今後は、両者の性格を移行的ではなく共存的な視野で見るにより、両者が技術的・社会的・制度的な文脈の中でどのように関係を取り結び、どのように変化していったのかを、江戸期から現代にわたって記述していきたい。

- 1 (山本一九四八・二二七) 新聞棋戦事業の開始以前から三面の下部に娯楽記事が定位位置を占めていた。黒岩は将棋に興じず三木貞一に任せていたものの(加藤一九八四・一八〇)、自分の趣味である囲碁、連珠、相撲、百人一首、玉突きなどは以前から積極的に取り上げていた。
- 2 たとえば「第六年を送る」(『将棋新報』六巻二二号(一九一四)など。
- 3 「将棋同盟社の設立」『将棋新報』一卷一〇号(一九〇九)、参照。なお会員に関する規定は後年変更されているが、定式会や大会の参加費無償、『将棋新報』の無料配布、社員の棋譜の雑誌掲載などサービスの享受者という位置づけは変わっていない。
- 4 たとえば一九二一年二月時点では、五十四名の会員中三十九名が東京府または東京市の在住者であり、東京市(十五区)の中でも本所・深川・日本橋・京橋・本郷が多い(「同盟社普通会員」『将棋新報』一三巻一二号(一九二二)より)。
- 5 機関誌から、同盟社の設立や定式会の運営(優勝者へ渡す商品の提供など)にあたってこの地区の商人たちからの寄与があった形跡を読み取ることができる。
- 6 「将棋同盟社の設立」『将棋新報』一卷一〇号(一九〇九)
- 7 「将棋同盟社・将棋同志会主催定式会」参照
(<http://www3.u-toyama.ac.jp/kotani/shogi/databaseindex.html>)
2018/10/21アクセス。
- 8 「二周年を送る」『将棋新報』二巻一二号(一九一〇)
- 9 ただし一九二〇年頃を境に、「現今名家手合」の棋譜が定式会で生まれた棋譜であることは確認できなくなる。
- 10 『将棋新誌』は明治二四(一九〇一)年に発行を開始した定期刊行物であり、もっぱら発行団体の棋士たちによって主催された定式会の棋譜が掲載された。詳細は越智(一九九六)参照。
- 11 ただし、教授内容のレベルを落とすことが、すべての講座・解説等で行われたのかどうかは不明である。定跡講義や現今名家手合における解説が、より初心者に配慮された解説になっているかどうか(たとえば明らかに有段者向けの細かい変化を説いた解説がそぎ落とされていたり、初学者向けの解説が加筆されていたりといった変化が起きている等)という問題は、検討の余地がある。このような事案について筆者の棋力ではおぼつかないが、管見の限り、努力はむしろ「策兎」向けの欄を増やすことによってなされているように思われる。
- 12 表は次のアドレスからダウンロード可能(2018/10/21アクセス)(<http://www3.u-toyama.ac.jp/kotani/shogi/databaseindex.html>)
- 13 将棋新報社の記者の手によるものと考えられる。
- 14 ただし先の注でも述べたように、明言されていないままに課題に応じて変更があった可能性も考えられる。
- 15 定跡研究の必要性をまったく受け入れていない層について、『将棋新報』側が訴求しようとしていたかどうかは不明である。
- 16 (熊倉一九九三)
- 17 (守屋一九八五)
- 18 (森田二〇〇六など)一例として、『茶道全書』の出版が啓蒙において果たした役割を検討した林屋(一九六四)を参照。
- 19 たとえば家元制が成立したジャンルにおける名取が挙げられる。名取制度と家元制の関係については、西山(一九八二)を参照した。(芸能史研究会編一九九〇・二二四)
- 20 (増川一九八五・一九九六・一九九八)
- 21 将棋の指南本、独習本などは、すでに江戸時代大量に出版されている。明治維新を得ても、将棋に関する高度な知識の教授がなおも営利活動として見なし得た証として、東京府で定められた「営業税雑種税賦課規則」がある。明治一三(一八八〇)年の改正で

は、「遊芸を業とする者」の中に華道や茶道とともに囲碁将棋というジャンルが含まれ、これらの「遊芸を指南する者を遊芸師匠」と為し月税二十五銭を課すべし」と定められていた（内閣府記録局編 一八九一・四九三）。ここからわかるように、家元制度下で発達した諸ジャンルにおいて、自らの知識や芸を教授することは営利活動と見なされていた。

（神田二〇〇五・二二〇）

（神田二〇〇五・二二〇）

新聞棋戦事業とは筆者の造語であり、「新聞社が、紙面上にスペースを設けたうえで、対局者の選定および棋譜の生産ベースを導入し、必ず対局者へ報酬を支払ったうえで、注釈付きの棋譜を連載する事業」を指す。

この過程については、一度筆者の修士論文で概観したので詳細を割愛する。

労働者階級の娯楽分野への大量参入という時代的背景から二つの性格を——「玄人的修練」から「素人的鑑賞」へ——移行的に見た権田保之助（一九二〇）のような論者にあつても、両者は必ずしも排他的な関係ではない。たとえば彼は、「素人的鑑賞」のジャンルの代表例である映画に触れて、観ることに満足せず映画俳優などになりたいというファンがいることから「新しい遊芸師匠の生まれ出ねばならぬ理由があるかも知れない」（権田一九二三・二〇八）と述べており、単に「する」娯楽から「見る」娯楽への変化を単線的なものとして考えていたわけではないことを示している。

参考文献（二次資料）

『将棋新報』（第一巻第一号〜第一五巻第八号、ただし第一四巻第七号は欠号のため未確認）

参考文献（二次資料）

権田保之助、一九二三、『民衆娯楽の基調』同人社

、一九二三、『娯楽業者の群——社会研究』実業之日本社

芸能史研究会編、一九九〇、『日本芸能史七 近代・現代』法政大学出版局

林屋辰三郎、（一九六三↓）一九六四、『茶道全書』の成立—家元制度

への道づくり—『古典文化の創造』東京大学出版会・三六八—

三八五

神田由築、二〇〇五、『文化の大衆化』歴史学研究会・日本史研究会

編『日本史講座 第七巻 近世の解体』東京大学出版会

加藤久弥、一九八四、『五十年前に『将棋辞典』を企画した新聞将棋の開

拓者・三木愛花の遺稿』『将棋世界』四八（二二）一七八—一八一

熊倉功夫、一九九三、『近世における芸能の展開』熊倉功夫編『日本

の近世 第一巻 伝統芸能の展開』中央公論社・九一六六

増川宏一、一九八五、『将棋二』法政大学出版局

、一九九六、『碁打ち・将棋指しの誕生』平凡社

、一九九八、『碁打ち・将棋指しの江戸——「大橋家文書」

が明かす新事実』平凡社

森田晃一、二〇〇六、『家元制度』福田アジオ編『結社の世界史—

結衆・結社の日本史』山川出版社・二三五—一四七

守屋毅、一九八五、『近世芸能興行史の研究』弘文館

内閣府記録局編、一八九一、『法規分類大全（第四二）租税門（第七）

地方税第二』内閣府記録局

西山松之助、（一九五九↓）一九八二、『西山松之助著作集 第一巻

家元の研究』吉川弘文館

矢口貢大、二〇一六、「初期」『将棋世界』と文壇の関わり」（将棋と文学研究会七月例会配布資料）

矢口貢大、二〇一九、「始発期『将棋世界』と作家たち」『将棋と文学スタディーズ』

山本文雄、一九四八、『日本新聞史』国際出版株式会社

萬朝報刊行会・山本武利編、二〇〇〇、『万朝報 八九卷』日本図書センター

謝辞

本稿で用いた『将棋新報』に関しては、大阪商業大学アミューズメント産業研究所所蔵のもの（越智コレクション）を用いました。利用にあたって数々の便宜を計ってくださった同研究所の方々に感謝申し上げます。ありがとうございました。

また、本稿の基本となるアイデアについては、将棋と文学研究会および吉見俊哉ゼミ・サブゼミにて発表の機会を頂きました。有益なコメントをくださった参加者のみなさま、本当にありがとうございました。

〔東京大学大学院学際情報学府博士課程〕

始発期『将棋世界』と作家たち

矢口貢大

1 『将棋世界』の創刊

本稿では始発期¹の雑誌『将棋世界』に着目し、将棋専門誌が同時代の作家たちとどのような関わりを持ったのか検討していく。『将棋世界』は、将棋大成会（のち日本将棋連盟）公認の将棋専門誌として、一九三七〔昭和一二〕年一〇月、博文館より刊行された。本誌は戦中・戦後の一時期の休刊をのぞき、今日まで脈々と続く専門誌であり、近代将棋史を考えるうえできわめて重要な位置にある。そしてこの『将棋世界』には、今日から見ると意外なほど多くの作家たちが執筆陣として名を連ねていた。彼らがどのように『将棋世界』と関わったのかを検討することで、将棋と文学という異ジャンルの特異な接合について考えていきたい。

『将棋世界』の創刊以前の棋界は、様々な棋士団体が離合集

散を繰り返す状況にあった。明治維新による家元制度の崩壊後、明治期の将棋棋士たちは政財界の有力者の後ろ盾のもとで活動していた。明治末期には、棋士の後援者が名士から新聞社へと移行していく。新聞社ごとの系列棋士たちは、関根金次郎の将棋同盟会（のちに将棋同盟社）をはじめ、それぞれの派閥を形成していた。大正期には小派閥が持続しているものの、一九二三〔大正一二〕年の報知新聞主催による東西対抗棋戦など、派閥横断的な棋戦が催されることとなる。これを機に将棋団体統一の機運が高まり、一九二四〔大正一三〕年に東京将棋連盟が発足する。さらに神田辰之助七段の昇段問題による棋界の分裂・再統合（神田事件）を経て、一九三六〔昭和一一〕年には将棋大成会が結成された²。

そして棋界の統一とともに、将棋大成会の機関紙として将棋専門誌の創刊が準備されることとなった。『文藝春秋』の将棋欄では、観戦記者の倉島竹二郎がその準備期のありようを以下のように記述している。

将棋の隆盛にかゝらず、今迄これといふ棋界を代表する雑誌の現れなかつたことは将棋同好者の甚だ遺憾とするところであつたが、今度連盟でその目的に副ふため機関誌を発行することになつた。大いに慶賀すべきことである。これまで将棋雑誌の

振はなかつたのは、それが余りに専門的高踏的になりすぎて大衆が親しめなかつたことや、編輯者の不明から不公平な人間に依頼しすぎて雑誌の使命が失われたことなどに原因してゐる。／連盟機関誌は、「将棋」又は「将棋公論」と題名するらしいが、ともかく今迄の将棋雑誌の失敗に鑑み、専門的にも興味的にも大衆にアツピールするやう、そして常に公明正大真に棋界の指針たり得るやう切望してやまない

（倉島生「将棋」³）

ここで倉島は、大成会の機関紙発行に際して、それ以前の各棋士団体の刊行する将棋雑誌が、偏りのある執筆者の人選や専門性の高さによって、その「使命が失われ」「失敗」に終わったと総括している。なお『将棋世界』以前の将棋専門誌の動態に関しては、本論集所収の瀬尾祐一「『稽古事』から『興行』へ?——将棋と文学の出会いがない雑誌としての『将棋新報』」において詳しく触れられている。そして誌名については、準備段階では「将棋」または「将棋公論」が検討されていたが、結果として「将棋世界」に落ち着くこととなった。倉島は同年六月の将棋欄においても「全国的棋界の統一がなされたのだから、是非これにふさはしい機関誌が必要だ。将棋日本を機関誌にといふ説もあるが、今の

状態では絶対にいけない。一派一党の機関誌ならともかく大同団結後の機関誌たり得るものは、絶対公平にして共存共栄の実をあげ棋の発展に資するものでなければならぬ筈だ」⁴と棋界統一のシンボルとしての将棋雑誌の必要性を繰り返して述べている。

ここで『将棋世界』が、「余りに専門的高踏的になりすぎて大衆が親しめなかつた」それ以前の将棋専門誌の反省から出発している点は重要である。将棋雑誌の読者は、職業棋士の棋譜の鑑賞だけでなく、定跡講座を用いた自身の棋力向上を期待していた。しかし、将棋を指す読者に向けた教材としての難易度の設定には、多くの困難がともなうだろう。講座の難易度を上げればその内容を理解できる読者が減少してしまうが、極端な易化を図れば読者の棋力向上の期待に応えることが難しくなる。瀬尾祐一が述べるように、「『将棋世界』以前の将棋専門誌は「教材としての役割を保ちながら、その範囲内においてこの課題の解決を図ろうとした」⁵のであった。

それでは、この課題を認識したうえで出発した『将棋世界』は、どのようにして大衆読者の開拓・獲得を試みたのか。『将棋世界』は定跡講座を充実させる一方で、「読み物」としての側面の強化により、そうした課題の克服を図ろうとしていたと考えられ

る。そして「読み物」としての記事を執筆するために動員されたのが、同時代の作家たちであった。

2 「読み物」路線と作家の登場

一九三七「昭和一二」年一〇月に創刊された『将棋世界』第一巻一号の目次は、以下の通りである。（なお、創刊から戦中期までの『将棋世界』の目次は、「将棋と文学」研究会のホームページ上にて公開されている。⁶）

創刊の辞	宮本生
対局風景	
昇段点前後	
函館日誌	花田長太郎
近代将棋作戦学（一）	土居市太郎
虎視眈々たり関西棋界	木見金治郎
相掛新戦術（一）	花田長太郎
勝負の自信	花田長太郎
経験を語る『難局打開』（一）	木村義雄
近代将棋の本質（横歩取りの防止）	金子金五郎
平手基本定跡（後手の指法）	金子金五郎

私の将棋（一）	神田辰之助
最新角落講義（一）	小泉兼吉
飛車落定跡新講（一）	小泉兼吉
飛香落新講（一）（一七桂の早仕掛）	建部和歌夫
二枚落新講（一）（銀多伝）	建部和歌夫
詰将棋の考へ方と新題一二種	塚田正夫
新作懸賞詰将棋	塚田正夫
左香車落決戦譜	梶一郎・樋口義雄
観戦記	棋好子
将棋旅日記（山形・新潟・博多）	梶一郎
古名局より『中盤の研究』	樋口義雄
私が八段になるまで	神田辰之助
棋聖宗歩	三宅青夢
将棋人お国調べ	宮本弓彦
ひいきを語る	将棋愛好諸士
将棋界案内	編集局
他山の石	
歴代名人表	
達人を描く	
棋界ナンセンス	
編輯後記	宮本生

『将棋世界』創刊号は、高段の棋士たちが執筆を担当し、平手や駒落ちの講座を中心とした連載記事が目立つ。また「虎視眈々たり関西棋界」などの記事では、関西棋界への目配りがなされており、棋界の東西対立の解消の意図が伺える。さらに「神田事件」の当事者であった神田辰之助が「私が八段になるまで」において、棋界を二分するに至った自身の昇段問題に触れており、「将棋大成会公認」の誌面においてそれが活字化されたことの意義は大きい。まさしく棋界の「大同団結」を全面的に打ち出した紙面構成になっていることがわかる。

しかしこのように見ると、『将棋世界』が、創刊号においては講座を中心とした紙面になっており、大衆読者の獲得という狙いからはややずれた印象を覚える。それについて『将棋世界』の編集にあたった宮本弓彦は、この号の「編輯後記」⁷において、次号以降の執筆陣の変更とともに「雑誌の本質上、柔らかな味のある読み物が絶対不可欠であります」と述べ、「此の方面に対しても、次号よりさらに用意がある」ことを読者に対して予告している。ここには当初企図していた大衆向けの「読み物」記事が揃わず、次号以降でそうした側面を拡充していくという戦略を読み取ることができる。

さて翌月の『将棋世界』一一月号においては、その予告通り「読み物」記事の充実が図られることとなる。この号

の巻頭には、文壇の大御所であり愛棋家でもあった菊池寛⁸の「将棋哲学」が顔写真付きで掲載されている。

将棋はとにかく愉快である。盤面の上で、この人生とは違った別な生活と事業がやれるからである。一手一手が新しい創造である。／冒険をやつて見ようか、健実にやつて見ようかと、いろいろ自分の思ひ通りにやれる。その上遊戯とは思はれぬ位ムキになれる。

（菊池寛「将棋哲学」⁹）

「将棋哲学」といういかめしい題を冠しているが、その筆致は右の如くきわめて平易であり、通俗哲学あるいは処世哲学といった趣きが強い。むしろそうした平俗さに徹することこそが菊池に求められていた役割であり、大衆読者の獲得という始発期『将棋世界』の指針を反映したものであったと考えられる。菊池はその後も「続将棋哲学」（一九三七「昭和一二」年二月）、「続々将棋哲学」（一九三八「昭和二三」年一月）、「将棋哲学」（同二月）と『将棋世界』巻頭にこのシリーズを連載していた。なお、菊池寛の将棋関連記事については、西井弥生子の調査がある¹⁰。

またこの号には、伝奇小説や探偵小説で知られる角田喜久雄の「個性ある棋士」という記事が掲載されている。この記事で

紹介されている「棋士」とは、職業棋士ではなく将棋を指す作家たちのことである。特に将棋を愛好していた大衆文藝作家たちの様子が、その棋風とともに紹介されている。

文壇にこの将棋が大流行してゐるといふと知人の中にも仲々猛者が居る。伝へ聞くところによると、水谷準氏はねばり勝ち(形勢が怪しくなると考へこんでしまつて相手が欠伸をして戦意を失ふまで腕をこまねいてゐる。所謂忍耐力による奇勝)を得意とし、挿画の松野一夫氏は相手の好意に乗じて大崎八段に一勝せる十数年前の記録を声高に披露して戦前敵を圧迫するの一手を常に用ふるし、大下宇陀児氏の敗因は不思議と必ず前夜の徹夜による寝不足にあるそうだし、木々高太郎海野十三両氏は専ら一列に二歩三步を並べる奇手を得意とするそうだし、江戸川乱歩吉川英治両氏の対局にあつては互いに批評しあひて自己の実力を称揚されるさうであるし、等々、之を要するに二三人を除いて我が好敵手として推奨するに足る個性ある棋客と考へてゐる。

(角田喜久雄「個性ある棋士」)¹¹

角田の記事は、大衆文藝周辺の作家たちを「棋士」に置き換え、それらの人物たちの将棋を「強さ」とは異なる「個性」

という軸のもとで配置した点において、きわめて興味深いものとなっている。職業棋士たちの将棋は、「強さ」によって厳密に序列化されている¹²。一方で角田の記事で紹介されている。作家たちの将棋は、嫌がらせのような盤外戦術や反則行為(角田の述べるところの「奇手」)を通して、ユニークに描き出されている。彼らの将棋は序列化されことなく固有名とともに列記される。それぞれの作風や棋力とは異なる軸で作家を描出する営みは、有名作家たちの個性をその固有名とともに消費する読者の期待に応えた「固有名消費」(大澤聡)¹³の一環として位置づけることができるだろう。一九二〇年代の雑誌『文藝春秋』を中心とする「文壇将棋」のコンテンツ化は、作家の棋譜が素人将棋にもかかわらず商品価値を持つことを示していた。もともとそれまでの作家たちの将棋は、番付(図「新版文壇将棋天狗番付」¹⁴)というかたちで「強さ」による序列化の意図をはらんでいるものであり、その意味であくまでも職業棋士の模倣に過ぎないものであった。角田がここで注目した文壇棋士の「個性」という布置による文壇の見取り図は、職業棋士と職業文士が雑居する『将棋世界』の紙面上におけるそれぞれの役割分担の形態として、きわめて重要なものであったと考えられる。

さて、このように『将棋世界』第二号は、流行作家を動員す

新版文壇将棋天狗番付

白眉は露伴と菊池の優劣



図「新版文壇将棋天狗番付」

ることで記事の「読み物」としての役割を強調し、大衆読者の獲得を明確に図るものであった。この号の「編集後記」では、以下のようにその成果を誇っている。

個人的な御指導を願ふこと容易ならざる高段諸大家が、責任講座を以て、本誌フアンの手をとつての、親切的な御指導をあたへ

らるは、本誌の最も誇りとするところであります。而かも本号に於ける読物陣の強化は、菊池寛先生、倉島竹二郎先生及び角田喜久雄先生の諸大家よりいづれも珍とするに足る珠玉の文字をいただきましたから、必ず読者のご満足を得る事と御確信致します。

(宮本生「編輯後記」)

ここに『将棋世界』の紙面構成のねらいが明確に表れている。まず高段の棋士たちによる定跡講座を充実させることにより、読者の棋力向上の期待に応える。職業棋士による有力者向けの個人指導が、雑誌読者に向けて広く開かれた意義がここで強調されている。一方で、自身は将棋を指さない読者や定跡講座にさほど興味を持たない読者に向けては、流行作家による「読み物」を通して雑誌の購買意欲に働きかけている。のちの「編輯後記」においても「一流棋士による名講義を右翼に、名家読物を左翼に、無敵の陣容」¹⁵と称されるように、職業棋士と作家が両輪となって『将棋世界』の誌面を構成するという販売戦略は、その後も継続していくこととなる。

さらに「読み物」陣の強化としては、一九三八「昭和一三」年一二月号において幸田露伴の「象棋余談」が掲載されている。愛棋家としても著名であった露伴は、遊戯としての将棋に対す

る博物学的な研究にも力を注いでいた。『将棋世界』に掲載された「象棋余談」は、「将棋雑考」（一九〇〇「明治三三」年）、「将棋雑話」（一九〇一「明治三四」年）以来の将棋史研究の成果であった。こうして菊池寛・幸田露伴という文壇将棋の両雄が『将棋世界』誌面に並ぶこととなった。

また『将棋世界』誌上の忘れてはならないコンテンツとして、指し将棋の終盤を模したバズルである詰将棋があった。創刊号より「懸賞詰将棋」として誌面上で詰将棋が出題されており、読者参加型のコンテンツとして機能していた。『将棋世界』に掲載された小説家の随筆には、この詰将棋をめぐるものが多い。『将棋世界』一九四一「昭和一六」年六月号に掲載された藤沢桓夫の「将棋随筆」においては、詰将棋の魅力が以下のように語られている。

退屈した時や、仕事に疲れた時や、眠る前に、僕は詰将棋を解いてみる。すると大抵気分がよくなる。詰将棋には必ず詰む筋道が仕組まれてあるのであり、しかも、それに人間の頭が考へ出した筋道なのだ。人間の頭が考へ出した筋道である以上、どんな複雑なものであれ、それは人間の頭で必ず解ける筈である。この「困難」への闘志をそそり立てるところにどうやら詰将棋の魅力はあるやうだ。それだけに、詰将棋の解けた時の気持ちは、

それがむづかしいものであればあるほど何んとも言へず快い。

（藤沢桓夫「将棋随筆」¹⁶）

ここで藤沢は詰将棋を解く快樂¹⁷の言語化を試みている。むろん職業棋士であれば、詰将棋が「むづかしい」とは、なかなか口には出しにくいだろう。続けて藤沢は、詰将棋の出題ミスに言及しており、そこで「どうしても解けないで憂鬱になつたのが、後で問題が間違つてゐたのだと判つた時の腹立たしさ」を表明している。同様に詰将棋の出題ミスについては、『将棋世界』誌上で、佐々木茂索が「余詰早詰があると癪に障る。出題者がよく／＼吟味するのは勿論の事、校正も絶対的入念に願ひたい。名人、八段、七段、大抵の人の出題にちよい／＼間違ひがある」¹⁸と注文をつけている。

ここで注目すべきは、そうした詰将棋への思いを語る作家の位置である。作家たちは、読者とともに「むづかしい」と唸りながら詰将棋の解答を試みる。そして読者たちが感じていた詰将棋の快樂を、彼らが共感できるかたちで解きほぐして言語化する。さらに出題ミスに対しては、読者とともに憤慨してみせる。ここで作家たちが立っているのは、職業棋士ほど棋力の高くない読者に寄り添い、彼らを代弁する立場である。換言するならば、職業棋士と読者の中間に位置しつつ、両者を接続する

存在としての作家の役割を看取することができる。そして、このような存在としての作家もまた『将棋世界』の大衆読者への働きかけの一つの役割であったと考えられる。

3 観戦記者としての作家

これまで見てきたように、始発期『将棋世界』に記事を寄せた小説家たちは、「読み物」陣として大衆読者の興味関心に働きかける存在として機能していた。また詰将棋の魅力を語る作家たちは、職業棋士ほどの棋力がない読者たちに寄り添う立場から執筆を行っていた。一方で、もう一つの作家に期待された役割として、棋戦の観戦記の執筆があげられる。当初観戦記は、各新聞の将棋欄の記者が担当していた。なかでもその草分けとして『読売新聞』の菅谷北斗星や『毎日新聞』の倉島竹二郎が知られている。特に倉島はもと『三田文学』出身の小説家であり、一九三二「昭和七」年に『国民新聞』に観戦記を執筆したのを契機に観戦記者へと転身した¹⁹。観戦記者は高い棋力を持っており、職業棋士の難解な将棋のねらいを、読者に対して解説する役割が求められた。コンテンツとして自立した観戦記は、「観戦記」文学の龍虎たる菅谷北斗星と倉島竹二郎²⁰と称されるように、ほとんど文学作品に類する質のものとして語ら

れるにいたる。

また『将棋世界』誌上においては、棋士の対局に立ち会った作家による観戦記が寄せられた。一九四〇「昭和一五」年七月号には、菊池寛による花田長太郎と木村義雄の対局の観戦記が掲載されている。これは、一九三六「昭和一一」年八月五日の第一期名人決定戦第十八局の観戦記で、もとは『東京日日新聞』（同年八月一六日）に発表されたものである。

花田君の一六歩、木村君の七四歩で、波乱の起りさうだつた局面も純然たる相懸りの同形となつた。「……」木村君はいふ。『七四歩で同形となるが、自分のほうから決めるのがイヤであつた』／感想は簡単だが消費時間を見ても分るやうに、この辺は單なる変化ばかりでなく、すべての味や含みを考へ、また敵の作戦に陥るまい、何とかして敵の作戦を観破して自己の行動を有利に導かうと、処々実々全智の火花を散らして戦つてゐるので、われ／＼の相懸り戦とはまさに天と地の相違だ。／この形は今まで無数に出来た形である。大分古い話だが、文藝春秋誌上で素人将棋をやつたとき、梅原龍三郎君と故南部修太郎君が殆どノータイムでこれと全然同じ局面をつくつた。萩原君がそれを「ともかくも相懸りが出来あがつた」と評してゐたが、本局には「ともかく」などという失礼な言葉は許されない。天

才花田、木村両君が苦心を重ねしかもかく運ばざるを得なかつた絶対抜き差しならない駒組である。

〔菊池寛「待望の一戦（第十八局）」²¹〕

まず、この菊池寛の観戦記において特徴的なのは、作家としての中間者の位置取りにある。感想戦における「七四歩で同形となるが、自分のほうから決めるのがイヤであつた」という木村義雄の「簡単」な感想を聞いた菊池は、その断片的な発話から木村の対局心理を丁寧に解説する。先ほど見たように作家は詰将棋に際しては読者の立場を代弁していたが、ここでは読者に向けて棋士の心理を代弁してみせる。将棋専門誌における作家とは、このように職業棋士と読者との間に位置をとりつつ、誌面の需要に合わせてその距離を調整しながら、それぞれの立場を言語化するという中間者の存在なのであつた。

またここで菊池が「大分古い話」として、『文藝春秋』誌上での「素人将棋」の棋譜を参照している点は重要である。菊池はそれを梅原龍三郎と南部修太郎の対局としているが、これは記憶違いであり、一九二八（昭和三年）三月の『文藝春秋』に掲載された久米正雄と梅原龍三郎の対局であつたと考えられる。戦型はいずれも相掛かりであり、一部に異同があるものの、花田―木村戦とほぼ一致する局面があらわれている。萩原淳の

講評においても「手順に前後はあれど相懸戦として先後後手の対陣は堂々と整備された」²²と述べられており、菊池がここで回顧する「ともかくも相懸りが出来あがつた」という評言と近似している。八年前の素人将棋の棋譜を、観戦記においてほぼ正確に参照する菊池の記憶力は驚くべきものである。そしてこのように過去の棋戦のアーカイヴから棋譜を参照する記憶の働きは、職業棋士たちの棋譜の轍を踏襲する「定跡」という営みに近接していくことになるだろう。素人将棋の対局とはいえ、その棋譜は公開されたものであり、文士の対局は職業棋士の棋譜と同様に、「定跡」のように読者がアクセス可能な記憶のアーカイヴとして機能していたのだ。

しかしながら菊池の観戦記においては、花田―木村戦における局面が、ノータイムで指された素人将棋の局面と類似するほど、かえって「われ／＼の相懸り戦とはまさに天と地の相違」が浮き彫りになるという逆説が述べられている。菊池によつて「天才」と称される花田と木村が、苦心の末に組み上げた「絶対抜き差しならない駒組」は、素人将棋の同様の局面と決定的に異なる。表面上は素人将棋と同様の局面をなぞっていたとしても、職業棋士の将棋は「単なる変化ばかりでなく、すべての味や含み」が水面下で計算されているのであり、菊池の観戦記はそのような不可視化された思考の痕跡を読み取ることに力点

を置くのである。職業棋士―読者の仲介者としての作家の機能はこのような形で発揮されているのだ。

また作家の手になる特異な観戦記として、『将棋世界』一九四〇「昭和一五」年五月号に掲載された南部修太郎「新古将棋の争ひ」²³にも触れておきたい。これは金易二郎と花田長太郎の対局の観戦記であり、「金八段の面貌は決意の色動いて、応じたり八四歩！息を凝らすこと数刻、僕の二六歩の予想は外れて花田八段は意外にも五六飛！」といった調子で、時代小説の罅迫り合いと見紛うような筆致を通して、緊迫感ある対局場面が描写されている。対局の合間に棋士が長考に入ると「僕の饒舌がその余白を埋め、対局時間の推移と観戦期を読む読者の時間があたかも同期されるかのような仕掛けが施されている。興味深いのは、そうした饒舌体を通して語られる観戦記者の心理である。

ちつと笑ひ話になるのだが僕がこの観戦記を書きはじめてからいろいろと反響を得た中に、京都に住む僕の好敵手の一友書信を寄せて曰く、『如何にも強さうな顔付で書いてゐるのが誠に片腹痛い』と。僕思わず苦笑を浮かべたが、たとへ如何に僕が心細い棋力の持ち主であるとはいへ、准名人の八段諸氏をおそれて平つくばつた日には、自由な観戦記などかけるものではな

い。で、聞えると定めし八段諸氏の立腹をかうだらうから小さな声でいふが、観戦記一年生の僕実は『八段何者ぞ?』と豪さうに腹を構えて筆を執つてゐる訳。読者よ、諒して以て僕の棋力のほどは笑い給ひねかし！

（南部修太郎「新古将棋の争ひ」）

ここでことさら露悪的な形で表白されているのは、棋界のアウトサイダーとしての小説家の立場である。将棋界の高位にある棋士の対局に立ち会う「僕」は、「心細い棋力」の持ち主に過ぎない。しかし、観戦記を執筆するにあたっては「八段何者ぞ?」という気概を腹に蔵している。そうした不釣り合いは滑稽ではあるものの、「強さ」と段位という将棋界の序列化の機構から、あくまでも「自由」なアウトサイダーとしての作家の立場が浮かび上がってくる。職業棋士の棋戦に立ち会う作家という存在の奇妙さと滑稽さ――南部の観戦記が対象化するのはそのような自身の立場そのものであり、自覚的にそれを笑い飛ばし、「自由」を謳歌するような特異な観戦記文体の模索がなされていたのである。

4 むすびに——将棋と文学のあいだで

本稿では始発期『将棋世界』に掲載された作家たちの役割を検討することで、文藝誌とは異なる将棋雑誌における作家固有の機能を分析してきた。それは①「読み物」陣としての大衆読者の獲得、②棋士―読者間の中間的位置づけとしてのそれぞれの立場の代弁、③アウトサイダーとしての棋界批評と自己対象化としてまとめることができる。

本稿で検討した始発期『将棋世界』における大衆読者の獲得が、実態として成功していたのか否かについて、残念ながら手元の資料では判断がたい。しかし講座と「読み物」の両翼で読者の期待をカバーするという戦略が、多くの困難をともなうものであったことは想像に難くない。『将棋世界』一九四一「昭和一九」年八月号の「編輯後記」からは、そうした困難の一端が伺える。

△講義物が少いとお叱りが大分あったが、今月は二枚落、飛車落、平手大系を始め、断片的には終盤二台、稽古帖等、可成りの頁を割いたつもりである。／△読者の投書には毎度ながら有難く拝見してゐる。但し、内容に就いて「読み物を多くせよ」、「研究物を多くせよ」と両端の注文があるには困つて了ふ。両

方とも本誌の熱心な読者である。

(永澤「編輯後記」²⁴)

ここで述べられているように、定跡講座を求める読者と娯乐的な「読み物」記事を求める読者との間での分断は解消されなかった。一つの雑誌でそれらの期待に応えることは、難しくかつたのではないかと考えられる。いずれも「熱心な読者」であるだけに、編集部対応も困難であった。また一九四〇年代に入ると戦局の悪化に伴い、かつて充実を誇っていた『将棋世界』の誌面は縮小されはじめる。本誌に原稿を寄せる作家も減少し、講座と「読み物」の両輪体制はかつてのように維持できなくなっていく。戦時下における娯楽は肩身が狭いものとなり、一九四二「昭和一九」年以降はそれまで棋界の大口のスポンサーであった新聞棋戦の縮小が検討されはじめる。また『将棋世界』の誌面においても、木村義雄「将棋と戦陣訓」(一九四二「昭和一九」年三月)など、時局に迎合する戦時色の強い記事が数を増していった。

最後に触れておきたいのは、そのような状況で『将棋世界』一九四二「昭和一九」年二月号に掲載された、文藝評論家・新居格の「将棋四方山話」²⁵である。これは、将棋と文学とのあいだを、アナロジーを通してふたたび架橋しようと試みた示唆

的な論考である。そこで新居は、かつて雑誌『新青年』で企画された井伏鱒二との対局の様子を回顧している。「ヨイシヨ、ソラ来た」という掛け声で、早指しで行われた対局は、あまりの早さから棋譜がとれないほどのものであった。新居はそれに対し、「めちやくちや将棋に棋譜のありようがない」と述べている。文壇将棋の棋譜を記録しコンテンツとして商品化するという当時の風潮に対して、どこか冷めた眼差しがそこにはある。さらに続けて新居は「文壇の人々にも将棋の好きな人が沢山ある。それらの将棋逸話と来たら数限りもない」が、「それは可笑しい丈の話で、本誌の如き専門雑誌にかくべき筋合いではないと思ふから止めた」とする。これまで「読み物」として求められていたはずの作家の将棋にまつわる「個性的」なエピソードの列挙は、早々に断念される。そして代わりに新居が描くのは、自身と木村義雄をめぐる以下のような関係性であった。

たゞ、わたしは誰からともなく木村名人は対局中、時々庭へ下りて四股を踏む、すると、天外の妙想奇手が浮んで来るのだと聞いてゐた。「……」／「ようし、原稿をかくのに詰まつたら庭に下りて自分も四股を踏まう。たしかにいゝ方法だ。第一原稿用紙は線を引いてあること、将棋盤に似てゐる。一字一字が非常な熟慮の下に入れられて行つていゝのだ。それなのに、わ

たしは井伏君と将棋を指すときにやうに、文字を抛り込んで来た。どうも嘘らしいが、木村名人の四股の話は真偽如何に拘らず、わたしにはよき示唆だった。そんなことから、木村義雄氏はいつもわたしの机の上にあるのである。

（新居格「将棋四方山話」）

新居の随想において、名人であった木村義雄と自身の執筆活動が、将棋盤―原稿用紙のマス目に向き合う行為のアナロジーを通して接合される。木村義雄の噂話の真偽は、ここでは問題にならない。むしろそうした逸話が虚構であるほど、将棋を指すイメージは純化され、文学という虚構をめぐる営為と近接していくことになるだろう。そこでは想像力の次元において、将棋と文学の関係は対称的かつ不可分のものとして描出されているのである。

これまで見てきたように始発期の『将棋世界』においては、作家たちが執筆陣に名を連ね、将棋専門誌としての雑誌の性格を踏まえつつ、多様な表現が模索されていた。それらは作家が実際に将棋を指し、あるいは自身と将棋との関係性を（書く）という実践を通じて、将棋と文学との関係性を見定めていく営為であったと一旦は結論することができるだろう。もともと棋界と作家の間わりは、『将棋世界』の戦後における再出発から、

今日に至るまでなお続いている。それらの文化史的分析を今後の研究課題としたうえで、ひとまずこの稿を閉じたい。

- 1 太期喬也・清水考晏・野口益雄「将棋世界五〇周年記念座談会 将棋世界五〇年とのつきあいを語る」(『将棋世界』、一九八六「昭和六二」年一〇月)において、『将棋世界』が「昭和十年代が黎明期、二十年代から三十年代が苦難期、四十年代が急成長期、五十年代が安定期」であったという見取り図が示されている。本稿で用いる「始発期」は、『将棋世界』創刊から休刊までの一九三七「昭和一二」年から一九四四「昭和一九」年までを指す。
- 2 以上の記述は、増川宏二『将棋の歴史』(二〇一三「平成二五」年二月、平凡社)を参照した。
- 3 倉島生「将棋」、『文藝春秋』、一九三六「昭和一二」年三月。
- 4 倉島生「将棋」、『文藝春秋』、一九三六「昭和一二」年六月。
- 5 瀬尾祐一「稽古事」から「興行」へ?——将棋と文学の出会いがない雑誌としての『将棋新報』、本論集所収。
- 6 「将棋と文学研究のための基本データ」
<http://www3.u-toyama.ac.jp/kotani/shogi/databseindex.html>
- 7 宮本生「編輯後記」『将棋世界』、一九三七「昭和一二」年一〇月。
- 8 菊池寛の愛棋家としての側面については、春原千秋『将棋を愛した文豪たち』(一九九四「平成六」年三月、メディアカル カルチュア)にて詳しく触れられている。
- 9 菊池寛「将棋哲学」、『将棋世界』、一九三七「昭和一二」年一月。
- 10 註6に同じ。
- 11 角田喜久雄「個性ある棋士」、『将棋世界』、一九三七「昭和一二」年一月。
- 12 もっとも将棋における「強さ」を客観化ならびに実体化して考えることには留保が必要である。将棋における「強さ」の指定したきについては、久保明教『機械カニバリズム』(二〇一八「平成三〇」年九月、講談社)における分析が示唆に富む。
- 13 大澤聡「批評メディア論 戦前期日本の論壇と文壇」二〇一五「平成二七」年一月、岩波書店。
- 14 「新版文壇将棋天狗番付」、『読売新聞』、一九三五「昭和一〇」年八月二七日朝刊。
- 15 宮本生「編輯後記」、『将棋世界』、一九三七「昭和一二」年二月。
- 16 藤沢桓夫「将棋随筆」、『将棋世界』、一九四一「昭和一六」年六月。
- 17 藤澤とは異なる立場の作家の詰将棋論としては、甲賀三郎「比類なき頭の遊戯」(『将棋世界』、一九三九「昭和一二」年四月)が挙げられる。そこで甲賀は「詰将棋のいゝ所で且つ特徴とするの所は、その合理性にある」とし「盤上の駒は一つとして無駄がなく、手駒に無駄がないのみか、盤上で取った駒ばかりで成り立つて、而も俗詰みはない」と述べている。探偵小説作家として知られる甲賀が、「合理性」を詰将棋の美点として指摘している点は興味深い。
- 18 佐々木茂索「詰将棋合評会 癪に障る」、『将棋世界』、一九三九「昭和一二」年四月。
- 19 春原千秋『将棋を愛した文豪たち』、一九九四「平成六」年三月、メディアカル カルチュア。
- 20 倉島竹二郎「菅谷北斗星「木村土居七番勝負の予想」、『将棋世界』、一九四〇「昭和一五」年三月。

- 21 菊池寛「待望の一戦（第十八局）」、『将棋世界』、一九四〇〔昭和
一五〕年七月。
- 22 久米正雄・梅原龍三郎「本誌主催 素人将棋」、『文藝春秋』、
一九二八〔昭和三〕年三月。
- 23 南部修太郎「新古将棋の争ひ」、『将棋世界』、一九四〇〔昭和
一五〕年五月。
- 24 永澤「編輯後記」、『将棋世界』、一九四一〔昭和一六〕年八月。
- 25 新居格「将棋四方山話」、『将棋世界』、一九四一〔昭和一六〕年二月。

付記

本稿の引用に際して旧字を新字にあため、ルビを適宜省略した。また本稿の執筆に際して、『将棋世界』編集長の田名後健吾氏より貴重な資料をご提供いただいた。記して感謝を申し上げます。

〔東京大学大学院総合文化研究科博士課程〕

新聞将棋の始まりから発展へ

山口恭徳

新聞と将棋との関わりは、徐々に変化してきているが、日本将棋連盟の経済面を支える大きな柱は、現在でも新聞社からの契約金である。

新聞に棋戦が誕生してからも一〇〇年以上たつ。ここでは、その始まりから新聞将棋が発展していった経緯を、明治、大正、昭和（初期）の時代ごとに、実際の紙面や年表などを基にして振り返っていく。

江戸時代に徳川幕府の庇護を受けていた将棋家元（大橋本家、大橋分家、伊藤家）は、明治維新により経済的な基盤を失い、終焉を迎えて以後、将棋界は冬の時代に入る。その中で新聞棋戦の始まりは、一筋の光明とも言えるものだった。

現在の将棋界の隆盛を見るとき、各棋戦主催社の強力なご支援、ご協力、さらに苦難の時代を支えてきた先人の貢献・功績は忘れることができない。

1 新聞将棋の始まり

明治一〇年代、新聞は政論中心の大新聞おおしんぶんと、娯楽中心の小新聞しんぶんとに分かれていた。大新聞は知識階級を対象にした政論主体の新聞で、小新聞は中流以下の読者を対象にした通俗的な新聞をいうことが多かった。

新聞に初めて詰将棋が載ったのは、小新聞の「有喜世新聞」で、明治一四年（一八八一年）七月一七日付のことだった。

1・1 新聞詰将棋の始まり

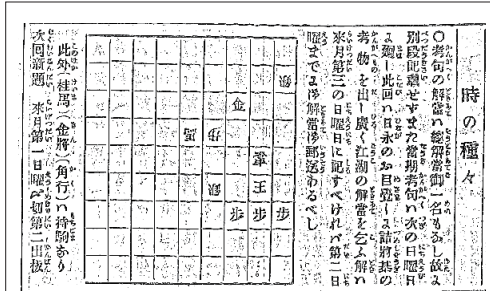
明治一四年七月一七日付「有喜世新聞」

【資料①】一世名人大橋宗桂著『術知象戯力草宗桂指南抄』Ⅱ元禄一六年（一七〇三年）刊Ⅱ第四一番から引用。持ち駒に誤りがあり、「角金桂」ではなく、「角金歩」だった。以後、月に一回程度連載され、約一年続いた。

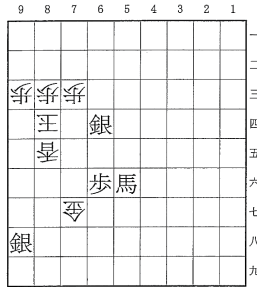
1・2 新聞指し将棋の始まり

明治三二年（一八九八年）一月一日付「萬朝報」よふすちようほう

【資料②】伊藤宗印八段（香落ち）对小野五平七段（勝ち）戦明治二九年二月九日付から詰将棋を連載していた「萬朝報」は、同三二年一月一日付から新聞では初めて実戦、つまり指し将棋



【新聞に初めて掲載された詰将棋】



を掲載した。以後、月に一回程度連載して約一年続いた。

「萬朝報」は、「巖窟王（モンテ・クリスト伯）」や「ああ無情（レミゼラブル）」の翻訳などで知られる黒岩涙香（本名：周六）が創刊した新聞。やや薄い赤色の紙質を用い、上流階級のスキャンドルなどを暴くことが多かったので、「赤新聞」と恐れられた。

1.3 新聞棋戦の始まり

明治四一年（二九〇八年）九月一日付「萬朝報」

【資料③】「高段名手勝継将棋」一〇人参加の勝ち抜き戦

【資料②】新聞に初めて載った指し将棋（最上段）『萬朝報』明治三二年一月一日付



明治三二年一月一日付「萬朝報」に掲載された詰将棋の解答は、文末に記されている。この詰将棋は、角金歩の一手で、王将を捕らえるという簡単な詰将棋である。解答は、角金歩を王将の横に動かすことである。

小野五平



明治三二年一月一日付「萬朝報」に掲載された詰将棋の解答は、文末に記されている。この詰将棋は、角金歩の一手で、王将を捕らえるという簡単な詰将棋である。解答は、角金歩を王将の横に動かすことである。

「萬朝報」による新聞棋戦の開始により、棋士に対局料が支払われるようになった。それまでは、棋譜を掲載しても雑報（ニュース）として扱われていたため、よほど大きな対局でない限り、対局料は支払われなかった。段位にかかわらず一人一局二円（もりそばが約三銭の時代）だった。

「萬朝報」に三木愛花という相撲家としても知られる記者がいた。愛花は苦しい時代の将棋界に対し、終始好意的で、多大な尽力をした。詳しくは後述する。

以後、各新聞が續々と棋戦を掲載するようになった。

1・4 主な新聞の棋戦開始 ※カッコ内は開始年月日

明治時代

- ▽萬朝報（四一／九／一二）▽名古屋新聞（四一／一一／一二）
▽都新聞（四二／四／七）▽中外商業新報（四二／九／二六）
▽國民新聞（四二／一〇／一五）▽中央新聞（四三／一／
二八）▽二六新報（四三／二／一二）▽橫濱貿易新報（四三／
三／一二）▽神戸新聞（四三／三／一九）▽大阪朝日新聞（四四

萬朝報
明治41年

【資料③】

$\frac{9}{13}$ (日)
1面

刺客手合

【資料③】新聞棋戦の始まり。明治四一年九月掲載の「萬朝報」将棋欄

[illegible][illegible][illegible][illegible][illegible]

／二／二五）▽福岡日日新聞（四四／六／二）▽東京朝日新聞（四五／一／二）▽東京日日新聞（四五／三／三）

明治維新以来、江戸幕府からの保護を失うなど将棋界は苦しい道を歩んでいたが、新聞棋戦の開始により、ようやく明るい光が差し込んできた。

2 新聞棋戦開始の功労者・三木愛花^{みきあい}

2・1 略歴

三木愛花は明治／大正時代の新聞記者。文久元年（一八六一年）四月五日生まれ。上総国山邊郡大網町（現・千葉県大網白里市）出身。本名は貞一。昭和八年二月六日死去。

『東京新誌』『朝野新聞』『東京公論』記者、新聞『寸鉄』創刊、明治二六年に黒岩周六（涙香）が創刊した萬朝報社に入り、大正一二年まで記者として勤める。相撲通で、また将棋欄を初めて創設したことで知られる。著作に漢文体戯作『東都仙洞綺話』『東都仙洞余譚』『仙洞美人譚』など。

2・2 将棋界と愛花

指し将棋（実戦）の棋譜を初めて掲載した新聞が『萬朝報』で、明治三十一年（一八九八年）一月一日付だった。棋戦を初めて企

画した新聞も『萬朝報』で、同四一年九月一日付から「高段名手勝継将棋」を連載した。発案者は、どちらも愛花だった。

新聞棋戦の開始により、棋士は初めて対局料を支払われるようになった。段位にかかわらず、一局二円だった。江戸幕府からの保護を失い、苦難の道を歩んでいた将棋界にとって、新聞棋戦の開始は一筋の光明になった。また、愛花は東京市京橋区明石町の自宅を本拠にして、月刊の将棋雑誌『将棋新報』を創刊（四一年一二月号）、毎号いろいろなテーマで執筆した。

さらに、交流の少なかった棋士同士の団結を唱え、初の棋士団体「将棋同盟會」の結成に尽力した。翌四二年八月八日に発会式を行い、同年一〇月三日に「将棋同盟社」と名称を変更した。

当時の棋士は、ほとんどが副業を持ち、裕福ではなく、対局する場合も着流しだった。改まった席などでは、袴を着けてもいたいと考えた愛花は、数着のセルの袴をいつも備えていた。大正六年（一九一七年）二月には、関根金次郎八段が昇段点を取っていた弟子の土居市太郎七段の八段昇段を認めなかったことなどから愛花と対立、ついに関根は将棋同盟社を退社する。

一二年九月一日の関東大震災により、萬朝報の社屋や愛花の自宅が焼失、「将棋新報」も廃刊になった。まもなく愛花は萬朝報を退社した。

その後、土居市太郎八段の主幹による月刊誌『将棋新誌』（一四

年一月号)が創刊され、愛花も毎号のように健筆を振るった。

愛花は昭和八年(一九三三年)二月六日に満七一歳で亡くなるが、直前まで『将棋辞典』の刊行を企画し、実際に取り上げる項目を検討している最中だった。

3 最初の棋士団体「将棋同盟會」

3・1 明治維新による急激な衰退と新聞棋戦の開始

明治四一年(一九〇八年)九月に初の新聞棋戦(『萬朝報』の「高段名手勝継将棋」)が始まる。以後、各新聞社が棋戦を連載するようになる。

新聞棋戦の開始により対局料が支払われるようになったことが、棋士にとってはとても大きな出来事だった。それでも副業がなければ生活することはできなかった。

3・2 「将棋同盟會」の結成

対局が増えるにつれ、自然に棋士が顔を合わせることも増えてくる。前述したように「萬朝報」記者の三木愛花は、棋士がばらばらでは好取組も見られないし、世間にも評価されにくいので、かねてから棋士の団結を望んでいた。愛花は「将棋新報」誌上で棋士に団結を訴え、明治四二年八月八日、ようやく初

棋士団体「将棋同盟會」の結成まで漕ぎ付ける。

同年一〇月三日に「将棋同盟社」と改称(「會」より「社」の方が、規模が大きく見える、という意見から)する。以後、毎月第一日曜に定式会を開くことに決め、対局を行った。同盟社専属棋士は二三人で、「将棋新報」(同四二年一月号)に名簿が載っているので転記する。

四段	石原 勇吉	四段	太田 忠翁
五段	堀川 英歩	四段	岡村豊太郎
四段	豊島太郎吉	二段	奥野 一香
四段	土居市太郎	四段	黒川 潭龍
六段	川井 房卿	六段	矢頭 喜祐
六段格	勝浦松之助	六段	矢島新太郎
四段	勝山庄次郎	四段	寺田淺次郎
三段	田中武次郎	六段	簗 太七郎
五段	村上由之助	四段	森 永龍
五段	村越 為吉	八段	関根金次郎
四段	上田 愛桂	三段	鈴木 香芸
八段	井上 義雄	(姓名いろは順)	

3・3 棋士の副業(段位は当該棋士の最高位を表す)

明治時代の棋士は、将棋を指すだけでは生活が成り立たな

かったため、ほとんどが副業を持っていた。例を挙げてみる。

・飯塚力蔵（龍馬）八段↓貸し座敷（遊郭）の主人。駒台の発明者。※「力蔵」は「力造」と記す例もある。

・川井房卿七段↓べつ甲細工業。

・蓑太七郎七段↓富山の薬行商。

・矢島新太郎（五香）七段↓小間物屋（日用品、化粧品などを売る店）。「小間新さん」と呼ばれていた。

・村上由之助（桂山）六段↓常磐津節（浄瑠璃の流派の一つ）の太夫（語り手）。

・豊島太郎吉六段↓材木商、駒師。

・石原勇吉五段↓八百屋。「八尾勇さん」と呼ばれていた。

・奥野一香四段↓盤駒商店、駒師。

・木見金治郎九段（大阪）↓古鉄商、のちにうどん屋を副業とし、弟子の大野源一九段が出前持ちをしていたことは有名な話。

4 井上義雄八段と「将棋同志會」

関根金次郎八段（のちの十三世名人）と並び称された井上義雄八段の評伝と、その将棋団体「将棋同志會」を紹介する。

関根は三歳年上の井上にまず名人に就位してもらいたい、と公言していた。そして、数年後に自分に名人位を譲ってもらう

腹積もりだった。ところが、小野五平十二世名人が生存中の大正九年に井上は亡くなり、「井上名人」は実現しなかった。

4・1 井上八段略歴

元治二年（一八六五年）、山城国（現・京都）伏見町字油掛生まれ。本名・池上益太郎。生家は扇子屋。大正九年（一九二〇年）八月四日、五六歳（数え）で亡くなった。八歳の時に伏見町在住の原田仁平二段に手ほどきを受ける。一六歳で大阪の小林東伯齋八段（天野宗歩門下）から二段を許される。一八歳で三段、二三歳で五段、二八歳で六段、三〇歳で七段、明治三九年（一九〇六年）八段。連珠は八段、囲碁は四段。東京の自宅では「囲碁・連珠・将棋教授」の看板を掲げた。

4・2 土居名誉名人の井上八段評

土居市太郎名誉名人の回顧録「思い出の五十年」（雑誌「近代将棋」連載）によると、「（井上八段の）棋風は非常にすぐ、且つ策戦の駆引も巧みで、押しも押されぬ棋界の第一人者であった」「下手名人の称あり、駒落将棋は天下一品」だった、という。

関根八段との対戦成績は、通算三勝三敗一持将棋と五分だったが、人気では、関根にかなわなかった。「井上先生は品行方正

で一切悪いうわさを聞かないのに、関根先生に比し人気の立たなかったようである。その理由は気持が陰気で消極的で、芸能人に必要な楽天的のところが少ない」ところにあつたようだ。

4・3 将基同志會の結成

初の棋士団体「将基同盟會（のち将基同盟社）」は明治四二年八月八日に結成されたが、翌四三年一月一六日に井上八段、矢頭喜祐六段らが脱退して新たに「将基同志會」を結んだ。

明治四一年九月に「萬朝報」が新聞棋戦を開始してから、ほかの新聞社でも棋戦を立ち上げる動きが出てきた。元「国民新聞」社員で、新聞販売店をしていた佐藤功二段（のちに「棋狂老人」の筆名で観戦記を執筆）から国民新聞でも棋戦を企画し、最初に関根対井上の八段対決を掲載したい、という要請があつた。

関根、井上は対局を了承したが、将基同盟社の幹事・堀川五段、岡村四段、奥野二段から、こういう大事なこととは同盟社を通してほしい、承認できない、との強硬意見が出された。

同盟社の世話役だった三木愛花は、「萬朝報」の記者でもあり、以前から関根―井上戦の対局を希望していたが、実現していなかった。恩義のある愛花の立場を配慮しての意見だった。それほど反対意見があるのでは、と関根は対局中止を決めた。

反対に井上は、この機会に関根を中心とした同盟社を脱退し、

国民新聞を背景に新たに「将基同志會」を結成した。矢頭喜祐六段、勝浦松之助六段、村上由之助五段、大崎熊雄二段、溝呂木光治初段らが参加、半年も立たずに棋士団体は分裂してしまった。その後、井上は「国民新聞」から「中央新聞」に移ることになる。

5 関根八段、将基同盟社を退社

明治四二年に初めて誕生した棋士団体の将基同盟社は、関根金次郎八段を中心棋士に「萬朝報」記者の三木愛花が世話役を務めて運営されてきた。ところが、大正六年（一九一七年）に大問題が起き、関根と愛花との間に亀裂が走る。

5・1 経緯① 関根、阪田に敗れる

大阪の阪田三吉八段は、「打倒関根」を旗印にして戦ってきたが、大正二年に初めて関根に平手で勝ち、四年には小野五平十二世名人の許しを得て八段に昇進した。同年、「将棋の殿様」といわれた柳澤保恵伯爵は関根―阪田戦を企画したが、直前に関根が体調を崩して辞退（関根が阪田の先手番を主張したが、認められなかった）ので対局を断った、という説もある）。そこで井上義雄八段と阪田が戦い、阪田が平手で勝った。

同六年に柳澤伯爵は関根—阪田戦をもう一度企画する。一〇月八、九日に行われた対局は、天下分け目の大一番として、新聞各紙が大きく取り上げた（棋譜は「大阪朝日新聞」連載）。本局に関根は敗れ、「萬朝報」「将棋新報」の講評権を手放すことになる。

5・2 経緯② 土居七段の八段昇進問題

関根の一番弟子の土居七段は、大正六年九月の将棋同盟社の定式会で八人抜きして八段昇進規約に達していたが、まだ二九歳と若いのもう少し待ってからということになっていた。

ところが、関根を破った阪田と同年一〇月一六、一七日に平手で土居が勝ったことから、将棋同盟社幹部と土居の後援者は関根に八段昇進を迫った。関根は「自分のお鉢に関係するから免状は出せぬ」と断った。当時、小野五平十二世名人は八七歳（数え）の高齢で、次の名人につい



関根八段（左）と阪田八段との天下分け目の一戦Ⅱ『国民新聞』大正六年一〇月九日付

て、関係者の間でいろいろな思惑があった。実際に将棋界で活躍していた八段は、井上、関根、阪田の三人。この中から次期名人が決まると考えられていた。中でも最有力候補だった関根にとつて、新たに八段が誕生することは、自分の名人襲位に差し障ると思えて土居の八段昇段を認めなかった。

結局、将棋同盟社は関根の許しを得ぬまま土居の八段昇進を決定する（一一月四日）。反発した関根は翌一二月に将棋同盟社を退社した。その結果、「萬朝報」「将棋新報」の講評権は土居に移った。

5・3 関根、新団体「東京将棋倶楽部」を結ぶ

退社した関根は、弟子の金易二郎七段らとともに同七年六月二〇日、新たに棋士団体「東京将棋倶楽部」（柳澤伯爵の命名）を結成する。その後、関根は土居の八段昇進を認め、同八年三月一六日に催された八段披露会にも出席して免状を手渡した。

小野十二世名人が同一〇年一月二九日に九一歳（数え）で亡くなる。同年五月八日に東京将棋同盟社（土居派）、東京将棋研究会（大崎熊雄七段派）、東京将棋倶楽部（関根派）の三派が合同で関根の名人披露会を開催、愛花も「賛助」の立場で出席した。将棋同志会を率いていた井上八段は同九年八月四日に亡くなっていた。

愛花と疎遠になっていた関根だが、同二年九月一日に起こった関東大震災で愛花の自宅が焼失したと聞くと、自分も家を失っていたにもかかわらず、弟子の渡辺東一四段に指示して見舞金を届けて愛花を感激させた、という。

6 小野十二世名人、九一歳で逝去

6・1 小野五平十二世名人略歴

天保二年（一八三二年）一〇月六日生まれ。阿波国脇町（現・徳島県美馬市）出身。幼名は土井喜太郎。『幕末の棋聖』天野宗歩から指導を受ける。万延元年（一八六〇年）三段、文久元年（一八六一年）四段、同三年五段、慶応三年（一八六七）年）六段、明治二年（一八七八年）七段、同二年一〇月八段、同三年五月八日に名人披露会開催。小野は大正一〇年（一九二二年）一月二十九日に亡くなる。九一歳（数え）。

6・2 小野名人の訃報記事

大正一〇年（一九二二年）一月三〇日付

①「大阪朝日新聞」から阪田三吉八段の追悼談話

『昨年十月名人が九十歳祝賀大棋會に私が参加した際、翁は私に對つて「俺は若い時にある暗示によつて九十一、二歳が定命

といふ事を感じし確信してゐる、今度の會後名所などを巡歴し度い就いては名人の繼承の事も生あるうちに考慮して置かねば甚だ心懸りだ」との事に

私は先輩関根八段が繼ぐの至當なる事を力説しました、現今棋壇に立つものにて準名人の八段格は氏を除きて土居氏と自分だけで土居氏が関根門下の人なればこれに異存ありとも想はれぬ、「迷ふ事なく関根氏に御決定あるが安泰です」と重ねて進言した事でしたが、其時の翁が言箴をなして長逝されたのは棋界の為め痛惜に堪へませぬ（原文のママ）』

この記事から阪田八段が「関根名人」襲位を明確に支持していることが分かる。

②「報知新聞」から関根金次郎八段の追悼談話

『小野名人は先代名人伊藤宗印氏の後を承けて名人となられた人である

阿波の産で同郷の誼で故芳川顯正伯の引立てを受けて斯界に盡した人で維新の際将棋が衰微してゐたのを同氏の力で挽回して現在では柳澤伯一條二條公公平伯を始め華族界に勢力を得た現在斯界の名人は大阪の阪田八段横濱の矢島七段千葉の勝山五段東京の森五段其他多くあるが小野名人は極最近まで日本倶楽部に通つて後輩の為め指道の勞を執つた人格高い人で惜しみても餘りある次第だ（原文のママ）』

7 関根、十三世名人に

7・1 大崎熊雄八段の回顧録

大正九年ごろから関根金次郎名人誕生までの経緯を、大崎熊雄八段（贈九段）が詳細に述べた文章を紹介する。年齢などで誤りもあるが、当時の状況、経過をよく表している。

《小野名人の死によつて名人問題はいよいよ本舞臺には入つたが、當時實力から言へば第一に坂田三吉師に指を屈せねばならなかつた。土居師も新しく八段になり坂田師とは一勝一敗の成績であつたが経歴人氣の點では、やや坂田師に劣るものがあつた。

しかし名人問題が起るや「将基同盟社」の機關雜誌は、實力あり且前途に春秋の多い土居師を名人にすべしと主張し、毎月のやうに有名な三木愛花翁が筆をとつて居られ、そして實際のところをいふと関根先生が一番影が薄いやうであつた。兎も角、関根・坂田・土居の三派は、小野名人の死と同時に各々行動を開始した。（中略）坂田三吉師には關西将棋界は勿論大阪朝日が絶対の支持を與へて居たし、東京でも柳澤伯が實力主義の立場から支持してゐられたやうである。関根先生の方には金（當時七段）が筆頭にひかへて居たが金師もまだ若い頃で社會的な力は極めて弱かつた。しかし其處へ力をかさうとしたのが、竹内翁²と私と、それに東京朝日の桑島俊（鈍聴子）氏である。

其間種々の経緯はあつたが、坂田師には私が柳澤伯邸で説き、三木氏には竹内翁が會つて、結局関根先生の「名人」繼承が実現するやうになつたのである。関根先生の五十五歳の時であつたと思ふ。（原文のママ、後略）

この文章は昭和一〇年（一九三五年）の大崎八段の口述を、「国民新聞」将棋欄で「棋狂子」の筆名で觀戦記を担当していた倉島竹二郎が筆記したもの（「将棋世界」昭和一五年八月号掲載「大正棋界の發展」宮本弓彦執筆から）。

7・2 関根八段の名人受諾談話

《今夕坂田八段の参列はなかつたが代理の人が來て呉れた、勿論其處には既に諒解が成立しているから私は潔く推挙を受けた次第です、私は棋界の此推薦に行つて小野家の後繼者として立つて行く事は無上の光榮と思ふと同時に棋界の情実を一掃して嚴正の態度を持して行きたい覚悟です（原文のママ）》

大正一〇年（一九二二年）二月五日付「報知新聞」

8 東京将棋連盟創立

8・1 三派合同への機運

大正一〇年五月八日に開催された「関根金次郎名人披露會」

は、三派に分かれていた東京の棋士団体を統一する呼び水になった。当時、東京の棋士団体は次の通り。東京将棋倶楽部（関根金次郎名人派）、東京将棋同盟社（土居市太郎八段派）、東京将棋研究會（大崎熊雄七段派）。

棋戦を主催している新聞社にしても、一派だけでは同じような顔触れによる対局になり、新味がなく、盛り上がりには欠けた。当時の新聞棋戦は、ほとんどが勝ち抜き戦で、所属棋士の少ない団体は、なおさら切実な問題だった。

8・2 三派出場棋戦「東西対抗報知将棋」の開始

具体的な動きは「報知新聞」主催の三派出場棋戦「東西対抗報知将棋」の開始だった。同一二年三月一七日付から連載が始まった。

対局者の顔触れは、東軍を東京将棋倶楽部の部員、西軍を東京将棋同盟社の社員と東京将棋研究會の會員の連合軍とした。ちなみに、この時の対局料は段一円で、つまり八段なら八円の対局料だった。初戦は大崎七段（香落ち）対寺田梅吉五段戦で、大崎が勝った。以後も大崎が勝ち続け、結局七連勝した。

報知新聞には、愛棋家で知られた太田正孝副社長（のちの自治庁長官）と将棋欄担当の生駒彥藏（筆名・翱翔）こうしょうⅡ鳥が空高く飛ぶこと）が在籍し、棋戦の充実を考え、大崎七

段や三木愛花らとともに三派合同を進めていた。

ところが、同年九月一日、関東大震災が起り、新聞社はほとんど被災した。焼かれなかったのは報知、東京日日、都の三社だけだった、という。反対に最も打撃を受けたのは愛花が在籍する「萬朝報」で、致命的な被害を受けた。時事新報、国民、毎夕、読売、東京毎日、やまと、中央の各新聞社も手痛い打撃を受けた。

最も早く立ち直ったのは、大阪に大資本を持つ東京日日、東京朝日の両新聞社で、ここから部数を急速に伸ばしていった。雑誌では将棋同盟社発行の「将棋新報」が廃刊になった。この年、大崎七段後援会の大崎會が「新棋戦」を創刊したが、第六号で震災に遭い休刊した（大正一五年五月に第二巻第一号を復刊）。

8・3 「東京将棋聯盟」成る

大正一三年（一九二四年）九月八日、三派が合同して「東京将棋聯盟」を結成した。現在の日本将棋連盟は、この日を創立記念日に定めている。關根名人を名誉会長、土居八段を会長、大崎、金易二郎の両七段を副会長に選んだ。同時に太田正孝、生駒彥藏、中島富治、海老塚薫、石山賢吉、蟠崎英朋の諸氏が名誉顧問になった。

参加棋士は、關根、土居、大崎、金のほか溝呂木光治七段、花田長太郎七段、岡村豊太郎六段、宮松関三郎六段、石井秀吉

六段、木村義雄六段、寺田梅吉五段、飯塚勘一郎五段、小泉兼吉五段、金子金五郎五段、平野信助五段、山北孫三郎五段、根岸勇四段、渡辺東一四段、萩原淳四段、鈴木禎一四段の合計二〇人。

また同日、大崎、金の八段昇段が発表された。この年、「大崎会」の後援会長・石山賢吉ダイヤモンド社社長らが両者の八段昇段を関係者に根回ししていた。土居八段は反対したが、太田副社長の説得に条件付きで同意した。その条件は、名目は八段でも七段格の手合(半香)で対局するという「指込手合」の実施だった。大崎、金に続き同年九月(一〇月説もあり)、大阪の木見金治郎七段が、翌一四年二月には花田七段が八段に昇段した。

9 阪田の名人僭称問題

大正一四年(一九二五年)三月一二日付「大阪朝日新聞」は「坂田八段をいよいよ名人に推薦 京阪神の多数有志から」と題し、後援者に推された阪田三吉八段が名人を名乗るまでの経緯を大きく報道した。

9・1 阪田八段が名人をとえた理由

東京将棋連盟の結成から約半年の間に四人が八段に昇段した。それまで将棋界で実質的に活躍していた八段は、阪田と土居市

太郎の二人だった。阪田の後援者は、このままいけば関根金次郎十三世名人の後継者は当然先輩の阪田と考えていたことだろう。ところが、わずか半年の間に八段が四人増えるという「八段乱造」とどうとう我慢できなくなったことが最大の理由だった。

9・2 「大阪朝日新聞」の名人宣言記事

阪田の真情としては「寧ろ無段を標榜して『何等の拘束なく自由に手合せして生涯を将棋道に捧げたい』との信念」(大正一四年三月一二日付「原文のママ」以下同様)を抱いていた。ところが、阪田は恩人とも言うべき後援者からの強い要請を断りきれなかったのだ。「日本麦酒の高橋龍太郎、ダイヤモンドの佐田富三郎、大阪俱樂部の平田讓衛、観音林俱樂部の那須善治、清交社同人、銀行俱樂部の坂野兼道、王子製紙の堀越重助の諸氏はその部の代表の意味を以てまた個人としては特許辨理士の江田邦太、(中略)京都の有力者等の紳士一齊に起つて坂田氏名人推薦を發議したところ斯界の愛護者素人棋客の高段者である伯爵柳澤保恵氏は『当方より御相談願はんと豫てより心掛け居り候こと、て全然同感大賛成に有之候、現時玄人筋の人物無暗に昇段の事実を見心密かに嘆息致し坂田氏に何となく気の毒に存居候際として何卒至急名人に昇格の議希望の至りに不堪候云々』と即座に共鳴し來り、更に伯の棋友福島行信、久米民之助、

東京将棋連盟の決議

《決議》

一、東京将棋聯盟は八段阪田三吉氏の名人昇格を認めず

二、阪田氏が実力を以て名人の段位を勝ち得んとして東京将棋聯盟に挑戦する場合将棋聯盟は代表選手を選抜してこれに開戦することを辞せず

右決議す

大正十四年三月十三日

東京將棋聯盟

元來名人は一時代に一人に限るのは、數年來將棋界の傳統的不文律で、現に名人關根金次郎の嚴存する今日、更に他に名人を樹立することは、將棋界の慣習を無視した暴挙で素人の推薦のみで解決せんとするは將來に惡弊を残すものである（原文の

ママ、
以下略）

大正一四年三月一四日付「報知新聞」

10 将棋の読売 大躍進！

10・1 八段同士の大型棋戦開始

大正時代の末期、棋士として実際に活躍していた八段は、土居市太郎、大崎熊雄、金易二郎、木見金治郎、花田長太郎、木村義雄（大正一五年（一九二六年）四月二三日に八段免状授与）の六人だった。関根金次郎名人は新聞棋戦の優勝者との模範試

[illegible]

八段同士の大型棋戦「東西将棋八段優勝手合棋譜」の第一局開始を伝える「読売新聞」観戦記。昭和二年一月一八日付

合を行うことが多かった。「八段乱造」を非難して名人を僭称した阪田三吉は、東京将棋連盟と絶縁状態に陥り、孤立していた。

ところが、八段が増えたことにより八段同士で戦う大型棋戦が続々と誕生する。その結果、将棋界は飛躍的に発展する。

まず動き始めたのが月刊誌「講談倶楽部」（大日本雄辯會講談社・現・講談社）で、全八段出場の「平手対局八段總出勝繼大棋戦」を企画し、昭和二年三月号から連載した。

新聞社では、読売新聞が最も早く大々的に取り上げた。昭和二年一月一八日付から始まった「東西将棋八段優勝手合棋譜」（全八段出場・花田八段優勝）では、従来の一段扱いから四段扱いのスペースにし、対局料も八段一人一局七五円を支払った。それまでは八段だと一人一局一〇円前後だったので、大幅な増額になった。

以後、報知新聞による全八段出場「報知将棋大リーグ戦」（同二年一月二二日付）、東京朝日新聞による名人八段出場の対抗戦「本社将棋新争覇戦」（同二年二月二日付）、国民新聞による全八段出場「名家敗退国民新棋戦」（同四年三月三二日付）など、各新聞で大型棋戦が続々と開始された。

10・2 「読売新聞」の成り立ちと発展

「読売新聞」は明治七年（一八七四年）十一月二日に創刊さ

れた。尾崎紅葉の「金色夜叉」や高山樗牛の「瀧口入道」などを連載して「文芸新聞」といわれていた。

大正一三年（一九二四年）二月二五日に第七代社長に就任した正力松太郎は、さまざまな新企画を立てて実行していた。例えば、ラジオ版の創設（同一四年一月二五日付）、対立していた本因坊秀哉と棋正社の雁金準一七段との囲碁対局を実現（同一五年九月二七日付から連載）、昭和に入ってから全米選抜プロ野球団の招聘（昭和六年＝一九三二年＝一〇月）、再度の招聘（同九年一月）、東京巨人軍の創設（同九年二月）など、数多くの話題を提供した。正力社長の就任前は約五万五千部だった発行部数は、昭和一三年には百万部を超える大躍進を遂げた。

10・3 菅谷北斗星の登場

「観戦記文学の草分け」として知られる菅谷北斗星は、明治二八年（一八九五年）十一月二七日、栃木県生まれ。本名・要。昭和三七年一月二日、六六歳で亡くなる。大崎熊雄八段（贈九段）の助手として観戦記を執筆、その後、読売新聞社に入社し、昭和二年四月二四日付から観戦記を執筆、一人で書き続ける。次々に新企画を立てて、昭和一〇年に名人戦が始まるまでは将棋の読売とうたわれた。戦後はタイトル戦「九段戦」「十

段戦」の創設に力を尽くした。

10・4 読売新聞社主催による戦前の主な棋戦

「名人八段五人拔大棋戦」

「日本選手権争奪大棋戦」 ※木村八段優勝

「木村金子十番将棋」 ※木村八段の四連勝で打ち切り

「名人八七段勝抜戦」

「坂田木村大棋戦」(南禅寺の決戦) ※木村八段の勝ち

「坂田花田大棋戦」(天龍寺の決戦) ※花田八段の勝ち

11 実力名人戦の発案と開始

11・1 関根名人の大英断

昭和一〇年(一九三五年)、徳川時代から三百年以上続いた終生名人制は、関根金次郎名人の大英断で実力による短期名人制へと大きく変貌を遂げることになる。その声明書は次の通り。

《声明書

本會は時相の推移と棋界の現状に鑑み昭和十二年度を期して三百年傳統の一世名人の制を廢しこれに代ゆるに短期交代の名人制をもつてし名人の選定は専ら實際對局の成績によること、

し近くこの對局を開始することに決せり

昭和十年三月廿六日

日本将棋聯盟會々長

金易二郎

関根名人談 私は棋界の現状を考慮し、かねがね後進に道を譲りたいと考えてゐたが、聯盟では私の意のあるところを諒察され、昭和十二年七十歳をもつて名人位を退くことにしてくれました、また同時に舊制を廢し時代に適應せる新制度を講じ棋界百年の計を立ててくれた、私はこの制度の改革に寄與して年來の念願たる棋道の隆盛に寸功を致し得たることを衷心からよろこんでゐる(原文のママ)》

昭和一〇年三月二七日付「東京日日新聞」

11・2 立案者の中島富治

なかしまとみぢ

実力名人戦の実質的な立案者は、日本将棋連盟顧問を務めていた中島富治(号・融雪。昭和三十一年一月二三日に七〇歳で逝去)だった。中島は退役海軍主計官で、高島屋飯田貿易の顧問をしていた。初めは土居市太郎八段の後援者だったが、次第に将棋界全般にかかわるようになった。

では、中島はどのように考え、根回しをし、実力名人戦を実行していったのだろうか。中島が「週刊朝日」の昭和二五年三

月五日号から五月二八日号まで一回にわたり連載した。将棋
隨筆盤側三十年”の中から、その個所を引用する。

《私が二度目に棋界の世話役を引き受けたのは昭和三、四年頃であつた。その頃将棋はだいぶ盛んになつてはいたが、それともきわめて低調なものであつた。因襲久しき封建制は容易に改まらず、積弊が少なからず棋界の隆昌を妨げていた。》(略)

いろいろと考えたあげく、到達した結論は、名人制度の變革と名人戦の決行であつた。三百年の伝統を持つ一代名人の制度を廢して、實力により名人を選出することであつた。純然たる選手権制度である。(略)

だんだんに機は熟して來た。折よく甚だ好都合な情勢にも恵まれて、十分な自信を持ち得るに至つたので、意を決して麹町三年町に関根名人を訪ねた。昭和十年一月十四日、風の強い、寒い日であつた。

関根名人夫妻は珍客人来とばかり心をこめて歓待してくれた。早速草案を取り出して要談に入つた。棋界の現状から将来にわたつて子細に検討し、改革のやむを得ざること、改革のもたらす効果の見通しなどについて詳しく述べた。名人はほとんど口をきかず、時々眼をつぶつて考えていたが、やがて口を開いていとも静かに「結構です、どうぞおやり下さい」といつて、くりかえし私の苦心に対して謝意を表するのであつた。(略)

越えて三月十八日、全八段を拙宅に招集した。木見は大阪から何ごともご一任すると申入れて來た。この日一新聞(注…東京日日新聞)が「関根名人退位か」の大見出しで、三段抜きのトップニュースとしてこの会同(注…会合のこと)を大きく取扱つたので、早朝から新聞社、通信社その他の多数の人々の來訪を受けた。電話のベルは鳴りつづけた。門前には数台の自動車がとまつて、何ごとかと近所のひとびとを驚かした。

やがて全員參集。土居、金、大崎、花田、木村、金子の六人であつた。會議は階上の一室で開かれた。彼等はけさの新聞で大体推察していたが、草案を見てさすがに驚いたようであつた。二時間にわたる質問応答のうち全員喜んで賛成、小修正を加えただけでこれを可決した。ただこの企画が一年七八万円を要する点において実現をあやぶむ氣配が濃厚であつた。今の力ネにすれば千万円にも当るわけで、あやぶむのが当然であつた。この會談は全員棋界の前途を思う熱意に燃え、極めて真剣な、しかも和氣あいあいたるふんいきのうちに行われた。

つづいて廿五日山王境内の茶屋に臨時總會を開いて付議したが、七段以下に異論があつて紛糾五時間にわたつた。名人戦に反対するのではなく、八段のみが余りに恵まれるというのであつた。結局、一年後に期待せよとなだめて同意させた。

これでこの改革は成立したのであつた。成立はしたが、いよ

いよ名人戦をはじめるまでにはいろいろ厄介な問題が起つて、一そう名人戦をやめてしまおうかと痼癪をおこしたことさえあった。(原文のママ)》

11・3 阿部真之助の内幕記事

名人戦の主催新聞は、東京日日新聞・大阪毎日新聞だった。昭和和一八年(一九四三年)一月一日、東京日日新聞と大阪毎日新聞は新聞統制により題字を「毎日新聞」に統一し、現在に至っている。

中島とともに名人戦の成立にかかわったのが東京日日新聞学



芸部長の阿部真之助(のちNHK会長)だった。

「サンデー毎日」

誌上に終生名人制への批判記事を執筆した阿部に對して、かねてから同じ意見を持っていた中島は、同紙将

棋担当記者の黒崎貞治郎(注:「梅木

三郎」の筆名で「長崎物語」「空の神兵」などを作詞)を通じて実力名人戦の創設を持ちかけた。

当時の内幕を「近代将棋」昭和二五年四月号(創刊号)に阿部が「名人戦の始まった頃」と題して寄稿しているので引用する。

《現在でもそうだと思うが、大きな新聞社では、お抱え相撲のようにして、専属の棋士を抱えていた。中島のいうには、自分の勢力下には、花田、塚田、坂口、加藤等々の精鋭分子がある。木村は別派だが、いよいよ名人戦が始まれば、次期の名人たる公算は、木村に一番大きい。だから木村がこれに反対する理由がない。最も難関だと思われるのは、土居の一門だ。土居は棋界に一時期を劃した天才で、もし関根というものがなかつたら、とつくに名人を襲うべき人だった。不幸にして関根に頭を押えられ、その間に最盛期をすごしてしまつた。今にして実力をもつて名人位を争う如きは、彼の最も不快とするところであろう。しかし土居が、毎日新聞に専属していることは、僥倖である。毎日の発企として名人戦を始めるなら、彼は義理合ひ上、反対することはできないだろうと、いうのだつた。しかし私の懸念は、関根が果して、快く引退を決意するや否やだつた。(原文のママ)》

関根名人の胸中はどうだつたか。作家で、観戦記者の倉島竹二郎は、その著書『関根金次郎物語』の中で、次のように当時の関根の言葉を書き残している。

《先代名人の小野さんは六十九歳で名人になられたが、九十一歳までおられたから、わしは二十二年間も名人の待ちぼうけをくった。自分の弟子をほめるのはどうかと思うが、若いながら木村義雄などは名人の器うつわのような気がするし、他にも優秀な棋士が沢山いる。そうした有望な棋士たちにわしがなめたと同じような思いをさせたくない。だからわしは何とかして後進に自分の地位を譲る道はないかと単に考えていた。それが中島富治さんとの話し合いで一代制の名人の廃止から実力名人戦による名人へと具体化したのだが、最初わしは九段制を考えてそれを主張したことがある。諸君も御承知のようにこれまで八段以上はなく九段は名人と同じだが八段のもう一段上の九段をつくり、その九段の中から成績抜群の者に名人を譲ろうかと思つた。しかし、九段をつくるというだけでは新聞社にとつてもう一つ魅力がない。どうしても名人戦ということにせぬとバツと派手にはゆかぬ。新聞社としてはそのことで沢山の金を出すのだから、読者に受けるようにウンと派手にしたいのは当然で、それやこれやで実力名人戦という制度になつたのである》

実力名人戦が開始されて約八十年たち、現在の将棋界の隆盛は、この関根名人の大英断によるものと言えるだろう。

特別リーグ戦の対局料は八段一局一人三百円（もり、かけそばが一〇〜一五銭、公務員の初任給が約七十五円の時代）と高

額（七段…百二十円、六段…百円、五段…八十円）で、それに準じてほかの新聞棋戦の対局料も上昇し、八段にとつて以後数年間は、経済的には最も潤つた時代だったかもしれない。

実力名人戦が開始された昭和一〇年の十一月、関西の神田辰之助七段の八段昇進を巡って日本将棋連盟は分裂するが、約半年後に統一される。

12 南禅寺の決戦〜阪田三吉対木村義雄戦〜

昭和十一年（一九三六年）六月に棋士団体の「将棋大成会」が結成され、東西の将棋界は統一したが、関根金次郎十三世名人の在位中にもかかわらず「名人」を自称して将棋界でただ一人孤立していたのが、関西

希望の巨人今を起つ！

關西の棋聖阪田三吉氏

木村花田兩八段と闘ふ



人孤立していたのが、関西の棋聖 阪田三吉だった。

読売新聞社の十年來の懇請に応じて阪田は、指し盛りの八段二人、木村義雄、花田長太郎と対局することを決意する。まず、木村との対局は昭和十二年二月五日から一日までの一週

阪田出馬を伝える読売新聞の記事
昭和十一年二月二十四日付

間、持ち時間各三〇時間という異例の条件で、京都市洛東「南禅寺」で行われた。後手番阪田の第一手△9四歩に阪田ファンは喝采したが、軍配は木村に上がる。のちに、南禅寺の決戦とうたわれる大勝負だった。読売新聞紙上には「坂田木村大棋戦」と銘打って二月六日付から三月一〇日付まで連載された。続く対花田八段戦（天龍寺の決戦）にも阪田は敗れた。

12・1 一〇年掛かりで実現にこぎ着ける

阪田三吉八段が大阪で「名人」を自称して、当時の東京将棋連盟と関西の木見金治郎八段派と絶縁したのが大正一四年（一九二五年）三月のことだった。以後、阪田は大阪朝日新聞社の嘱託として、主に指導対局などを行ってきた。

東京方の棋士との対局をぜひ実現させたい、と阪田に働きかける新聞社はいくつあったが、いずれも失敗に終わっていた。中でも読売新聞社は、正力松太郎社長の意向を受けた担当記者の菅谷北斗星が十年越しで働きかけていた。

昭和八年（一九三三年）九月五日、阪田は明治四二年（一九〇九年）から嘱託を務めていた大阪朝日新聞社を退職した。当時、およそもりそばが一〇銭、大卒初任給七〇円の時代で、阪田の月手当は一八五円だった。なお解職手当（退職金）は五、〇〇〇円が支払われた。

徳川時代から三百年以上続いた終生名人制（一度名人位に就いたら亡くなるまで名人、という制度）は、昭和一〇年（一九三五年）に関根十三世名人の大英断で実力による短期名人制へと大きく変貌を遂げる。この実力名人戦の開始が阪田の意欲をかき立てたことは間違いないだろう。

そして、その名人位を目指して激しく争っていた棋士が木村八段（三一歳）と花田八段（三九歳）だった。

12・2 菅谷北斗星の回顧録から

菅谷北斗星が回顧録『将棋五十年』時事通信社刊）の中で当時の状況を述べている。阪田出馬が具体的な動きになってきたのは昭和一一年の末ごろだった。

『私の所属する読売新聞社の主催であることはもちろんで、読売の希望として名人位を争ってツバ競り合いを展開している木村、花田の両八段に白羽の矢を立てた。坂田翁からある程度の内諾を得たので、この実現を将棋大成会（注：現・日本将棋連盟）に申込んだ。もとより、その前に、木村、花田両氏から、会さえ承認すればの快諾は得てあった。

ところが大成会としては重大問題で、名人位の最有力争覇者が、会員外の坂田八段に負けるようなことでもあると、たとえば名人戦で優勝したとしても、名人に推薦する上に大きな支障を

免れないからで、名人戦を独占契約している毎日新聞社（注：当時の題字は東京日日新聞・大阪毎日新聞）の関係者も加わって、種々評議が行われた。》

場合によっては脱会してでも阪田と対局したい、という木村の強い意志を受けて将棋大成会も了承し、ついに実現の運びになる。関係者で協議した結果、対局の条件は次のように決まる。

一、手合は平手（振り駒）。

一、持時間は各三〇時間。

一、対局日数は七日間。

一、指し掛けの封じ手は交互にする。

一、対局中は泊り込みとして外出を禁ず。

一、老齡（満六六歳Ⅱ数えの六八歳）の坂田翁のために付き

添いを認める（令嬢玉江さん）。

※対局場は南禅寺の中の「南禅院」奥の書院。

対局は表向き「振り駒」としていたが、実は阪田の顔を立てて木村、花田が先手番と決まっていた。

阪田は大正一一年（一九二二年）四月に花田長太郎七段と対局（花田勝ち）して以来、なんと一五年ぶりの平手戦だった。

12・3 後手阪田の第一手は△九四歩！

南禅寺の決戦は、阪田の端歩突きでも一般によく知られている。

先手木村の▲7六歩に対して△9四歩と端歩を突いた阪田の真意は、一五年ぶりの平手戦なので最新の定跡、研究を避けたとも、「平手将棋は攻めるが不利」という原理を実践したものだともいわれた。

木村は、この△9四歩について、のちにこう語っている。

《坂田さんは二目目に△9四歩と端歩を突いてきた。

これが問題の一手だったねえ。

この手が生きて、こつちを追いつ込むようになるとは考えなかったね。結局、この手で駒組みが遅れて、あの将棋は駄目になったんだから。あの手で随分、気が楽になったね。》

『週刊将棋』“連載インタビュー”木村十四世名人に聞く③

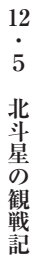
昭和五九年八月二十九日号

阪田はこの端歩突きについて、どう語っていたのだろうか。

かつて筆者は、阪田の直弟子・星田啓三八段（故人）にこの点を取材した。星田青年が端歩突きの真意を尋ねたところ、阪田は「時がたてば分かる」と答えるだけだった、という。

12・4 対局料は二局で一萬五千元！

この時の対局料は、のちに木村が二千五百円と明かしている（『将棋世界』昭和四八年八月号掲載の木村石垣対談「真剣勝負五十年」）。



北斗星はこの観戦記を次のように締めくくっている。

《坂田氏は「有難うございます、有難うございます」とお辞儀をして歩いた。それからまた私達は南禅院に引きあげて、

阪田の対局料については、本間爽悦七段（のち八段）が直接北斗星に聞いた、として二局で一萬五千元だった、と公表している。（『将棋世界』昭和三八年七月号掲載「真説『王将』（下）」）。

《翁を愛する菊池寛氏及び読売の名観戦記者として知られる菅谷北斗星氏（故人）の奔走で、二局、一万五千元也でまとまつたのである。この金額は星田六段の記憶（二局、一万円）と多少違ふが私は、菅谷氏から直接聞いたのだから間違いないだろう。》

迎えの車に乗るのを待った。

南禅院は石段の上にある。小雨に煙る杉木立からは、しずくがぼたりぼたりと肩の上に落ちた。坂田氏は七日間の疲労が一時に出たか、足もとが心もとないので、令嬢の玉江さんが抱ええる様にして昇っていった。

私は後から傘をさしかけて……見るともなしに見る坂田氏の頸筋が、心なしかげっそり肉が落ち、やつれたのを感じた。私は何ということなしに目頭の熱くなるのをどうとすることが出来なかつた。

急に坂田氏が振り返った。『おおきに苦勞様でございました』と礼を言われた。私は傘から顔を出して、『しずくがひどいです』と答えた。ほんとうに杉のしずくが私の頬を濡らした。』

日本将棋連盟刊『菅谷北斗星選集 観戦記篇』

1 新聞に初めて掲載された詰将棋の解答

▲7四馬 △9四玉 ▲9五歩 △同 玉 ▲8六角 △同 玉
▲7五銀 △7六玉 ▲8五馬 △同 玉 ▲8六金 △9四玉
▲9五香まで、一三手詰め。

2 「竹内翁」とは、山形県酒田在住の素封家である竹内丑松(号・淇洲)八段のこと。

【補遺】木村、初の実力制名人に

二年半にわたる実力名人戦の優勝争いは、木村義雄八段と花

田長太郎八段に絞られる。両八段による名人位を決定した大一番は、一九三七年（昭和十二年）二月五、六日、神奈川県湯河原「天野屋旅館」で行われ、木村が勝ち、第一期実力名人に輝いた。この天野屋での大一番は、一九三八年（昭和十三年）一月一日付から一三日付まで、作家の佐々木茂索が主催紙の東京日日新聞・大阪毎日新聞に観戦記を執筆した。

- ① 文献により「阪田」「坂田」と名字の表記が混在するが、日本将棋連盟では「阪田」で統一している。
- ② 阪田は昭和三〇年（一九五五年）に名人・王将を追贈された。
- ③ 文中敬称略

付 将棋史研究の人々

今まであまり表に出てこなかった方を含め、将棋の歴史を研究してこられた方々を紹介させていただく（以下敬称略）。

山本 亨介（一九二三～一九九五）
やまもと きょうすけ

大正一二年四月二九日、和歌山県生まれ。筆名・天狗太郎。昭和二年、大阪日日新聞社入社。二六年、サンケイ新聞東京本社入社、三五年朝日新聞東京本社入社、三八年に退社して文筆生活に入る。作家、将棋史研究家。平成七年十一月一〇日逝去。

著書に『将棋文化史』『将棋庶民史』『名棋士名勝負』『将棋名言集』『将棋・戦国争覇録』ほか。

越智 信義（一九二〇～二〇一四）
おちのぶよし

大正九年八月六日、東京・築地生まれ。古棋書収集家。現在保存されている棋譜は、昭和二九年以降のもので、越智氏が初めに保存、整理した。同四四年に東京・日本橋「白木屋」（現・東急百貨店）で開催された「将棋四〇〇年展」を企画、実現に尽力。翌年から続く将棋まつりの先駆けになった。将棋史を語るうえで必ず名前が出てくる「将棋博士」だった。第二回大山康晴賞受賞。著書に『将棋の博物誌』、編著に『将棋随筆名作集』『随筆選集・将棋の風景』ほか。平成二六年一月一〇日逝去。※「将棋世界」平成二六年七月号に追悼文あり。

加藤 久弥（一九〇九～一九九二）
かとう ひまや

明治四二年一月一日、福島県生まれ。将棋史研究家。昭和八年、読売新聞福島支社へ入社。北海道・東北総局長などを歴任。定年退職後、日本将棋連盟嘱託として将棋史研究に打ち込む。「将棋世界」に同五五年六月号から五七年五月号まで「近代将棋史年表」を執筆。豪華本「写真でつづる将棋昭和史」の巻末には、一八ページに及ぶ将棋史年表を作成した。そのほか、

「週刊将棋」の「歴史スポット」などに健筆を振るった。平成三年二月二五日逝去。

東 公平（一九三三）

昭和八年七月二三日、兵庫県神戸市生まれ。木見金治郎九段に師事、上京して梶一郎九段門下。奨励会は初段まで昇り退会。日本将棋連盟職員。筆名「紅」で朝日新聞観戦記者になり、のち同社学芸部嘱託。将棋ペンクラブの元副会長。著書に『阪田三吉血戦譜 全三巻』『升田幸三物語』『升田幸三熱戦集 上下』『名人戦名局集 思い出の観戦記』『名棋士名局集 将棋あれこれ』『近代将棋のあけぼの』『升田式石田流の時代』『名人は幻を見た』『ヒガシコウヘイのチェス入門』ほか。

坂本 一裕（一九二六～一九八四）

大正一五年二月一七日、青森県下北郡（現・むつ市）生まれ。青森県立五所川原農林高等学校教諭。将棋の歴史、棋譜収集に興味を持ち、雑誌「将棋天国」の編集に携わる。「近代将棋」誌にも「阪田三吉力戦譜」などを連載。著書に『将棋名匠物語』がある。昭和五九年五月二八日逝去。

森山 勝彦

「神戸新聞」を徹底的に調べ上げ、その熱意は中村浩著『鬼神・阪田三吉』（講談社版）の巻末資料「阪田三吉」棋戦目録に結実した。

増川 宏一（一九三〇年）

昭和五年、長崎市生まれ。遊戯史研究家。遊戯史学会会長。平成二二年から日本将棋連盟の将棋歴史文化アドバイザー。同二六年、第二回大山康晴賞受賞。著書に『将棋』『将棋2』『遊芸師の誕生 碁打ち・将棋指しの中世史』『碁打ち・将棋指しの誕生』『将棋の起源』『碁打ち・将棋指しの江戸「大橋家文書」が明かす新事実』『将棋の駒はなぜ四〇枚か』『将棋の歴史』ほか多数。

主要参考文献

- 山本亨介『将棋文化史』昭和五五年
 東公平『阪田三吉血戦譜』(1)(2)(3) 昭和五三、五四、五五年
 山本武雄『改定新版 将棋百年』昭和五一年
 加藤治郎監修『写真でつづる将棋昭和史』昭和六二年
 加藤治郎監修『昭和の将棋史 不滅の名勝負一〇〇』昭和六三年
 『将棋世界』／「近代将棋」／「週刊将棋」 ほか

3

将棋と文学の交錯



復刻 菊池寛将棋関連文章

西井弥生子

〔凡例〕

・旧字は新字に適宜改めた。

・『菊池寛全集』全二四卷（高松市菊池寛記念館）および『菊池寛全集』補巻一～五卷（武蔵野書房）未収録文章を發表年代順に収めた。

・他に、八段土居市太郎、八段木村義雄、六段萩原淳、佐佐木茂索、十一谷義三郎、近藤経一、菊池寛「銷夏座談会 将棋」『文藝春秋』一九二八・八、一六九～一七九頁、「菊池寛の対局譜／昭和六年一月 於 文藝春秋倶楽部」（越智信義『将棋の博物誌』一九九五・一〇・三一、三二書房、二六二頁 ※萩原淳との対局譜）、「文豪、将棋を語る 菊池寛氏、木村名人、金子八段鼎談」『将棋世界』一九四〇・二二、三～一〇頁、「玄人と素人熱戦譜」『将棋世界』一九四一・六、三～一〇頁）があるが、対象外とした。

菊池寛氏談「金子氏の成績、全く驚異」〔『読売新聞』朝刊、一九二九・一〇・二九、二面〕

金子七段が棋界の逸材であり、その棋風名人の風格ありといふことは予て承知してゐたが、今回の如く八段を三人までも連続薙ぎ倒さうとは、八段同志の間においても前例のないことで、全く驚異の成績である。木村八段との対局はさぞ見物だらう、自分は是非見て書いてみたいと思ふ

菊池「昇段規定無しの手合」〔『将棋』『文藝春秋』

一九三四・一二、一三一頁〕

萩原七段が、僕の所へ来て、（今年は成績がい、から八段になれるかも知れん）と、欣んでゐたが十月になつて急に、（今年は規定が變つて二年制になつたから、どんなに成績がよくつてもなれん）と云つてしよげてゐた。（そんなら、今年の規定はいつ定まつたんだ？）と云つて訊いたら、（今年の初から、秋になつたら變へると云ふ話であつた）と云ふ。ぢやつまり去年の規定は、今年の初で効力を無くしてゐたわけである。それで見ると、将棋連盟の人達は、今年の初から十月の初まで、昇段規定なしに、将棋を指してゐたわけである。もし、九月まで去年の規定が効力あるものならば、萩原の成績は、その規定の適用を受けてもいゝものだからである。萩原の九月までの成績

が、十月三日制定の規約の適用を受けると云ふことになれば、日本の棋士達は九ヶ月間は、昇段規定なしに将棋をさしてゐたわけである。昇段規定の定まつてゐない勝負を、新聞紙などでも、よく載せたし、我々も力こぶを入れて見てゐたものである。打者が、ヒットを飛ばした後で、二塁打にしようか三塁打にしようかと云つて、グラウンド・ルールを定めてゐるやうなものだ。日本の棋士など云ふものはのんきなのだか、馬鹿なのだから分らない。(菊池)

菊池寛「序」(菅谷北斗星、大崎熊雄『将棋の指し方』一九三五・九・二四、博文館、一〇二頁)

棋戦評論家としての菅谷北斗星君の名は、あまりにも有名である。自分は、菅谷君とは年来の棋友であつて、その清新卓抜な文章には、文学上の新著に対すると同様な嗜慾をそそられずにはゐられない。

また、大崎八段は、棋界の一偉才であつて、その果敢剛毅の棋風は、自分の推服してやまぬところである。

本書は、この両者の協力によつて成れるもの、後者が、実践上から得た豊富な経験を提供すれば、前者は、将棋研究の成果たる該博な知識を披瀝して余すところがない。将棋入門書としては、最も著者にその人を得たといふべきである。

将棋研究の書は多い。また定跡解説書の類も少くない。しかし、初学者のための解説書であつて、本書の如く定跡の研究に主力を注いだものはまだない。しかもその解説に当つては、型破りの簡単な方式で、一読直ちに将棋の妙諦に入るやうに書かれてゐる。読者は絶対安心して本書に頼つていい。

その他、凡そ将棋について知りたいと思ふ知識は、悉く収めてこの一巻の中にある。敢て初学者といはず、凡そ棋力の上達を望む者にとつて、師友となり、参考となるところが少くないと思ふ。棋界のため、この良著が博く普及されんことを願つてやまない。

昭和十年九月

菊池寛

菊池寛「人生は将棋なり」(『キング大娯楽園』『キング』一九三六・四、二六八頁)

人生は一局の棋なり。

一番勝負なり。

指し直すこと能はず。

菊池寛「続々将棋哲学」(『将棋世界』一九三八・一、九〇―一二頁)

将棋と心理作用

将棋の勝敗は、各人の強弱に依ること勿論であるが、然しそればかりではない。非常に微妙な心理の影響がある。技倆が優れて居ながら負けた例は幾何でもある。

宝暦六年の頃である。仙台の人保原嘉茂左衛門と云ふ青年が、将棋の天才として、修業のために江戸へ出て来た。少年氣を負ふて、眼中名人上手なき概があつた。彼は修業のために、幕府の将棋所伊藤家に入門を願つた。初めての手合に彼の相手をしたのは、八段伊藤看寿であつた。鬼宗看の異名を取つた兄の九段宗看と、伯仲の腕があると云はれた名手である。保原は心中五段の実力があると確信して居た。然るに、愈々対局となると、看寿は、入門者に対する伊藤家の定法であると称して、飛角を引いた上に両香を落したのである、所謂四枚落である。心中五段の力ありと確信して居た保原は、心の裡で激怒した。せめて二枚落なれば兎も角、四枚落とは何事ぞと思つた。いで、その儀ならば粉微塵にして呉れると、血眼になつて立ち向つた。が、焦つたのは彼の不覚であつた。看寿八段の応戦は、絶妙を極めて居た。それに反して焦りに焦つた彼は、平生の自信も、何処へやら、ザリ／＼と攻め寄せられて、無残にも一敗地に塗れたのである。そのために、若き天才保原は慚愧噴悶の餘り、一生

盤面に向はなかつたとの事である。が、看寿は四枚落で相手を破つたものの、相手の實力を認め、後に三段の免状を送つたとの事である。

その他、将棋界古今無双の名手と云はるゝ、天野宗歩も、八段に出世すべき晴のお城将棋に、強敵大橋宗珉に敗れて居るのである。天野宗歩は、名人にも香を引いて対し得ただらうと云はれるほどで、十一段とも云ふべき神力を供へた名手であつたが、晴の場所につい気怯れがして、平生の技倆が出なかつたと云はれて居る。

将棋と慢心

又、慢心のために敗れた例もある。雁木流の元祖檜垣是安は、名人鬼宗看の右香落を破り、得意の餘り、凡そ天下に予に角落を勝つべき人はあらじと、豪語した。然るに超えて数日、同じ宗看の角落に向ひ、無残にも破れた、め、彼は憂憤の餘り、吐血して死んだと伝へられてゐる。

将棋と氣持

将棋は、可なり氣持の問題であるから、自分より上手だと怯ぢてかゝると、手も足も出ない。それに反して、度胸よき下手は上手を實力以上苦しめ得るのである。名人小野五平、黒田清

綱の屋敷へ伺候す。座に先客あり、清綱来客に曰く

「此の老人は将棋が強いから一局試みて如何」

と。来客も興を催し、五平翁とは知らず平手にて立ち向つた。

然るに来客の鋒先鋭く、五平翁は四五段の人に對せし如く、苦辛して漸く勝ちたるに、清綱伯笑ひて曰く

「おい榎本よく指したな。これは小野五平だよ」

と。蓋し五稜廓の勇将は、将棋の達人と知らずして、その胆力に依つて、散々苦しめたのであつた。實力は、初段の遙か下であつたとの事である。

菊池寛「新名人に就いて」(『将棋世界』一九三八・三、九頁)

今度木村君に名人が譲られたことは、これまでと違つて、一番強い人に譲られたので、全八段の人達に、新しい希望と発奮をもたらしたのである。

昔の幕府時代には、大橋とか伊藤とか云ふ将棋の宗家を継がなければ、絶対に名人にはなれなかつた。天才天野宗歩でさへどうにもしようがなかつたのだ。

明治になつてからも、名人が一人あると、どんな強い人が出て、その人が死ぬか、自発的に退位でもしなければ、名人にはなれなかつたのである。

然るに、関根名人が、単に弟子の木村君だからと云ふのでは

なく、名人戦を認めて、實力戦を展開した上で、真に力のある人に譲つた事は、将棋道のためまことに歎ばしい事である。

これからも将棋道は、情実を排し、名人戦を飽くまで公明正大なものにして、ますく斯道のために發達させたいものである。

菊池寛「将棋の追憶」(『将棋世界』一九三八・四、九一〇頁)

私が、将棋を研究し出したのは京都の大学生時代だつた。

私は、少年時代から将棋を指してゐた。が本當に研究し出したのは綾部に勝ちたいためだつた。

私の中学時代の友人で綾部健太郎と云ふ男がゐた。その男が偶然京都の法科に来てゐた。彼は、中学時代割合仲のいゝ私とは遊び友達であつたが、私も京都の文科にゐて、久し振りに綾部と逢つて将棋を指した。

ところが、私の方が頗る不利である。私は、定跡の本を買つて来ていろく調べた。それから出町橋の東詰の佐野春松と言ふ床屋の主人に教へて貰つた。そして間もなく綾部に勝つことが出来るやうになつた。

以来東京で二枚落で、綾部と指したが、二枚落では私の方が非常に楽であるところを見ると、恐らく四枚落位だらう。その時以來つまり、大駒四枚は進歩したのであらう。

私は、この床屋へは二年近く将棋を、指しに行つた。主人はでぶく／＼肥つた好人物であつた。お客の来ないスキを見ては、よく私とさしてくれた。二枚から一枚まで進んだ。恐らく初段近くの力がある人だらうと思ふ。

隣の車屋さんもなか／＼強かつた。米屋の若い衆にも、可なり強い男がゐた。私は、一枚落でさんざん負かされた。あまりに、くやしかつた敗局の盤面は今でも思ひ出す位である。

私は、大分前、と云つても十数年になるが、この床屋を久し振りに訪問し、主人の好きな酒を贈つた。その後一二度訪ねて行つた。私の小説の「将棋の師」や「歓待」は、その当時の書いたものなのである。

私は、将棋に熱中してゐた頃は、旅行すると必ず行先々の有段者を訪ねて行つては、さして貰つた。私は、大阪の木見八段や坂田名人も訪ねたことがある。

名古屋で盲人棋士の時田六段と指した時は、油断をしてゐたので最初の一歩は負けた。

相手を見くびつたり、油断をしたりすることは将棋では禁物である。

菊池寛「坂田氏の名人戦参加に就て」(『将棋世界』一九三八・七、九頁)

関西名人坂田三吉氏が名人戦に参加することになつたことは、既に発表されたから、読者諸君の中には知つてゐる人もあると思ふ。

坂田氏が、僕の勧誘に応じて名人戦に参加したことは、棋界近來の壮挙である。坂田氏を入れない名人戦は、何と云つても完璧とは云へないと思ふ。坂田氏は、関根名人とは同等の棋位を持つてゐたと云つてもよいので、他年関東の将棋界に対し一敵国であつたのだ。従つて過去に於て、たしかに名人を名乗つてもよい時代があつたのである。たゞ名人位に対する王道が開かれてゐなかつた、め、強引に名人を名乗つたため孤立になつたが、孤立のまゝで晩年を終らせることは坂田氏のためにも、日本将棋界のためにも遺憾であると思ふ。今度この人が従來の行きがかりを一擲して名人戦に参加することは、日本棋界のためにも、坂田氏のためにも、名人戦のためにも慶賀すべきことである。

六十九歳の老齡に拘らず頗る元気だが、何と云つても多年盤面から遠ざかつてゐたことは大きな不利である。最初の二、三局はそのため不振かも知れないが、やがて坂田氏本来の面目を発揮するだらうから、新聞将棋の焦点となることも遅くはないであらう。

菊池寛「僕と坂田三吉氏／晩年を飾る気魄の花」（『東京日日新聞』夕刊、一九三八・七・一九、八面）

坂田三吉氏が、突然僕を訪ねて来たのは今年二月の初めであつた。将棋を指したいから尽力してくれといふのであつた。いろいろな行きがかりで将棋が指せなくなつてゐる坂田氏が、将棋を指したいといふのは切実にして神聖なる希望だ。僕は、坂田氏のために、心から尽力しようと思つた。しかし僕の立場として、坂田氏に将棋を指させる場所は、名人戦よりないのである。が、過去において強引ではあるが、名人を名乗つた坂田氏が、今更名人戦に参加することは、相当の苦痛であつたに違ひない。しかし、僕はこれ以外に、坂田氏を生かし切る道はないと信じて坂田氏を説いた。坂田氏も、大死一番、遂に名人戦参加を決心した。たゞ、将棋を指したさの一心からだ。その一心あつてこそ、関西名人の名に背かないと思ふ。この一心は、坂田氏の晩年を飾る気魄の花だ。この一心があれば、名人戦に全敗しても、坂田三吉の名は棋史に輝くと思つた。たゞ、去年木村、花田に連敗してゐるために「坂田弱し」の下馬評が盛んな事だ。下馬評などは極端から極端に走るものだ。往年の坂田が、そんなに弱くなる筈はないのだ。たゞ、盤面に遠ざかつてゐたのと、負けじ魂から、つい奇手を弄し過ぎたための不覚なのだ。今度の対神田戦でも、勝つてゐた将棋を、あせつた、めに惜敗した。

今二、三局指して落着きが出来たら必ずや坂田本来の面目を発揮して、坂田弱しの下馬評を粉碎するだらうと思つてゐる。花田八段が棋士の年齢は問題でない。気魄の問題だといつてゐたが、坂田氏はその烈々たる闘志において、壮年棋士の何人にも劣るものではないと思つてゐる。彼はきつと木村名人打倒の野心をその六十九歳の小軀に、燃やしてゐるのではないかと思ふ。

「木村土居七番戦予想」（『文藝春秋』一九四〇・六、七九頁）

—葉書回答—

- 一、いづれに勝たせたいか
- 一、いづれが勝つと思ふか
- 一、右の理由あるひは寸感

○菊池寛

一、別にどちらに勝たせたいとも思はないが、次の名人戦が面白くなるといふ点では、土居氏に勝たせたい。

一、本命といふ意味で木村氏。

一、木村氏の方が研究してゐるのではないか。

究極へ来ると木村氏の「研究」と土居氏との「かん」との戦ひになると思ふのだが、結局木村の「研究」が土居の「かん」に勝つのではないか。

菊池寛「時代の相違 環境の差が土居の不運」(『東京日日新聞』夕刊、一九四〇・八・四、四面)

5の二

私のやうな素人から考へると、木村名人と土居八段のかうした棋力の差違は、その各自の天稟の棋才の相違だとは思へない。恐らく、性格と修業から来た差違であらう。木村名人は、その一生を通じて、如何なる一局をも、全力をもつて戦つて来た人である。奨励会の少年から聴いた話であるが、大駒落を指す場合なども、獅子の子虫を搏つ如く、全精神を傾倒し盤面においては、何らの容赦もなく辛辣を極め、敗勢の場合にも、最善の手段を尽して、負けてもケレンやゴマカシなどは絶対にやらないとのことである。一生を通じて、かうした対局態度に終始し、その類稀な叡智をもつて、将棋を研究した木村名人が、棋士として最高の最深の将棋理論を味得してゐることは、当然などであらう。

これに比べると、土居八段は、木村名人に比して、大先輩ではあるが、ずっと苦勞が少かつたのではないか。弱冠にして、豊富な棋才に恵まれた土居さんは、関根名人に発見されて、上京して見れば、蓑、川井、勝浦などの先輩は、大したこともなく、井上八段坂田八段などの強敵とは、指す機会に恵まれず、花田、大崎などはなほ未だ台頭せず、苦手も強敵もない土居八

段は、その才分を適度に發揮すれば、面白可笑しく連勝し得たのではあるまいか、土井八段の青年時代は、苦練修行といふ点では、怖しく恵まれてゐないのではあるまいか。土居八段に比べれば、木村名人は、あまりに多くの強い同輩と先輩とに恵まれてゐたのである。一局一局の勝利が、努力奮闘の賜物であつたのである。

菊池寛「土居の闘志。打倒木村。不可能でない」(『東京日日新聞』夕刊、一九四〇・八・六、四面)

5の三

一生を通じて、血みどろの血戦に終始して来た木村名人と、その境遇と、その楽天的な性格とで、悠々として将棋道を進んで来た土居八段とは、その棋才的天分は同一であつたとしても、その苦練修業から獲得したものに、何らかの差違が生じてゐるのではあるまいか。木村名人が、名人戦の評に(土居さんが、一局毎に強くなるのには弱つた)と、いつてゐる。五十四歳の老棋士が今更強くなるわけもないと思はれるが、今度初めて土居八段が丹心を籠めた将棋を指したといふ意味にとつていゝのではあるまいか。そして、そのやうな対局精神で、今五六局も戦へば、打倒木村が必ずしも不可能ではないといふ確信を、土居八段は掴んだのではあるまいか。土居八段の「もう一度挑戦

者になりたい」といふ感想には、しみぐと自信と希望とが感ぜられた。

八段戦の優勝者である土居八段には、是非とも准名人を贈つたらどうか。また名人戦の始まる前に、もし木村名人が敗退した場合の処置をも考へて置くべきであつたのだ。名人をすぐ八段に降下するなどといふことは、人情的にも出来ないし、実際問題としても不都合である。名人が敗退した場合は、やはり准名人といふ称号を贈つて、特別扱ひをすべきである。准名人に対しては、八段戦参加の場合にも、ある特点を認むべきか、認むべきでないか、これはちよつと難かしい問題である。

菊池寛「僕の将棋生活」(『将棋世界』一九四一・三、二―三頁)

僕が、最初将棋の趣味を養はれたのは、「萬朝報」のためであらう。僕は、中学生時代から「萬朝報」の愛読者であつたが、「萬朝報」は、新聞として一番早く指将棋を掲載した新聞で、明治四十年前後から載つてゐたと思ふ。

その頃、土居八段が、二段か三段かではなかつたかと思ふ。金さんもすぐ現はれたやうに思ふ。平手戦は、樽囲ひが全盛であつた。

僕が初て専門棋士の手合を見たのは、大正七年頃で、土居対坂田の一戦であつた。そのとき、坂田氏が関根さんを目当てに

挑戦して来たのを、関根さんが、先づ弟子の土居さんを、急遽八段に昇段させて、対局させた時で、その対局は相当センセイションを起したものだつた。場所は、たしか日本倶楽部で、僕は当時、時事新報の記者で、将棋好きと云ふので、社命で見物を命ぜられたのだが、柳澤泊や大橋新太郎なども見に来てゐた。土居さんが敵の陣中に角を打ち込んで勝つたのだが、その角打は、たゞ成り返ることが出来る丈で、素人眼には、どうかと思はれるやうな角打だつた。

その頃、日比谷の交叉点近くに居た小野名人を、やはり新聞記者として訪ねて行つた事がある。現在の味のデパートの所に在つたゴミくして路次裏に居られたやうに思ふ。

その頃、死んだ大崎八段が、将棋を時事新報に新しく掲載をする交渉のために、時事新報へ来たことを覚えてゐる。たしか、佐藤と云ふ人と一しよであつた。この佐藤と云ふ人は、国民の将棋欄を担当してゐた人で、将棋を新聞紙に持ち込むことに、相当功績のあつた人であるらしい。

その頃、僕は湯島天神下にあつた館花浪路と云ふ老人が開いてゐた将棋会所へ、毎夜のやうに通つてゐたが、其処で大阪から上京したばかり、少年棋士に会つた。それが、現在の萩原八段で、たしか大正十年頃である。それ以来、萩原君は、僕のものに来てゐるわけである。その頃、土居さんの数寄屋橋の家へも、

二三度行つたことを記憶してゐる。そこで、花田さんと飛香落をさして貰つたことがある。

僕が、初段を貰つたのは、たしか大正十二年であるが、その頃現在の木村名人が、僕の雜司ヶ谷の家に稽古に来てゐた。それは、萩原君が震災後、大阪へ歸つてしまつた為である。木村名人は半年ばかり来てゐたやうに思ふ。平手で、稽古をして貰つてゐたが、一番も勝てなかつたが、その中一番丈、危く勝ちさうになつた事を記憶してゐる。

その頃、渡辺七段も、僕の家へ一、二度来たやうに思ふ。たしか二段だつたと思ふ。金さんも、一度来たことがあるやうに思ふ。その頃、金子氏が、神楽坂の近くに稽古所を開いてゐたが、やはり僕の家へ一二度来たやうに思ふ。

その頃の方が、僕は今よりも、盛んに将棋生活をやつてゐたわけで、大阪へ行つたときなど、わざわざ木見氏を訪問して、指して貰つたり、また御苦労千万にも、吹田まで行つて坂田氏を訪ねたことさへある。その時、坂田氏は不在であつた、一昨年だつたが、坂田氏は将棋界に復活せんとして、僕を訪ねて来たが、そのときが坂田氏とは初対面であつた。

僕が、将棋に熱心であつたのは、昭和二、三年まで、その後は何となく、将棋に遠ざかり、一時は萩原君がやつて来る場合は、此方の方でおつき合をするやうな風になつてゐた。従つ

て、将棋界との接触も少くなつたから、新八段などは、顔も知らない人もある位だ。しかし、最近では、萩原君の外、梶君が来るし、新進の松田四段、高柳二段なども時々来るので、将棋を指す機会が多くなつた。

無署名「菊池寛氏の投書」(『将棋世界』一九四一・一二、五一頁)

先月号の読者の棋譜の中、第三局の清水宮本両氏の棋力を、十級位と鑑定してありますが、十級とすれば大成会の初段の人と二枚落ですが、そんなに大成会の初段は、強いのでせうか。僕は、あの両氏は二枚では、絶対に初段には負けないと思ひます。僕が間違つて居れば、實際に対局を催して、僕の妄を啓いて貰ひたいと思ひます。

菊池寛「大波瀾を望む」(第三期名人位挑戦試合／木村、神田戦の予想)『将棋世界』一九四二・七、八〇九頁)

神田八段が、今回の名人位挑戦者となつたことは、全国の将棋ファンの普く喝采するところだと思ふ。ぜひ、華々しき熱戦を演出して、最近の新聞紙の将棋冷遇の情勢を一掃して貰ひたいものである。

僕なんかの素人には、この最も期待された名人戦の予想などする資格はないが、将棋はとにかく、気魄と肚と技術の争ひで

ある。殊に、木村名人に向つて行くのには、（木村怖るゝに足らず）の気魄が、一番必要である東京の八段連中は、悉く木村恐怖病にかゝつてゐる。木村名人に対しては悉く音を上げてゐるやうな感じである。そこへ行くと、（木村怖るゝに足らず）と、豪語するばかりで、肚の中でもさう思つてゐるのは、神田八段だけだらう。

殊に、神田八段は、茲一番と云ふ勝負には強いやうである。昭和十年の対東京高段者戦にも、十勝四敗の好成績を上げ、しかも相手方の主力たる木村、土居、花田、金子などを薙ぎ倒してゐる。強敵に対した方が却つて力が出るやうな性格らしい。

名人とのこれまでの対局では、結局負け越しとの事であるが、しかし、八段中、最も好成績を上げてゐる。

最近八段連中に連勝した松田六段なども神田氏にかゝつては、一寸勝手が違つたやうである。

殊に、最近愛息を国家のために、さ、げた丈に、心胸的にも、一段の悟道には入つてゐる筈で、それが今度の名人戦にも、必ず何等かの形であらはれた。愛息の戦死の悲しみを、じつとこらへた心境は、棋道に対する大精進となつて、現はれて来るのではないだらうか。

しかし、何しろ相手の名人は、古今未曾有の棋士である。天野宗歩などよりも、研究精進の点では、はるかに勝つてゐるの

ではないか。盤面的叡智と超盤面的叡智とが渾然として調和した人である。気魄も肚も十二分に持ち合はせた人である。将棋戦術の上では、恐らく何人の追隨をも許さないであらう。

たゞ、攻めるものと守るものとは、攻める方が有利である。神田八段は、玉砕を期することが出来るが、名人はさうではない。ぜひとも勝たねばならぬ。受けて立つ横綱のなやみが、多少ともあるのではないか。

かうした大勝負に、神経や感情の影響を受けることは禁物だが、その点では名人も神田氏も充分信頼出来る人達である。恐らく、最も純理的な猛闘がつゞけられるのではないか。

専門の棋士達は、やはり名人有利を説く人が多い。しかし、神田八段が、一世一代の勝負に、火の玉となつて、ぶつつかつて行く所に、多大の興味がある。もし、最初の一局を名人が失つた場合は、七局全体の勝負は天下の将棋ファンを熱狂させるに足るだらう。

私は、新聞紙に於ける将棋の位置が、危機に瀕する現在、神田八段の健闘を望んでやまない。

と、云つて私は、神田八段びるきでもなければ、名人びるきでもない。私は、昭和の将棋道のために、一勝一敗虚々実々の大波乱を望んで止まないのである。

もし、神田八段が、手もなく敗退するやうなら、木村名人の

天下は、今後、三期四期は微動もしないのではないだろうか。恐らく、神田八段の挑戦は、木村名人の王座を、ゆり動かす唯一のチャンスであらう。

菊池寛「序」(加藤治郎『将棋は歩から』一九四九・三・一〇、唯人社)

加藤治郎氏は、棋士中の異彩である。加藤氏の棋風の裏には、教養と学問がある。

将棋学と云ふものが、存在するかどうかは疑問だが、将棋を科学的哲学的に解釈する点に於て、加藤氏は棋士中第一人者であるか知れない。

私は、加藤氏から数番将棋を教はつたが、その説明には、他の棋士からは聞かれないやうな創意と新鮮味があつた。

今度、加藤氏は歩を中心としての棋書を出版することになった。

歩についての研究は、加藤氏が十数年に亘つて、心血を注いだものである。歩は、将棋に於ける主食的位置にある。飛角は、有力であるが双方わづかに一枚である。その他の駒も双方わづかに二枚である。歩は、九枚である。

いかに、九枚の歩が棋戦の大勢を制するかは、何人も肯定する所である。一步の有無、損失は勝負を決するのである。歩の

重要性を知り、歩の使用法を知ることがは、将棋を知り、将棋の秘訣に達する王道であると云ふてもいいであらう。

敗戦後、凡ての物は栄枯盛衰が烈しい。将棋丈は、敗戦の惨苦にもめげず、再び隆盛に向はうとしてゐる。

この時に、この好著を得たのは、欣快の至りである。

昭和二十三年二月八日

菊池寛

菊池寛「序」(倉島竹二郎『将棋太平記』一九四九・五・一、日東出版社、一〇二頁)

倉島君は将棋の観戦記者として有名であるが、本来は三田出身の文学者である。小説の書ける人である。将棋の方は副業に過ぎないのである。倉島君が今度、本来の面目を発揮して「将棋太平記」を書いたことは、甚だ会心の事である。

天保、弘化、嘉永年間に於ける将棋界は、現代に劣らぬ位、華やかなものであつた。大橋、伊藤家元派の勢力が漸く衰へ、天野宗歩が野に在つて、天下に雄視してゐた。上野房次郎、のちの名人伊藤宗印が、家元派の勢力挽回を期して、ひそかに一剣を磨いてゐる。その上野房次郎を斃すべく、町人棋士市川太郎松が苦心惨憺してゐた。倉島君は、さうした事件を扱つて、いはゆる勝負の世界を描くことに成功してゐる。

剣を以てする勝負の世界は、すでに時代おくれだが、勝負事そのものは我々にとつて永久に一つのスリルである。聞くところによると、この小説が「夕刊みやこ」に連載中、非常な好評を博したさうであるが、やゝ動きに乏しい将棋の世界を描いて、最後まで読者を引張つて行つた倉島君の手腕は推奨するに値するであらう。自分は近來の力作だと思つてゐる。

〔駒澤大学非常勤講師〕

坂口安吾は なぜ木村義雄を書いたのか

本多俊介¹

一、将棋は安吾研究の題材たりうるか

——木村名人が敗ける話、あれを私は読んだんだよ。(略)坂口安吾といふ人がよく現はれてると思つて、面白かつた。あゝいふことに対する一つの熾烈な興味があるんだな。つまりアツブ・ツウ・デイトのことさ。(略) あゝいふものを活躍させる才能が君にはあるんだ。(略)「白痴」といふのは……。

——あれはいゝものぢやないよ、あんなものは……。『白痴』なんかよか、さつきの将棋の観戦記²みたいなもののはうが、かへつてゝいゝんぢやないかと思つてるよ。

坂口安吾が〈公式主義者〉小林秀雄を真つ向から批判した「教

祖の文学」(「新潮」一九四七年(昭和二年)六月)。その二人の対談「伝統と反逆」(「季刊作品」第二号(四八年夏号)の二)はまだ。小林は〈木村名人が敗ける話〉、安吾は自らの〈将棋の観戦記みたいなもの〉を共に褒めた。その場の戯れ言と斬り捨てていいものだろうか。

安吾が観戦記を書いた対局は次の通りだ。実質的には将棋観戦記しか書いていない。

(1) 第六期名人戦第七局 ●木村義雄名人対○塚田正夫八段
(一九四七年(昭和二年)六月六日・東中野「モナミ」)

※四勝二敗一持将棋で塚田が奪取。

(2) 木村升田三番将棋第一局 ○木村前名人対●升田幸三八段
(四七年二月九日・名古屋市「葵荘」)

※第二局は升田、第三局は木村勝ち。

(3) 本因坊・呉清源十番碁第一局 ●岩本薫和本因坊対○呉清源八段(四八年(昭和三年)七月七・九日・小石川「もみぢ」)

※呉の七勝二敗一持碁。

(4) 第八期名人戦第五局 ●塚田名人対○木村前名人(四九年(昭和二十四年)五月二四日・皇居内「済寧館」)

※唯一の名人戦五番勝負。三勝二敗で木村が奪取。

安吾は(1)の観戦記として「名人戦を観て」³ (「将棋世界」四七年七月)と本文冒頭で小林と安吾が触れた「散る日本」(「群

像」四七年八月）を書いた。（2）に関しては（木村・升田戦の日の未明）と末尾に記した「坂口流の将棋観」⁴（『タ刊新東海』四七年二月一〇日付（発行は前日））と対局の「観戦記」（『タ刊新東海』四八年一月三―二二日付、「タ刊神港」同一―二五日付、「九州タイムズ」同一―二二日付、「タ刊ニイガタ」同一―二四日付、「タ刊ひろしま」同六―二五日付・各二〇回＝休載日あり）が掲載⁵。（3）には「本因坊・呉清源十番碁観戦記」（『読売新聞』タ刊・四八年七月八―九日）で対局前夜および一日目を描写。「呉清源」（『文学界』四八年一〇月）で人物論を執筆。（4）には観戦記「勝負師」（『別冊文藝春秋』四九年〈昭和二十四年〉八月）を執筆した。

四局中三局までが将棋で、囲碁の一局はなぜか序盤までを描いた観戦記風エッセイだ。終局時に立会人が「白の一目ないし二目勝ち」と異例の裁定を下し、のちにルールが整備されるきっかけとなった歴史的対局だが結末は描かれていない。

沢木耕太郎は「散る日本」を一貫して評価している。高田宏らとの座談会「ノンフィクションの可能性」（『新潮』八七年十二月で〈二十二歳以降に読んで何が印象に残ったかという〉と略）最初に読んで驚いたのは坂口安吾の「散る日本」です。（略）塚田と木村に対する思いが、日本の状況論というか、戦後の精神の有様にクロスしてくる。（略）文章が相当上等だと感じました。（略）自分が一人称で書いていく時の一つの祖型となり

ました」と語っている。沢木は（囲碁については川端康成の「名人」、将棋についてなら坂口安吾の「散る日本」という傑作ドキュメントを、ぼくらは持っている）（『路上の視野』より・八二年・文藝春秋）とも書き、彼の編集による「右か、左か―心に残る物語 日本文学秀作選」（二〇一〇年・文春文庫）には「散る日本」を収録した。

米長邦雄永世棋聖は「将棋年鑑 平成一一年度版」で「最近読んで感銘を受けた本」として「太宰治と坂口安吾の世界―逆のエチカ」（斎藤慎爾編集・九八年・司書房）を挙げた。九九年の東急将棋まつりの席上でこれに関して質問した筆者に「済寧館で木村が名人に返り咲いた後、安吾は木村、塚田、升田、大山（康晴）の誰と帰ったでしょう」と「勝負師」のラストについて逆質問した。「大山先生」との答えに「だから坂口安吾は本物なんです」と喝破した。米長は遺作「将棋の天才たち」（講談社・一三年）で「勝負師」での大山を取り上げた。

坂口安吾は太宰治、織田作之助らと共に「無頼派」と呼ばれて終戦直後に華々しく活躍した。「墮落論」「白痴」「風博士」「桜の森の満開の下」「不連続殺人事件」「信長」etc.とジャンルを超越して書きまくった安吾には今なお多くの愛読者が存在し、その作品と人物は研究の対象となり続けている。

ところが「散る日本」「勝負師」や「呉清源」といった将棋・

囲碁関連作品は二〇世紀の末頃までは論じられた形跡がない。関心ない、わからない、あるいは研究するに値しないとされていた節がある。講談社から出た「坂口安吾選集」(全二巻・八二・八三年)⁶には将棋・囲碁関連作品がない。「済寧館の決戦」の終局直後に両対局者を升田、大山、そして安吾が囲んだ写真⁷(毎日新聞「四九年五月二六日」)は、多くの棋書に収録されているが、安吾関連書には見当たらない。〇〇年の「安吾忌」(二月一七日)で関係者や評論家に訊くと誰も知らなかった。小林らの発言を考えると、将棋・囲碁関連作品の無視により安吾の全体像には欠落もしくはひずみが生じているという思いが浮かんできた。

そんな中で出た筑摩書房の坂口安吾全集(第一―一七巻・九八―〇〇年、別巻Ⅱ一二年、以下、筑摩版全集)は、将棋・囲碁関連の生前未発表作品や資料も多数掲載した。

筆者は前述の安吾忌後に編集部を訪問し、「散る日本」と「観戦記」取材メモが書かれた二冊の手帖を見る機会を得た。これをきっかけに「愛棋家 坂口安吾」と題した論考を将棋ペンクラブ会報「将棋ペン倶楽部」に発表した¹⁰。今回は一七年三月の「将棋と文学研究会」研究集会での「愛棋家 坂口安吾―その生涯・作品と将棋、『木村三部作』を中心に―」も含めて整理して、新たな視点から安吾と将棋の関わりを考える。

二. 安吾は本当に将棋を知らなかったのか

安吾は囲碁愛好家として知られ、「囲碁修業」(「都新聞」三八六年六月二―二三日)などの随筆で自らの熱中ぶりを語っている。生前、二段免状(昭和二五年一月八日付)を取得し、没後には三段免状(昭和三〇年五月三日付)を追贈されている。

呉清源との五子局の棋譜と観戦記(月刊読売)(四八年五月)¹¹も残っている。戦前に呉が川端康成ら文壇強豪を五子で負かしたのを覚えていた安吾は「六ツ置こう」と申し出た。呉は下手が当時から上達しているからと五子を主張し、押し切った。大きなハンデは格好悪く、負ければみっともない。「教祖の文学」には、安吾が小林と碁を打った際の(彼は五目置いて)ほんととはもつと置く必要があるのだが、五ツ以上は恰好が悪いやと云つて置かない」という逸話が記された。アマは概して実力不相応の手合いを選びがちだ。見栄を張らずに六子を申し出た安吾に真の囲碁ファンの姿を見る。(巨豪呉氏をしばしば長考させるなど熱戦四時間)で安吾は白の大石を召し捕ったものの盤面およそ十目の差で敗れた。呉を長考させるだけのものが安吾にはあった。

一方で自らの将棋は(私も将棋は知らない)(「散る日本」や「私は将棋の駒の動き方を知ってるだけだ。(略)私はそのドン

ジリ、六十二級）（『巷談師』〈別冊文藝春秋〉五〇年八月）など、ひたすら無知ぶりを強調した。作品に棋譜の誤記が散見されるため、過去には筆者も〈将棋は知らない〉に領いてしまったのだが、果たしてそうだろうか。

塚田八段が六分考へて三四飛、横歩を払つた。（略）三十八手の勝負とどこで違つた手を指すか、どつちが指すか（略）五六歩突き。それにきまつてゐるからその先を先の先まで読んでゐる由（略）「桂があるから、二四へ打つ。そんな手もあるぢやろ。いろいろと、むづかしいところぢや」。土居八段は満悦の様子である

（『散る日本・傍線部筆者』）

安吾は的確に将棋用語を使っている。この点を将棋と文学研究会に角川文庫の『散る日本』（七三年）を持参した田丸昇九段¹²に伺つたところ首肯された。

安吾自身は「将棋を指した」と書かなかつたが、対局の証言はいくつか残っている。

木山捷平の「酔いざめ日記」（七五年・講談社）には、昭和十五年（四〇年）一月三日の欄に〈坪田、小田と小生の三人で中村地平訪問。坂口安吾も来ていた。将棋をさしたり、十二

時近く辞去。（略）坂口と一勝一敗。（略）真杉と一勝であつた〉¹³とある。

若園清太郎の「わが坂口安吾」（七六年・昭和出版）には、三五年、長野県奈良原鉱泉で将棋が強い若園と囲碁が強い安吾とで互いにハンデを与えて対局した話が出てくる。安吾は若園に二枚落ちでも、若園は六子置いても安吾に歯が立たなかつたという。

文壇チーム対抗戦の証言もある。木山と共に阿佐ヶ谷将棋会の常連だった中村地平は「将棋随筆」（初出紙誌未詳三八年二月・『中村地平全集』第三卷一七一年）で、竹村書房（安吾、菱山修三他）対阿佐ヶ谷チームの対抗戦が四谷の某料亭で行われたと書く。浅見淵の「昭和文壇側面史」（六八年・講談社）の〈竹村書房派と早稲田派〉には〈竹村書房を背景に（略）坂口安吾が総大将となつて早稲田組に挑戦を申し込んで来て、四谷見付の近くの長野屋という女気のない居酒屋風の飲み屋の二階で対戦した。（略）早稲田組の勝利で終わったが、そのあと、そこで竹村書房の奢りで大酒宴となつた〉とある。参加者記載は竹村組の安吾と若園のみだ。村上護の「文壇資料 阿佐ヶ谷界限」（七七年・講談社）は、若園の証言として本郷チーム（安吾、若園、菱山、鵜殿新一、真杉）と阿佐ヶ谷チーム（安成二郎、井伏鱒二、上林暁、木山、太宰治）が四谷の某料亭で対戦したと記した。安吾と太宰が指していたら面白いのだが、両者の年譜に記載がな

く、後年の証言で信憑性に欠けるのが残念。チーム名や参加者が微妙に異なるため、同じ対抗戦の記憶違いか別の対抗戦かは断定できないが、いずれも安吾側が惨敗となっている。

山本亨介（筆名・天狗太郎）の「将棋とっておきの話」（八七年・筑摩書房）には五二年頃に友人と共に、安吾が戦前に住んだ取手市に彼を訪ねた話がある。詩人の湯口三郎と安吾の将棋は湯口の圧勝で対局は一局のみ、あとは酒盛りになったという。

棋力はさておき、安吾は将棋記事を熟読した形跡がある。元祖「読む将」である。

昭和初期には新聞雑誌を通して囲碁将棋熱が文士にも波及していく。安吾も例外ではない。「生命拾ひをした話」（『囲碁春秋』四〇年二月）は〈朝日新聞の八段位獲得戦木谷七段対久保松六段の対局で呉七段の解説〉への疑問に寝食を忘れて没頭して生命の危険を感じたが、強豪知人を探し回って〈呉七段の読違ひといふ結論に達し、僕は一命を拾った〉という話。そこには〈娯楽機関の何一つない田舎では、新聞を読むのが最大の娯楽である〉とあらゆる記事を熟読する自身の姿も描いた。「横暴な新聞販売店」（生前未発表・四七年頃執筆と推定）には〈朝日、毎日、読売、東京、時事の五紙を購読〉とある。

安吾は「戦後文章論」（『新潮』五一年九月）で戦後の文章での新風として将棋の観戦記を挙げ、特に三象子（加藤治郎八段＝

五一年の第十期名人戦〈木村対升田〉で朝日新聞に全六局の観戦記を執筆を〈文章が特に生きていて、いちじるしく活写の筆力が鋭い〉と絶賛した。さらに当時伊東市在住の安吾は、静岡新聞の高柳（敏夫）八段を〈淡々としながら、たくまぬような、しかし巧みなユーモアもあって、急所はピツタリ押えているし、田舎の新聞にはモツタイない逸材です〉と賞賛した¹⁴のは将棋を熟読した証拠だ。

雑誌「文藝春秋」は創設者の菊池寛が大の将棋好きとあって将棋欄が充実していた。新進作家の安吾は戦前、同誌に「海の霧」（三二年九月）、「蟬」（三二年二月）¹⁵など四作を載せている。寄稿者である彼は定期的に目を通していた可能性が高い。

安吾は将棋を読んでいたからこそ将棋が書けた。安吾が逝去の二ヶ月前に発表した小説「桂馬の幻想」（『小説新潮』五四年一二月号）は将棋の天才木戸六段が主人公。名人候補津雲八段との一戦で木戸は〈金をひいて守りをかためるか、歩をついて様子を見ればおだやかであるが、桂をはねだすと乱戦模様になる〉と考えた。そして候補手のうち、「四五桂」を指した——特異な動きをする〈桂馬〉と〈幻想〉とを組み合わせた題名は秀逸だ。〈金をひく〉は済寧館の決戦の木村の守りの勝負手「四八金」を想起させる。桂を〈はねだす〉というのも適切だ。そして〈四五桂〉に注目したい。当初配置の二九（もしくは二二）

から三七（もしくは三三）經由で四五と正しい筋に桂馬を跳ねている。

「散る日本」では〈将棋を知らない〉に続いて〈けれども、この十年間、名人戦ばかりでなく、その他の勝負、これといふ手合に殆ど負けてゐないのだから、調子だけでかうは行く筈のものではない。〉（略）木村名人はたしかに強いに相違ない（略）木村名人の一代前は関根名人と云つて、この人は将棋は弱かつたが、将棋がキレイで、さすがに名人の風格、などと称せられた」と記している。〈将棋を知らない〉とは書きながらも（両名人の強弱に多少の誇張はあるが）将棋界のあらましは把握していた。実は同様のレトリックを安吾は唯一の肉声録音でも残している。「済寧館の決戦」直後の四九年六月六日にNHK第一放送の「朝の訪問」で「碁や将棋、特に将棋が非常にお好きなんです」との問いには「いえ、好きじゃないですよ。将棋は僕は下手なんです。碁の方がね、まあいくらかと言つたつて大してうまくないけどね」と言いながら直後に「（将棋は）勝負の決する最後の瞬間まで、もう錨ぜり合いみないなもんです。その激しさというのは、僕なんかみたいな野次馬には観ていて、こんなに面白いものはないんですね」。（好きじゃない）けど（こんなに面白いものはない）とは安吾ならではの表現だ。

五四年二月三〇日、故郷に帰った安吾は「新潟日報新館落成

記念芸芸講演会」で畏友尾崎士郎と共に演台に上った。二月一日付の同紙朝刊は〈機知と熱の文学論／尾崎、坂口両氏講演会〉との見出しで〈まず坂口氏が演台に立ち、大山氏に名人位を奪われた木村前名人の例を引き／形ち、姿、感情に重きを置いた木村の将棋は真理に重点をおく大山氏に敗れた。真理とはだれにでも判り易いものでなければならず、文学の底を貫くものは真理でなければならぬ。／と坂口文学の旗印を示せば（略）と報じた。翌年二月に亡くなる直前、生涯最後の講演で二年前（五二年）の名人戦を例にして文学を語ったことは、将棋に対する関心を最期まで持ち続けていた何よりの証拠だ。

三、安吾はなぜ木村義雄を書いたのか

安吾は将棋観戦記を書いた明確な理由を残している。

〈この創作集は私の将棋名人戦ならびにその他、自ら意志してそれを目撃したいくつかの棋士たちの心血をそ、ぐ対局から、特に重大なもの、みを選んで一本としたものである。／主として、将棋名人戦が主題になつてゐるが、私自身は、むしろ囲碁にいきさ、かのタシナミがあり、将棋の方は縁台将棋のビリに列るのがやうやくである。／私は然し、内に全力を尽し、血肉を賭けて闘われる将棋名人戦を好む〉から始まる、生前未発

表となった「後記」(筑摩版全集第一五卷)である。

また「碁にも名人戦つくれ」(『毎日新聞大阪版』四九年六月二九日付)では「将棋の人氣はいうまでもなく実力第一人者を争う名人戦の人氣である。(略)碁の本因坊戦ときてはたかが一家名をつぐだけのことにすぎない。(略)碁も名人戦をやらねばならぬ。実力第一人者を争うギリギリの勝負でなければ決して天下の人氣をわかすことはできない」と囲碁界に手厳しい。安吾は「私は碁の大手合は時々見た」と「散る日本」に記したが、観戦記を残していない。観戦記は書く必然性があつたから書いたのだ。

安吾の将棋観戦記はすべて木村義雄が対局者だ。「散る日本」「勝負師」は名人戦が舞台なので当然だが、共に頼まれ仕事ではなく、自主的に観戦に出かけて文芸誌に執筆している。木村に惹かれたからこそ名人戦に価値を見いだしたとも言えるだろう。

安吾は「文藝春秋」三九年三月号に木村が書いた「双葉山の敗因考察」(目次では「将棋と双葉山の敗因」)を間違いなく読んだ。同年初場所での双葉山の七十連勝成らずの敗因を分析した一文だ。「散る日本」に「相撲のケンリ」との一節が出てくるが、木村はその場所も初日から升席に通い、三日目、六十九連勝目の駒ノ里戦も観ている。連勝が途絶えた四日目の安藝ノ海戦は所用のため観られなかったのだが、それまでの観戦から双葉山の敗因を詳細に考察している。いわく「横綱の面目の為に、

成るべく待ったをせず、多少不利でも受けて立つといふ觀念が、病後の彼れに意外の重荷を負はした」(「横綱の貫禄も大切ではあるが、それは決して呼吸が合はないでも、無理に立つことを要求するものではない」)「将棋は序盤に有利な陣を布いて、中盤の戦闘時期に入る準備をなすのが必要(略)序盤の岐れが互角でない」と、後がなかなか面倒(「立上りの綺麗といふことも程度の問題で、彼れの後援者や輩員が、無暗に立ちを急がせて、彼れの成績を汚してはならぬ」と双葉山の立ち合いについて疑義を呈している。双葉山の「後の先」の立ち合いは強さと美しさを兼ね備えていると賞賛されていた¹⁶。連勝は三六年初場所から始まった。一方で「第一期名人決定大棋戦」は三年から三七年の暮れにかけて行われ、木村が初の実力制名人に就いた。既に神格視されていた双葉山への批判は同時代の覇者である木村以外に許されることではない。木村は同誌の三八年一〇月号でも「将棋と戦略」で将棋の実際の読みを孫子の兵法などを例に挙げながら説いている。

感心した安吾はその後、たびたび木村について言及している。

木村名人の相撲観を読んだことがあるが、相撲を将棋の立場から判断してやつてゐた。流石に名人である。

「大井廣介といふ男」(『現代文学』四二年九月)

将棋の木村名人は不世出の名人と言はれ、生きながらにしてかういふ評価を持つことは凡そあらゆる芸界に於いて極めて稀なことであるが、全く彼は心身あげて盤上にのたくり廻るといふ毒々しいまでに驚くべき闘志をもつた男である。

「青春論」(「文学界」四二年一一・一二月)

木村名人が双葉山を評して、将棋では序盤に位負けすると最後まで押されて負けてしまふ。名人だなどと云つても序盤で立ちおかれてはそれまで(略)双葉の如く、敵の声で立上り、敵に立上りの優位を与へるのが横綱たるの貫禄だといふ考へ方はどうかと思ふ、といふことを述べてゐた。

「大阪の反逆」(「改造」四七年四月)

往年木村名人が覇氣横溢のころ双葉山を評して、将棋は序盤に負けると勝負に負ける。序盤に位を制することが名人横綱たる技術でもあるのだから、敵の声に立ち上るのは解せない、と言つた。この心構へを名人はすでに自ら見失ひ、自ら逆に双葉山の愚に化してゐた。

「散る日本」(「群像」四七年八月)

安吾は戦時中、大井が主幹の同人誌「現代文学」¹⁷に精力的に作品を発表した。同誌に発表された「日本文化私観」(四二年三月)は〈見たところのスマートだけでは、真に美なる物とはなり得ない。すべては、実質の問題だ。美しさのための美しさは素直でなく、結局、本当の物ではない(略)法隆寺も平等院も焼けてしまつて一向に困らぬ。必要ならば、法隆寺をとりこわして停車場をつくるがいい〉と〈実質の問題〉を語る。「散る日本」の最後の一文〈実質だけが全部なのだ〉に先駆けている。「大井廣介といふ男」で安吾は〈彼の評論にはバルザックの隣に安藝の海が現れ、野球もレビユーも忍術も知つてゐることがみんな出てくる。これは非常にいゝ所だと僕は思ふ(略)生活の全部が文学の中へ現れてくる〉多様性を褒め、本因坊秀哉が生活のすべてを碁に結びつけて考へている点を至言として、さらに木村を例に引く。〈相撲を将棋の立場から判断〉とは「双葉山の敗因考察」そのものだ。

「青春論」の「三 宮本武蔵」で安吾は、若き日の武蔵の死に物狂いの闘いを賞賛した。そして木村を若き日の武蔵に比類する者として共感をもつて描いている。

そして「大阪の反逆」。四七年の初めに急逝した織田作之助を悼んで書かれた評論だ。織田の「可能性の文学」(「改造」四六年二月)は坂田八段の端歩(九四歩)を題材にしている。〈坂

田の端の歩突きは、いかに阿呆な手であったにしろ、常に横紙破りの将棋をさして来た坂田の青春の手であった。(略) この手は将棋の定跡というオルソドックスに対する坂田の挑戦であった」と肯定的に捉えている。

「大阪の反逆」が〈将棋の升田七段が木村名人に三連勝以来、大阪の反逆といふやうなことが、時々新聞雑誌に現れはじめた〉と大阪期待の将棋指しから始まるのは、坂田から文学を論じた織田へのこの上ない手向けだ。一方で〈升田七段の攻撃速度は迅速意外で、従来の定跡が手おくれになつてしまふ(時事新報)〉との〈速度〉への言及は「坂田の端歩」否定の伏線として効果的である。安吾は〈最初の一手に端歩をついたといふ銜気の方が面白い。第一局に負けて、第二局で、又懲りもせず、端歩をついたといふ馬鹿な意地が面白い〉とまずは面白がるが、木村の〈名人だなどと云つても序盤で立ちおくれではそれまでで、(略) 双葉の如く、敵の声で立上り、敵に立上りの優位を与へるのが横綱たるの貫禄だといふ考へ方はどうかと思ふ〉を例に引き、〈第一手に端歩をつくなどといふのは馬鹿げたことだ〉と否定した。そして〈私は先に坂田八段の端歩のことを言つた。これは如何にも大阪的だ。然し、大阪の良さではなく、大阪の悪さだ。(略) なぜなら、木村名人の序盤に位負けしては勝負に負ける、序盤に位勝ちすること自体が力量の優位なのだから、

といふオルソドックスの前では当然敗北すべき素朴なハッターにすぎない〉と続けた。果たして安吾は〈織田は悲しい男であつた。彼はあまりにも、ふるさと、大阪を意識しすぎたのである。ありあまる才能を持ちながら、大阪に限定されてしまつた。彼は坂田八段の端歩を再現してゐる〉と木村の双葉山論と坂田の端歩との対比により織田を語つた。安吾が将棋を識つていたからこそ織田への挽歌である。

また、安吾は織田の「可能性の文学」を読んで、木村の言う序盤の立ち遅れが「坂田の端歩」を示唆していることに気づいたのではないか。先に挙げた「大井廣介といふ男」「青春論」には双葉山の名前はない。将棋の「序盤の不利」と「双葉山の立ち遅れ」を結びつけて「坂田の端歩」を論じたのは「大阪の反逆」が初めてだ。坂田が「南禅寺の決戦」で九四歩を指したのは「双葉山の敗因考察」の二年前。木村はあからさまに実名を記すのは控えたが、「序盤の不利」が「坂田の端歩」を示すと考えるのは不自然ではない。安吾が木村の双葉山論における将棋の「序盤の不利」＝「坂田の端歩」であることを認識したのは、織田の「可能性の文学」のおかげだ。

「散る日本」の終わり間際で安吾は一転して木村を痛烈に批判する。それまで安吾は木村を文学と将棋と道は違えども同じ志を持っていると思つていた。木村の敗北は「双葉山の敗因考



「察」で自身が指摘した〈双葉山の愚〉そのものだ。言っていることとやっていることが違う！思い入れが強かったからこそ裏切られたと感じ、怒りはすさまじかったのだ。木村を〈双葉山の愚に化してゐた〉と罵倒したのは愛情の裏返しだ。

二人は戦前の文人囲碁会（創立大会は三八年四月二一日）で恐らく面識があった。

四〇年一月一九日には「文人囲碁会将棋大成会対抗戦」が開催された。文人側からは安吾や川端康成ら、大成会側からは木

村名人、倉島竹二郎ら

が参加し、（午後十一

時坂口安吾對加藤治郎の一戦、坂口白番（四

目半盤面七目）の極差を以て敗れるに及んで

将棋大成會二點の勝越

しとなり凱歌は大成會にあがつた」（「囲碁春

秋」¹⁸四〇年二月号）。

安吾は戦後、随筆

「文人囲碁会」（「ユーモ

ア」四七年一月）で〈僕

が今迄他流試合をして、その図々しさに呆れたのは将棋さしのチームであった。（略）木村名人が初段で最も強く、あとは大概、三四級というところだが、彼らは碁と将棋は違っても盤面に向う商売なのだから、第一に場馴れており、勝負のコツは、先ず相手を呑んでかゝることだという勝負の大原則を心得ている（略）僕が碁に負けて口惜しいと思ったのは、この将棋の連中で、いつか復讐戦をやりたいと思っているのも、この連中だけだ」と回想した。自分の負けがチームの負けに直結して悔しくない訳がない。

のちに「散る日本」での対局開始直後に〈木村名人は私達に向つて、あなた方は洋服だし先が長いことだからどうぞお楽に、と言つたりする〉と気さくだったのは、過去に接点があったからだろう。「観戦記」では〈私たちも寝ようすると、木村前名人、私のところに遊びにきた。／そこで、私が釈迦に説法という奴だが、色々と心理的な見方から勝負ということの本質について、一席またアジルところがあった。（略）将棋は、勝負は、これ又常に創作である。（略）将棋というものを何も知らない私が、天下の前名人に三十分ほど将棋の講釈をしたのだから笑わせるが、これも酒のせいである〉と記した。「明日は天気になれ」（「西日本新聞」五三年一月二日〜四月二三日付）の「立ち直り試合」では名古屋での対局を回想して〈私がこの観戦記を引き受けたの

は、ひとつは木村になんとか罪ほろぼしをしたいような気持ちのせいがあつた。／私は木村が塚田に敗れて名人位を失った一局を観戦して、木村敗戦の有様をツブサに描写したことがある。(略) 木村が気持の上でダメになった原因の一部には、私の冷酷な文章が含まれているような気がして、なんとなく気が咎めておつたのである(略) なんとかして木村を升田に勝たせ、その勝利の姿を描写して罪ほろぼしをしてやりたい」と木村への親近感は一貫していた。

安吾は囲碁では呉清源を高く評価していた。「呉清源」(「文学界」四八年一〇月、のちに「呉清源論」に改題)で、木村、升田が度々自滅することに触れた上で(「それらの日本的な勝負の鬼どもに比べて、なんとまア呉清源は、完全なる鬼であり、そして、完全に人間ではないことよ」と感嘆している。ただし「完全なる鬼」に感心したが「人間」呉清源には評価を濁している。「呉清源」の結びは「呉清源がジコサマ¹⁹に入門せざるを得なかったのも、天才の悲劇的な宿命であつたらうと私は思う」。「勝負師」の冒頭でも川端康成らと共に呉を囲んだ席で安吾は「要領を得ない座談会²⁰で、面白をかくしくもなく、後味がわるかつた。告白狂じみた我々文士とちがつて、呉八段がつとめて傷口にふれたくない気持はわかるのであるが、もつと気楽に、言ひきれたら、彼の大成のために却つて良からう、と私には思はれた」

と呉の翳を指摘している。

木村は「済寧館の決戦」の自戦記(「名人木村義雄実戦集 巻七」末尾に「梅原龍三郎先生、志賀直哉先生、村松梢風先生、坂口安吾先生その他多くのファンの方々の暖い御援助を生涯忘れてはならないと胸に深く刻み込んでいる」と記した。坂口家には見返しに「昭和二十四年夏／著者 木村義雄／敬呈／坂口安吾先生」と墨跡鮮やかに記された「これを読めば必ず強くなる最新将棋必勝法」(四九年・世界社)が遺された。木村もまた安吾が好きだったのだろう。

四 「勝負師」をめぐる

「評伝坂口安吾 魂の事件簿」(〇二年・集英社)を著した七北数人は「勝負師」を(「一種の将棋観戦記だが、棋士の内面にも筆が及び、知らぬ間に人生論にまで進んでいくので、小説的な要素も多分にある。安吾の作家魂みたいなものがギュッと詰まった傑作で、安吾を知りたい人にはまずこれを薦めることにしている」(「火だるま安吾」(三三) 変わらぬ「勝負師」像「中日新聞」〇五年三月一四日付)と高く評価している。

二〇一九年は「済寧館の決戦」から七〇年。記念すべき年の前に一八年四月、中公文庫「勝負師 将棋・囲碁作品集」が出

た。「木村三部作」とも呼ばれるべき三作。木村義雄が名人位から転落した「散る日本」、再起を図った「観戦記」、名人位に返り咲いた「勝負師」が初めて一冊に収められた。巻末エッセイに沢木耕太郎が「散る日本」に触れた「私だけの教科書」〔象が空を〕に収録九三年・文藝春秋があるのは気が利いている。前述の「後記」が入っていない、作品の並びが時系列ではない、補注がないなどの残念な点はあるが、その意義は大きい。

実は「勝負師」には、あらゆる関連資料が残っている。

- (1) 取材メモが記された手帖（安吾遺品・新潟市所蔵）
- (2) 自筆原稿（安吾遺品・新潟市所蔵）
- (3) 初出誌「別冊 文藝春秋」〔第二号〕夏の小説集〔四九年八月〕
- (4) 作品集「勝負師」（五〇年一月三十一日発行・作品社 著者旧蔵・東洋大学附属図書館蔵）
- (5) 後記（生前未発表・筑摩版全集第一五巻）
- (6) 作品集についての詫び状（二通・安吾遺品・新潟市所蔵）
- (7) 談話「毎日新聞」四九年五月二六日付、「将棋新聞」第二九号（復刊第六号）六月一五日号）
- (8) 写真「済寧館の決戦」終局直後および開始時、控え室などで安吾の姿あり）
- (9) インタビュー録音（四九年六月六日・NHK第一放送「朝の訪問」・聞き手：坂口英一郎・アナウンサー：筑摩版全集第一七巻）

(1) の手帖は革装丁で手のひら大の鎌倉文庫の「文庫手帖」四九年版。見開きの手帖の無地欄を九〇度回転させて一四ページにわたって鉛筆で縦に殴り書きしている。坂口家が〇五年二月に新潟市に寄贈し、同市「安吾 風の館」（〇九年七月開館）で時折展示している。なお「散る日本」取材メモも「文庫手帖」四七年版に記されている。四四ページにわたって鉛筆書きされ、不鮮明さを補うため万年筆での上書きがある。こちらには（木村義雄 北多摩郡府中町分梅／／塚田正夫 杉並区大宮前／／加藤治郎 港区芝小山町／／倉島竹二郎 鎌倉市腰越町／／）の将棋関係者住所（筑摩版全集未収録）の記載あり。

(2) は安吾没後に出版社から遺族に返却され、手帖と同様に遺族が新潟市に寄贈した。達筆ではないが万年筆で「無頼派」らしからぬ（？）丁寧な丸文字風で読みやすい筆跡。他にいくつか発見。①最終段落（木村と塚田は自動車で帰った）の直前の（升田は木村の前にすすみでて、／「これで木村名人は歴史に残る人となった。名人位をとり返さな、歴史に残らん」／斜にかまえてガラガラと力一杯の大声。宣告しているようである。神がかり、歴史がかり、というのだろう）は、取材メモ、自筆原稿、初出誌にはない。初出作品集だけに存在。②最後の一文で大山を描いた（この小男の勝負度胸が）は（この小男の平静な勝負師が）（傍線は筆者）に書き直された。これを見て本文

中の〈勝負師〉の登場回数を確認したところ、一二回のうち木村を示しているのは、たったの一回。何と大山が八回。回数だけで言えば〈勝負師〉は大山なのだ（残りは〈勝負師〉としての魂胆が弱い）とされた（東京方の原田（泰夫）八段²¹、一般名詞としての登場、控え室の面々が各一回）。

（3）中篇小説特輯の一つとして掲載。目次で隣にあるのは井伏鱒二の「本日休診」。

（4）全七篇収録の中短編集。「勝負師」以外は普通の小説、随筆。安吾が細字万年筆の青インクで白地の見返しに左ページに〈筆者自家用／門外不出〉との書き込みがあった。安吾は五一年に税金未払いにより原稿料や蔵書の差し押さえを喰っている。その中の一冊が巡り巡って母校東洋大に納まったと推察される。「勝負師」本文にも二カ所の書き込みあり。①中公文庫「勝負師」で九〇ページの〈塚田の指手が報らせてきた。／六六歩〉（木村はそれをノータイムで、同歩）とある行から一二行先、九一ページの〈持ち時間があといくらかもない木村が、又、長考にはいる〉の右側に見返しと同じ青インクで線が引かれ、その右上に〈次は塚田の／指手なる／べし？〉との書き込みあり。木村の同歩の直後なので、確かに長考は塚田でなくてはならない。②同九五ページの〈木村、四十九分考へて、四五金〉とあるうち〈木村〉の右側に線が引かれ、そこからの指示線の

先に〈塚田？〉と書き込まれていた。九〇ページの〈木村〉の同歩の直後の手なので〈塚田〉が正しい。七篇のうち書き込みがあるのは「勝負師」だけ。安吾が自作を読み返したこと、自分が書いた手番の誤りに気づく程度の棋力があることを証明している。

（5）作品集「勝負師」は本来、観戦記集として出版されるはずだった。先に「後記」の冒頭を挙げたが、ここでは末尾を紹介する。〈私は闘争の美しさを好む。好むのあまり、やむべからずして書いたものが、この一冊の本である。ねがはくは読者よ、闘争を愛するはよし、正しく健康に愛し、合理的に処理して、再び戦争の愚をくりかへすことを、激しく憎もうではないか。／健全なる闘争に美神の宿らんことを。／一九四九・八・十六 著者〉。格調高く結ばれている。もし「後記」が載った観戦記集が安吾の意図の通りに出ていたら、これらの作品群はもつと陽の当たる場所にあつたに違いない。

（6）「勝負師」が、安吾の本来の意図とは違った作品集になった理由は「後記」と二通の詫び状から推察できる。作品社社主の山内文三からの五〇年一月二三日付の書簡は〈御叱正の御葉書頂戴致し早速八木岡を参上せしめ御詫申上候処御寛容をお図り賜り御厚情のほど御礼申上候〉。書簡中に出てくる同社の編集者である八木岡英治からは二月五日付で〈勝負師十部別便で

御送り申しましたから御嘉納くださるよう御願ひ申上ます。／大変遅延いたしました上、ご満足いたゞけるやうなものを作ることが出来ず何と御詫び申上てよいか分りません。二通とも安吾が作品集に不満があつたとわかる文面だ。また八木岡の文中の「十冊」のうちの一冊が現在、安吾母校に収蔵されていると推察される。

(7) 毎日新聞〈将棋の下手な自分は将棋そのものでなしに人間の心理的摩擦といったものを見たくて観戦しているが、木村は和らいだといつていいほど澄んだ気持ちに終始していたし、夜になつても疲労がみえなかつたのは彼が自己のペースのまま無理なく進んでいたからだと思う、これに比べて塚田には心理的な焦りがあるせいかな、何か感じが固く、自分を有利にしよう意識する個所でかえつて破たんを招いていたと思う〉、将棋新聞〈きよう観戦していて感じたことは木村さんの気持が澄み切つていたことだつた、五手目に木村さんは三十三分の長考にふけつたが、あれは恐らく手を読んだのでなく、落ち着きを取ろうとして努力したものだと思像される、そしてそれ以後はときどきボクに話しかけたりして、らかな気持で指していたようだが、これとアベコベにきょうの塚田さんはコチコチに固くなりすぎていたように思つた、そして恐らくこの気持をほぐそうと努力されたのであろうが、ほぐれて来なかつたようだが、こゝら

にも勝敗がある程度支配するものがあつたのではなからうか。

(8) 「サン写真新聞」(四九年五月二六日付) ほか。

(9) 前述。過去にカセットテープ、CD化。

ここまで関連資料が揃つている作品は稀だ。格好の研究題材であることは疑いない。

安吾は「大井廣介といふ男」で、大井を〈野球もレビューも忍術も知つてゐることがみんな出てくる。これは非常にいゝ所だと僕は思ふ(略)生活の全部が文学の中へ現れてくる〉と評した。これは安吾にも当てはまる。将棋は彼の文学の中に現れている。

1 NHK将棋講座に観戦記を執筆した同姓同名氏は別人。

2 研究集会の筆者発表で「安吾が書いたのは観戦記か?」という問題提起があつた。「定本坂口安吾全集」(全一三巻・六七年〜七一年・冬樹社)は「散る日本」「勝負師」を小説に、「観戦記」を評論に分類する。観戦記の枠を越えているという考えもあるが、ここではまとめて観戦記として扱う。

3 安吾は講演「名人戦をみて」を行った(坂口安吾デジタルミュージアム年譜〈七北数人作成 未掲載〉。「毎日新聞」四七年六月一日付の「将棋名人戦を語る会」(二二日午後五時三〇分)・

- 毎日ホール)で告知。「将棋新聞」第七号(四十七年七月中旬号・将棋大成会)の「名人戦講演会」報告に安吾の登壇記録あり。「名人戦を観て」は他者筆記の講演記録を転用した可能性がある。従来は初出未詳。筆者が将棋ペンクラブ会報「将棋ペン倶楽部以下、倶楽部」(下)①(二十一年・春Ⅱ第五五号)で報告。同作は「将棋新聞」第一四号(四十八年三月一〇日)に「私の将棋観」名で転載。従来は初出未詳。「夕刊新東海」「夕刊神港」「九州タイムズ」は筆者が倶楽部(下)①、(下)⑦(二十四年・春Ⅱ第六一十一号)、(下)⑨(二十七年・秋Ⅱ第六八号)で、斎藤理生大阪大学准教授が「安吾・新興紙・棋戦―『坂口流の将棋』『観戦記』初出をめぐる」(『坂口安吾研究』第二号・一六年春)で報告。「夕刊ニイガタ」「夕刊ひろしま」は筆者が倶楽部(下)⑨で報告。
- 筆者は二〇年ほど前、桜上水駅近くのそば屋に居合わせた編者の野坂昭如に選集について尋ねたことあり。「河出だったっけ?」いい加減なものでね」と返された。出版社が違う、確かに……。
- 近年、新潟市「安吾風の館」の安吾遺品からも発見。「安吾の将棋観戦記」展(一七年二月―一八年三月)でチラシに使用。
- 「名人木村義雄実戦集 巻七」(八一年・大修館書店)ほか。
- 「散る日本」の初出誌三手目「五六歩」は取材メモでは「二六歩」。「勝負師」でのいくつかの棋譜誤記も編集部に伝えた。指摘内容と将棋ペンクラブ会員の筆者名が筑摩版全集第一六巻に掲載。
- 国会図書館に収蔵。(上)(〇〇年・春Ⅱ第三三三号)―(下)最終回(一八年・春Ⅱ第六九号)、外伝(二〇年・秋Ⅱ第五四号)を断続的に計一三回掲載。
- PDFのご希望は筆者まで(shunchan1964@yahoo.co.jp)。
- 筑摩版全集未収録。〈坂口安吾デジタルミュージアム〉作品紹介〈022呉清源〉記事全文はこちらで閲覧可能。
- 『将棋世界』(九一年六月)の升田幸三追悼号の表紙は偶然、済寧館内部。「将棋のある風景④皇居済寧館の雨」には、写真・森信雄、文・大崎善生、編集長の田丸七段(立時)と豪華メンバーが集結。坪田(譲治)、小田(嶽夫)Ⅱ「城外」で第三回芥川賞を受賞。真杉(静枝)は当時中村と同居。いずれも文学仲間。
- 安吾の慧眼畏るべし。のちに加藤名誉九段は将棋ペンクラブ初代名誉会長。高柳名誉九段は第一回将棋ペンクラブ大賞受賞者。共に若くして引退、文筆家として活躍した。
- 同じ号には倉島竹二郎の「ひつくりかへつてゐる兄」も掲載。双葉山は幼少時に吹き矢で右目を負傷、ほとんど失明状態だったので激しい相撲は取りづらく、後の先の立ち合いになったという説あり。
- 発行の大観堂は古書店兼出版業。アンドレ・モーロワの「フランス敗れた」(四〇年)が二〇〇刷を超える大ベストセラーとなった。文士のパトロンの存在で店主の北原義太郎いわく「借金の大豪傑は安吾さん、檀(一雄)さん、それにあなた(尾崎一雄)」。新宿区に新刊書店として現存。最近気づいたが、筆者の自宅への大学合格連絡はこの店先の赤電話からだった。
- 主幹の安永一は本因坊秀哉門下の在野の棋客。「勝負師」に「素人五段の安永君」として登場。
- 雪光様(雪光尊)。雪宇教教祖。呉は一時期、双葉山と共に信者だった。
- 「開暮・人生・神様」(「文藝春秋」四十九年七月)。参加者は他に豊島与志雄、火野葦平。
- 実は安吾と同じ新潟県人。〇一年、筆者は原田九段に「勝負師」を読んでもらい感想を聞いた。答えは一言「安吾先生のおっしゃる通り」。

将棋場と文学場の交差

——木村義雄の人生観を契機として

近藤周吾

木村義雄の人生観を紹介したい。

一九五〇年前後の日本では、ある種の人生観ブームとでも呼ぶべき事態が起きていた。この流行については以前に少し書いたことがある。（拙稿「坂口安吾『わが人生観』を読むために」『富山高専専門学校紀要』第4号、二〇一七・二）

そこで、今回はこの流れの中に木村義雄の人生観を位置づけるかどうかというのが、さしあたり関心の的となる。

ひいてはそれが文学社会学、具体的にいえば文学場と将棋場の交差という、より大きな文脈に接続できないかと構想してみたいわけなのだが、しかし、これについては現段階においてはかなり難しく、少なくとも私一人の手には余るので、ここではごく乱暴なラフ・スケッチに止めざるを得ない。

以下、内容の一部においては以前に述べたことと重複すると

ころもあるが、次第に的を絞っていくこととする。

一 私の人生観を語ることの流行

一九二九年、ロンドン放送局はアルベルト・アインシュタイン、バートランド・ラッセル、ハーバート・ジョージ・ウェルズら、錚々たる学者や文化人から人生観を聞き出すというラジオ番組を企画した。後に『Living Philosophies』（一九三二、ニューヨーク）として刊行され、続編も『I believe』（一九四七、ロンドン）として刊行された。

これをモデルにした日本版が、一九五〇年九月から五一年九月にかけて雑誌『世界』に連載され、『私の信条』（一九五一・一〇）『續私の信条』（一九五一・一二）として岩波新書から刊行されている。前者は安倍能成、志賀直哉、津田左右吉、和辻哲郎、荒畑寒村、正宗白鳥、中野重治、柳田國男、木村義雄ら二〇名の、後者は恒藤恭、秋田雨雀、三好達治、中野好夫、山川菊栄、川端康成、鈴木大拙、呉清源ら二〇名の信条が語られている。本場ロンドンの続編では「神と宇宙と社会についての信条」を問うたのに対し、日本のものは「仕事と世の中のつながり」を問うていて、スケールにおいてはやや小ぶりの印象も否めないのだが、敗戦から約五年という時期に、いわば大物の文化人たち

を集め、正統二冊を刊行した企画は、日本の新書史上に残るものと評してよいだろう。

ただし、このような〈私の信条〉あるいは〈私の人生観〉を語るというコンセプト自体は、岩波書店のオリジナルということにはならない。一九五〇年前後の日本において、しばしば見られた型であるからだ。もともと、武者小路実篤『自分の人生観』（『愛と人生』一九五四・六、池田書店）は大正期からのロングセラーなので、例外と見なければならぬだろう。そうであるならば、刊行は戦前でも戦後に爆発的に読まれるようになり、版を重ねた三木清『人生論ノート』（創元社）と、書評などでも話題になった小林秀雄『私の人生観』（一九四九・一〇、創元社）の二冊を、当時影響力の大きかった代表作として挙げるのが順当だろう。その他にも、正宗白鳥『我が人生観』（『人間』一九五〇・六）、坂口安吾『わが人生観』（『新潮』一九五〇・五、七・五一・一）、河上徹太郎『私の人生観』（『新潮』一九五五・四）といったエッセイが著されている。財界に目を向けてみても、たとえば池田成彬『私の人生観』（文藝春秋新社）が一九五一年三月に刊行されている。

小林秀雄の『私の人生観』は、そもそものは講演であった。冒頭に「この前ここでお話しを依頼された時、『私の人生観』という課題を与えられました。」とあるから、「私の人生観」を語

ることが小林自身の発案でないことは明白だが、坂口安吾や河上徹太郎が似た題名で執筆するときには、小林秀雄という先蹤を意識したであろうことは想像に難くない。

人生観人生観と解り切った様に言っているが、本当はどういう意味合いの言葉なのだろうか。人生という言葉も観という言葉も、非常に古い言葉であるが、両方くっついて人生観というのは、古い事ではありますまい。少くとも、この言葉が普通に使われ出したのは、ごく近頃の事で、やはり西洋の近代思想が這入って来て、人生に対する新しい見方とか、考え方が起った時から、人生観という言葉も盛んに使われる様になったのだと思う。併しそれかと言って、人生観に相当する言葉は外国にはない様です。或る人の説によると、オイケンの *Lebensanschauungen* が人生観と訳されて以来、人生観という言葉が広く使われる様になったと言うが、*Leben* は人生だが *Anschauung* という言葉は観とは余程違う様だ。観という言葉には日本人独特の語感があるからであります。

小林秀雄「私の人生観」

『日本国語大辞典第二版⑦』（二〇〇一・七、小学館）によれば、「人生観」の用例として内村鑑三「月曜講演」（一八九八）、田山花袋「野

の花」(一九〇二)、国木田独步「牛肉と馬鈴薯」(一九〇二)、長与善郎「青銅の基督」(一九二三)が挙げられており、補注として「ドイツ語の Anschauung^トの訳として明治二〇年代から「観」が接尾語として成立するにもなつて生じた語。」とある。したがって、引用の前半の「古い事ではありますまい」「近頃の事」という小林の推測は正しいと言える。だが、『大思想家の人生観』で知られるドイツの哲学者ルドルフ・オイケンの「Anschauung」と日本語の「人生観」に語感の違いがあるとするのは、「単純に両者の語義の違いに関してだけ言えば、大きな違いは全くないと言つてよい」とする袴谷憲昭の「小林秀雄『私の人生観』批判」(『駒澤大学仏教学部論集』一九八八・二〇)が的を射ており、にわかには肯うことはできない。

それではなぜ、小林秀雄はこのような差異を偽装したのか。それは「見」と「観」の間に重大な差異を見出したいがゆえであるう。

観というのは見るという意味であるが、そこいらのものが、電車だとか、犬ころだとか、そんなものがやたらと見えたところで仕方がない、極楽浄土が見えて来なければいけない。「観無量寿経」という御経に、十六観というものが説かれております。それによりますと極楽浄土というものは、空想するもので

はない。まざまざと観えて来るものだという。観るという事には順序があり、順序を踏んで観る修練を積めば当然観えて来るものだと言つてあります。先ず日想観とか水想観とかいうものから始める。日輪に想いを凝らせば、太陽が没しても心には太陽の姿が残るであらう。清冽玉の如き水を想えば、やがて極楽の宝の池に清澄な水が心に映じて来るであらう。(下略)

小林秀雄「私の人生観」

武蔵は、見るという事について、観見二つの見様があるという事を言っている。細川忠利の為に書いた覚書のなかに、目付之事というのがあつて、立会いの際、相手方に目を付ける場合、観の目強く、見の目弱く見るべし、と言つております。見の目とは、彼に言わせれば常の目、普通の目の働き方である。敵の動きがあだとかこうだとか分析的に知的に合点する目であるが、もう一つ相手の存在を全体的に直覚する目がある。「目の玉を動かさず、うらやかに見る」目がある、そういう目は、「敵合近づくとともに、いか程も遠く見る目」だと言つのです。「意は目に付き、心は付かざるもの也」、常の目は見ようとするが、見ようとしないうちに目はあるのである。言わば心眼です。見ようとする意が目を目を曇らせる。だから見る目を弱く観の目を強くせよと言つ。

旧制高校時代に実際に講演を聴いた後の評論家・磯田光一は、「小林秀雄から一度、幻滅を味わわれた経験を私は持っている」として、「講演中に出てくる「観」とか「見」という語に私は辟易し」、「小林秀雄はダメになった……」と感じた」と当時を回想している。（「小林秀雄という現象——世代的な回想」『群像』一九八三・五。引用は『近代の感情革命——作家論集』一九八七・六、新潮社）

また、前記の袴谷憲昭は、「菩提樹下における釈尊の正しい認識とは、知性によって、インドにおけるヘラクレイトスの基体説である「我」を剔抉し否定することだったのであり、それは「止」によって準備され、「知性」としての「観」によってのみ果されたと見なければならぬ」と補足・訂正した。つまり、「観」に對置すべきは「止」であり、その「止」に對する「観」とは要するに「知性（知慧）」であるということ、換言すれば、小林秀雄をはじめとする多くの現代人は「仏教は悟りの宗教である」と考えるのに對し、袴谷憲昭は「仏教は知慧 *prajña* の宗教である」と捉え、批判する。

このような小林秀雄を最初に批判したのが坂口安吾である。これについては以前に述べたので繰り返さないが、要するに安吾は「青春論」「教祖の文学」「伝統と反逆」「わが人生観」といっ

た一連のテキストを通じて、小林秀雄を、より具体的にいえば小林秀雄の「見」と「観」の差異化を完膚なきまでに叩こうとしたというふうにみることができる。

ただし、安吾の批判は主流とはならなかった。なぜなら、小林秀雄の「見」と「観」を受け継ぐ人物が現れたからだ。それが木村義雄である。

二 木村義雄の人生観

将棋の十四世名人・木村義雄の名を、将棋界で知らぬ者はいない。かつては世襲制だった名人が実力制に変わって最初の名人になったのが木村だったからだ。その木村義雄は、棋士である一方で、エッセイストの顔を持つ。今回はそこに注目してみよう。

たとえば、「実力といふもの」（『将棋世界』一九五〇・二）というエッセイがある。そこで木村は「読者が実力を養ひ、自ら充実味を感じるまで」の「五つの段階」は「見・観・察・修・反」なのである。」として、「実力といふものはもとと尊敬を払ふべきではないかと考へる。」と結論した。木村義雄が小林秀雄を読んでいたかどうか、現段階では確証がないものの、ここでの「見」と「観」は、小林秀雄の人生観と相通するものがある。

木村義雄は、すでに述べたように、『私の信條』にもエッセイを寄せていた。初出は『世界』(一九五一・二)所収の「私の信條」である。ここでは高木貞治・里見淳・木村義雄・中野重治の連名となっている。高木貞治は一九四〇年に文化勲章を受けた理学博士であり、里見淳と中野重治は作家である。このような文化人と肩を並べていること自体に、木村義雄の果たしたもう一つの功績が窺い知れるだろう。つまり、将棋の実力において第一人者であったのみならず、将棋場、すなわち各界における将棋界の地位を押し上げ、いわゆる有名性を獲得したという意味においても、木村義雄の功績は大きかったということにはほかならない。

さて、木村義雄の「私の信條」であるが、それほど長い文章ではないし、今となつては将棋界においてもほとんど知られていない文章であろうから、資料としてここに再掲しておくことにしたい。

まず、「略歴」をすべて引用しよう。「東京出身、明治三十八年二月生、幼少より将棋に興味を抱き、大正七年慶應普通部中退後外務省に給仕として勤務の傍棋道に志す。同十五年八段となり昭和十三年より十年間名人、同二十四年再び名人位に即き今日に到る。著書「将棋大観」「私の三十五年」「木村将棋」等。」
続いて、本文をすべて引く。

信條などというものは、誰だつて、そう簡単に得られるものではないと思う。文字の上において、一應道徳的なものは首肯されても、そこに體驗の裏付がなければ、ほんとうの信條、不動の信條にはならない。藝道修行の面においても、色色な場合に遭遇して、種種の體驗を経なければ、身につくやうな信條は得られない。

私の場合というなら、三四段時分、棋道に對するこうと思つた信條も、さらに修行の年數を経て、五段、六段と昇る頃には、いつかその信條が動搖し、懷疑的になつて、考へ方も違つてくる。殊に生活的に大きな變化に直面すると、例えば過去十年間のやうな日本人の誰もが體驗した激動期に採まれると、きびしい生活面からの影響で、藝道修行に對する考え方も變つてくることが少なくない。思えばなさないことである。しかし社會的な變化から、現實的な日常生活に影響を蒙ることはどうにもならない。

将棋の戰と同じように、こうした局面の變化に次から次と遭遇し、經驗を重ねることによつて、総合的な判斷から、各人各様の信條が得られるのではないかと思う。将棋の戰においても、實戰というものになれば、神のみが知ると思われる種々な場合が生じて、決して定跡通りにはならない。時には定跡にすら懷疑になることが稀れではない。しかしそこに進歩もあれば飛躍も培われるやうな氣がする。結局は、視野が廣くならなければ

ば、批判眼も判断力もつかない。従つて身になる信條は得られないように思う。

棋道における現在の私の信條といへば、修行道を凝視して、ひたすらな精進あるのみである。名人戦とか、名人位とかは、人間の必要に應じて作つた制度であり、名稱である、という考え方も成立はするが、名人戦とか名人位などという大寫しに出會うと、忽ち人間的な弱點が露呈して、これに眩惑され易い。

私は若い人はこの大寫しに眩惑されてもいいと思う。私の過去にもそういう時代があつた。眩惑されることによつて、ひたむきな精進となり、自己の内容を充實出来るなら結構である。が、将棋の如く、藝道修行の面と、技倆を戦わす勝負道との二つの面を思う時、兎角勝利の大寫しに眩惑されて、ほんとうの修行道を見忘れる惧れがある。

勝たんがための研究であり、勝たんがための修行である。といへば、これは人生においても適用されると思うが、このみに熱中すると、修行道という道を見失つて、勝負道の邪道に陥り易い。こうなつては、常時思想が動搖して、到底信條などというものは得られない。

これは私の獨斷である。或は獨善であるかも知れない。が、私は人間に生を享けたからには、人間的な在り方に徹したいと思つてゐる。思つていても到底徹し切れるものではあるまいが、

すくなくとも人生修行にいそみたいと思つてゐる。

「人生」などといへば、廣大無邊なもので、誰だつて容易に達し得られるものではあるまいと思う。しかし私には人生修行の線と、藝道修行の線とは並行しているかのように考えられる。廣大無邊な人生も、藝道の線によつて、或る高度にすすむことが出来れば、或は人生の線も高度に達し得られるのではないかと考えてゐる。かりにそうだとすれば、藝道修行は修正のものである以上、人生修行にもおそらく極點はあるまい。私の過去に戦わされた千數百局の公開對局を通覧しても、なさけないことに満足な將棋が一局もない。甘えれば三、四局はあろうが、それ等は總て負けた將棋である。

勝負に勝つたが故に制度上名人位に就いてはいるが、私は人様から名人などといわれることが恥しい。將棋道を學ぶものとして、修行道からいへば、現在やつと山麓に達した富士登山者に過ぎない。これからが一合目、二合目と峻嶒な道を切り拓いて行く先達の程度と思つてゐる。思へば前途瞭遠である。しかし精進の一步一步をふみしめて行けば、心力のつく限りは前進することが出来ると考える。盤上における勝敗の、棋士としては重大であるが、將棋道の有難さに、修行道を凝視して行くことがより大切であると信じてゐる。

将棋界では「たどり来て、未だ山麓」は升田幸三の名言として語り継がれている。ところが、升田の好敵手であった木村義雄がすでに「現在やつと山麓に達した富士登山者」の比喩を用いているところが、将棋ファンとしては興味深い。もちろん、将棋を上達する上での教訓として読んでも、非常にためになる。

ただし、先に見ておいた小林秀雄と坂口安吾の対立を思うとき、やはり小林秀雄的な「見」と「観」が読み取れてしまう。それはつまり、人生観を語る木村義雄は、かつては実力主義者であったのだとしても、この時点ではすっかり芸道修行の面（修行道）と、技倆を戦わす勝負道（将棋道）の二つの面を器用巧みに使い分ける「教祖」と化しているところがあるということだ。要するに、坂口安吾的な視点から見ると、木村義雄はほとんど小林秀雄なのである。

もちろん、常識的には、木村義雄は何ら間違ったことを言っているわけではない。むしろ将棋の実力と人格を兼ね備えている優れた人物であるからこそ、文字どおりの意味で始祖となり、爾後の棋界の礎を築いたとも言えるわけであるから、そのような意味では全くもって批判される謂われはない。

ところが、それでもこの問題にこだわる所以は、坂口安吾の文学や観戦記を理解する上では、この一点が極めて重要になるからである。つまり、坂口安吾の慧眼は、すでに大成した木村

義雄というよりは、塚田正夫や升田幸三、大山康晴といった次世代の棋士たちの活躍を見越していた。要するに、その世代交替に目を凝らしていたと言ってもいい。そして、その後の将棋の歴史を知る私たちにとって、この慧眼には本当に驚嘆させられる。

それは言い換えると、文学的に見るだけでは了解できない坂口安吾が、将棋を媒介とすることにより、手に取るように理解できるという驚きでもある。将棋の技術的な面からだけ捉えるのではなく、残された棋士の文章を作家の文章と交差させ対話させることによって、新たな相貌が浮かび上がることもあるという例を見る思いがする。どうしてこのようなことが起こるのか。坂口安吾が囲碁好きであったということはもちろん大きな要因だろうが、それだけでは説明がつかないことのように私には思われるのだ。

三 将棋場と文学場の交差

将棋の人氣はいうまでもなく実力第一人者を争う名人戦の人氣である。昨日の名人もひとたび棋力衰えるや平八段となり時にBC級へ落ちることもなきにしもあらずである。実力だけで争う勝負というものは残酷きわまるものである。その激しさ、

必死の力闘が人気を生むのである。

坂口安吾「碁にも名人戦つくれ」

坂口安吾は、将棋の実力制になった名人戦をこのように高く評価していた。明らかに実力主義である。

ちなみに、この文章が掲載された大阪版『毎日新聞』（一九四九・五・二九）には、「名人位かくて木村氏へ——第八期将棋名人戦最終局」と、木村義雄・塚田正夫・大山康晴「熱戦を顧みて——木村・塚田・大山会談」という記事も載っていた。

坂口安吾が個人的に囲碁将棋に入れあげているという見方も成立するだろうが、私は少し違う見方をしてみたい。そこで論点を文学社会学の方面へとスライドしてみよう。

ジゼル・サピロ『文学社会学とはなにか』（二〇一七・七、鈴木智之・松下優一訳、世界思想社）の紹介するところによれば、セバスチャン・デュボアの一連の研究では、同業者の承認と、有名性の獲得には区別が必要であるとされている。つまり、有名性の獲得は、限定的なサークル内で認められることは異なり、そこから脱し一般的に認められることは、システムティックなものとしてでなく、有名性を測る諸指標の蓄積過程に注目することが必要であるという見方だ。

もし戦後において将棋場というものがまさに生成しつつあつ

たのだとすれば、将棋が木村義雄とともに有名性を獲得するその過程に目を凝らす必要があるだろう。将棋界という限定的なサークル内で認められるためには、単に将棋が強ければそれでよい。ところが、将棋界を離れて、将棋場自体の地位を向上させるためにはメディアに取り上げてもらわなければならない。そのような状況において、木村義雄のエッセイ群を捉えてみる必要がある。

木村義雄・辰野隆・藤澤庫之助「座談会 勝負と人生」（『芸芸公論』一九四九・二二）、木村義雄「実力といふもの」（『将棋世界』一九五〇・二）、木村義雄「私の信条」（『世界』一九五一・二）、木村義雄・藤澤庫之助・天野大三「将棋と人生——わが修行は芸道の中にあり」（『財政』一九五一・二）、加藤信・坂口安吾・木村義雄「呉・藤澤十番碁を語る」（『読売新聞』一九五一・七・四）、木村義雄「恩師」（誠文堂新光社編『私の人生訓』一九五二・六、誠文堂新光社）等々。

これらのラインナップを見れば、木村義雄が名人に復位したとき、棋士が人生を語るというスタイルを後輩棋士に残し、将棋場の地位向上を図った状況が具体的に了解できる。その後、升田幸三、大山康晴、米長邦雄といった人気棋士たちが、文筆のみならず、講演などで、この木村の遺産を継承していくことになるのは周知のとおりだが、それが今日において当たり前だ

からといって当時から当たり前のことだったと結論するのは拙速に過ぎよう。

その意味では、将棋の名人である木村義雄が岩波新書『私の信条』に多くの作家や研究者とともにエッセイを寄せたことは画期的であった。まさに当時の文壇や財界に自らを組み込み、将棋場の地位向上を図る諸指標の蓄積過程の一階梯であったと捉えることができるからだ。

ちなみに、囲碁では呉清源が「私の信条」(『世界』一九五二)を残していることも、最後に一言付け加えておこう。初出では、青野季吉・清水幾太郎・千田是也・呉清源の四名の連名であった。

坂口安吾が碁にも名人戦つくれといったのは、「目下の棋士の力では名人戦を争うと結局名人位が呉八段に行く、つまり中国へ持つて行かれてしまう、それを怖れているのだという巷説であるが、こんなバカな話はない。」とあるように、呉清源を実力主義により押し上げたかったからにはかならないが、図らずも文筆の世界では呉清源は木村義雄と肩を並べていたことになる。

坂口安吾に限らず、多くの作家たちが当時、囲碁や将棋に関心を持っていたのは、おそらくこのようなジャーナリズムにおけるある種の格付けが進行していたという文脈を押さえなければ正しく理解できるものではないだろう。また、木村義雄が将

棋道だけでなく、修行道を持ち出したこの意味も、このコンテキストを押さえなければ理解できない。言い換えると、坂口安吾の見方だけでも、木村義雄の視点だけでも、当時の将棋と文学の状況を十全に語ることはできないということである。

ピエール・ブルデューになぞらえて言うなら、一九五〇年前後という時代は、文学場と将棋場が漸近していた時代だったと総括することができる。つまり、広義の文学者たちと肩を並べるにより、棋界はその社会的な礎を築き上げてきたと、ひとまずは言えそうである。文壇の側もまた、棋界を巻き込むことによって、従来の文壇の在り方を変えていこうとしていたのかもしれない、と。

いづれにせよ、今日の状況とは異なる文脈や差異を多分に含んだ一九五〇年前後の将棋場と文学場の研究については、いまだ研究の端緒についたばかりである。

われわれは、エリアスとともに、科学的諸学問が「あまりに狭隘な事實的基礎に立脚する単一的人間モデルを、検討に付される人間存在の限られた断片をもとにして構築する」のをやめるように願うことができるだろう。それらの学問のそれぞれが「それ固有の説明類型を、網羅的かつ排他的なものとして」提示するからである。ある学問がその「人間モデル」——経済的

人間、精神医学的人間、精神分析学的人間、言語的人間、法律的人間、宗教的人間、美学的人間、性愛的人間、社会学的人間など——を唯一可能なものとして擁護するように仕向ける学問的エスノセントリズム (ethnocentrism) は、一部門の実践のなかで、もしくは一分野の非常に特殊な経験をもとに観察され、分析されたものを人間行動全般へと一般化するように導くのである。

ベルナル・ライール『複数的世界 社会諸科学の統一性に関する考察』二〇一六・五、村井重樹訳、青弓社

われわれは今後、将棋と文学という新しい研究の場を構築していく途上で、エッセイストでもある名人や観戦記者でもある作家と向き合っていく必要に迫られるだろう。そのときにはやはり、ライールの、ノルベルト・エリアスやフェルナン・ブローデルを踏まえた右のような言葉にも耳を傾けておく必要がある。

付記

引用には『坂口安吾全集』（一九九八―二〇一二、筑摩書房）、『小林秀雄全作品』17、18（二〇〇四、新潮社）を用いた。

将棋と棋士をこよなく愛した

作家の山口瞳への追想

田丸 昇

私は、将棋を愛好した作家の山口瞳と将棋界との関わり、私的に交流したエピソードなどを元にして、山口の人生の一端を振り返ってみたい。

山口は、まじめで気が小さい会社員の日常生活と物悲しさを綴った『江分利満氏の優雅な生活』の小説で、一九六三年に三七歳で第四八回直木賞を受賞した。ある選考委員は「皮肉あり、私小説あり、随想ありで、筋というものは別にないけれども全体から《ひとつの新鮮な詩》を感じた」と評した。

山口は『週刊新潮』の伝説的編集者だった斉藤十一から依頼され、『男性自身』という表題のエッセーの連載を一九六三年の末から始めた。自身の身边雑記や率直な物言いを綴った軽妙な筆致は、読書の共感を呼んで支持された。そして一九九五年に六九歳で亡くなるまでの三一年間、一回も休載することなく

書き続けた。連載回数は一六一四回に及んだ。

山口は、幼少の頃から将棋が好きだった。三〇代に洋酒メーカーのサントリー（当時は寿屋）の宣伝部にPR誌の編集者として勤務していた頃は、将棋が強い同僚を自宅に呼んで指すことがよくあった。

やがて、山口の将棋好きは棋士たちに知られるようになり、一九六〇年代後半には人気棋士の芹沢博文八段、中原誠八段、米長邦雄七段（肩書はいずれも当時。以下の棋士も同じ）らが、東京・国立の山口の自宅を訪れて交流した。

治子夫人の話によると、芹沢八段は来るなり「奥さん、お茶なんかいりませんよ。ダルマ（サントリーウィスキーのオールド）と氷があれば十分です」と注文し、ぐびぐびと飲み続けた。芹沢は名うての酒豪だった。中原八段が来たときに、有名蕎麦店の人が茹でたての蕎麦を出すと、中原は「うまい蕎麦は、すぐに食べなきゃ」と言って、色紙に揮毫していた筆を箸に持ち替えた。夫人は「子どもみたい」とほほ笑んだという。山口は、米長七段と競馬の話で盛り上がった。米長が明子夫人と弁当持参で競馬場に出かけ、立見席で観戦することに好感を覚えたという。

山口夫妻は、明晰な頭脳で一流棋士として活躍している彼ら

の素顔や性格が明るくて親しみやすいことに驚いた。山口の将棋熱はさらに高まっていた。

山口は自ら働きかけて、文芸誌の「小説現代」で『山口瞳血涙十番勝負』という自戦記を兼ねたエッセーの連載を一九七〇年から始めた。山口が当代の一流棋士一〇人と、「飛車落ち」のハンディ戦で対局する企画だった。当時は世間にあまり知られていなかった将棋界の有様や棋士の姿を、将棋ファンのみならず一般の人たちにも伝えたい、という意図があった。

山口は『血涙十番勝負』で、大山康晴名人、中原十段、二上達也八段、原田泰夫八段、米長八段らの棋士と対局した。こうした「お好み対局」では、プロがアマに勝ちを譲ることが時にある。しかし、棋士たちと山口は真剣勝負のように戦った。

プロ棋士を相手に懸命に戦って呻吟する様子を率直に綴った自戦記は、その健闘ぶりや心持ちが読者の共感呼んだ。また、文中で紹介する棋士のユニークな素顔、少し辛口の棋界評論などによって、世間の将棋と棋士に対する関心は高まっていた。対局で記録係を務めた奨励会員（棋士の卵）には、温かい言葉で激励した。

山口は『血涙十番勝負』で、三勝六敗一分の成績を挙げて大いに健闘した。《これは僕の血と涙の書である。いま、アベバ

と一緒に一万メートルを走ったような気分である。全棋譜は、決してつくられたものではない》と、最後に綴った。

この企画は好評を博した。引き続いて『続血涙十番勝負』が始まり、山口は木村義雄十四世名人、塚田正夫九段、内藤国雄九段、加藤一二三・九段、大内延介八段らと、「角落ち」のハンディ戦で対局した。

私が作家という職業の人を初めて見たのは、奨励会（棋士養成機関）の三段だった二〇歳ぐらいの頃。東京・千駄ヶ谷の旧将棋会館のロビーで、多くの棋士と談笑していたのが山口だった。棋士になれば、あんな著名人と親しく話ができるんだと、羨望の思いを抱いたものだ。

私は二〇代はじめの頃、同世代の奨励会員らと共同で、『棋友』という表題の同人雑誌を定期的に出していた。私たち同人にとつて、本作りの作業はもちろん初めての経験で、みんな書いた自戦記・講座・随筆などの文章は稚拙な内容だった。ただ若者が抱く夢と熱気は充満していたと思う。一九七一年に創刊した『棋友』は、二年後に諸事情によって休刊することになった（通巻で一三三号）。

一九七三年二月。前年に四段に昇段して棋士になった私（当時二二歳）は、『棋友』を山口に読んでもらいたいと思い、バッ

クナンバーを何冊か自宅に送った。将棋に例えれば、アマ級位者が自分の棋譜をプロ高段者に講評をお願いするようなものだが、恐れを知らないのは若者の特権である。

それから数日後、私のところへ山口から返信のハガキが届いた。『棋友』有難う。このテの雑誌は大好きです。マラソン大会からミジメ君の話まで、全部読みました。休刊は、なんとも残念です。おヒマが出来ましたら、ぜひ遊びに来てください。何人であられても歓迎します』という文面だった。

私はとてもうれしかった。その好意に甘えて、同人仲間で弟子である沼春雄三段と一緒に、山口の自宅を訪れた。白亜の洋館風の建物だった。私たちは応接間に通された。奥の壁には、高さ三メートル、幅四メートルほどの大きな書架が設置されていて、文学全集、事典、美術書などがぎっしりと並んでいた。

山口は、自宅で定期的に棋士から指導を受けていた。その棋士は山口英夫五段。中央線の沿線に住んでいる若い棋士、という山口の希望を受けて人選された。山口五段は「英ちゃん流」と呼ばれた中飛車を創案した棋士で、愛称が戦法名に付いた初めての例だった。

当日は月に一回の指導日。応接間に将棋盤が五面ほど並べられていて、テレビで見たことがある著名人が将棋を指していた。

タレントの大橋巨泉だった。ほかの参加者は、放送作家の安倍徹郎、競馬評論家の赤木駿介、出版社の編集者など。山口はその将棋仲間の集まりを「山口組」と称した。あの団体とはもちろん関係ない。飛び道具は、将棋の駒だけである。

山口は、盤は榎（かや）、駒は黄楊（つげ）、駒台は桑（くわ）と、将棋の道具は最高級の材質のものを設えた。脇息やちり箱の備品も用意した。まるでプロ公式戦の対局室のようだった。

山口は「キャウジンの弟弟子ですよ」と、私を巨泉に紹介した。キャウジン（狂人）とは米長八段のこと。奔放で時には常軌を逸したような発想や生き方をしていたのを、肯定的に表現した。

巨泉は大学時代、麻雀よりも将棋が好きだったという。その後、山口と親しくなったのをきっかけに将棋に熱中し、米長に個人指導を受けていた。巨泉が司会を務めていた深夜の人気番組『11PM』では、若手棋士同士の「目かくし将棋」、巨泉と女流棋士の対局など、将棋の企画をたびたび取り上げた。中でもユニークだったのは、棋士が公式戦で指した悪手を「次の一手」に出したことで、視聴者に大受けだったという。巨泉ならではのアイデアであった。

私は巨泉と「飛車落ち」の手合いで指した。山口の影響を受けて定跡に精通していて、攻めが強かった。アマ二段ぐらいの

棋力があった。

山口とは「角落ち」の手合いで指した。同じ大駒落ちの飛車落ちに比べて「平手」に近く、アマ四、五段の強豪でもプロに勝つのは大変である。山口の将棋は、定跡をきっちりとして習得して本格的だった。相撲のハズ押しのように、じわじわと攻めて優位を広げていく指し方は、プロとの駒落ち戦で力を発揮した。私は別に緩めたわけではないが、いつも負けそうになった。

山口は自身の将棋について、「序盤は有段者、中盤は一級、終盤は六級」と控えめに語った。将棋ファンの中には「どうせ旦那芸さ」と冷ややかに言う人もいたが、町道場の荒くれ将棋とは一線を画した。「将棋は男の芸事」だと提唱し、棋士から指導を受けることが一番の上達法であると説いた。

山口組のメンバーが、将棋会で合間にかわす雑談の内容は多岐に及んで面白かった。巨泉が所有した馬が競馬のレースで優勝した、安倍が脚本を書いている時代劇『必殺仕置人』が同じ時間帯の『木枯らし紋次郎』を視聴率で抜いた、赤木が時代小説で作家デビューする、などと明るい話題が多かった。

山口には当日、NHKから将棋番組への出演依頼があった。中原名人と角落ちの手合いでお好み対局を指す企画である。山口が「テレビ将棋はなあ……」と渋った様子を見せると、巨泉

が「中原なんか、やつつけちゃいなさいよ。別にハゲなんか気にすることはないでしょ」と、励ましとも冷やかしくもつかぬことを言って、一同は大笑いした。

夕食の時間になると、みんなで地下の食堂に席を移し、治子夫人の心づくしの手料理に舌鼓を打った。そして、お酒がほどよく回ってくると、雑談から議論に変わっていった。

巨泉「奨励会制度に問題がある。若手を伸ばさない団体は発展しない」

赤木「三段から四段になるのに、年間でたった二人だけなんですね」

山口「将棋連盟の運営がまずいんだな」

安倍「将棋界はジャーナリズムが確立されていませんね」

田丸「そこで私たちは、ちゃちですが同人雑誌の『棋友』を出しました」

巨泉「競馬界の体質も昔は古かったが、ジャーナリズムの発展で良くなった」

山口の自宅での将棋会は、優雅な将棋サロンの趣と、談論風発の雰囲気混在した、居心地の良い空間だった。

また、近くに住む漫画家の滝田ゆう、編集者の嵐山光三郎、作家の常盤新平、俳優（後年に映画監督）の伊丹十三など、将棋を指さない著名人もよく訪れた。山口の自宅は「国立文化村」

の中心地になっていたようだ。

私たち『棋友』の同人は、その後も山口の自宅で行われた将棋会にたびたび呼ばれた。将棋を指すのも話をするのも、若者たちとのほうが楽しかったようだ。

将棋会が終わった後、山口の自宅から一キロほどの南武線・谷保駅の近くにある、もつ焼きがおいしい「文蔵」に行くことがあった。その小さな居酒屋の店主は、山口の著書『居酒屋兆治』の主人公のモデルとして知られ、高倉健の主演で映画化された。夫婦でひっそりと三〇年ほど営み、二〇〇六年に諸事情で閉店した。

ある日、山口は急ぎの原稿を書くことになり、別の部屋の文机の前に座って書き出した。四〇〇字詰め原稿用紙に万年筆で執筆している様子は、外からちらりと見えた。将棋を指しているとき以上に、当然ながら真剣な表情だった。

山口が『週刊新潮』に長期連載していた『男性自身』のエッセーでは、将棋界や棋士の話題がよく登場した。

一九七六年四月二〇日、現在の将棋会館の落成式が開かれた。来賓として出席した山口、放送作家の安倍、田丸五段、真部一男五段、伊藤果四段の五人は、式の後には新宿の歌舞伎町に連れ立って行った。まだ陽が高かったので開いている店は少なく、

新潟料理の店にたまたま入った。山口は、その日の様子を次のように綴った。

《ゴールデン街で飲み、それから、田丸さんと安倍さんの三人で、田丸さんの婚約者である谷川治恵嬢の家へ行った。(中略) 谷川嬢は、さすがに棋士の妻となる人だけあって、将棋盤を出して待っていた。安倍さんと谷川さんの将棋を見ながらウイスキーを飲んだ》

説明を加えると、谷川嬢は当時アマで、現在は女流棋士五段。実家の小金井と山口の自宅の国立は同じ方向なので、成り行きからタクシーに三人で同乗して向かった。それから一ヵ月後、私は谷川と結婚式を挙げた。山口にも出席してもらった。

山口には長年の願望があった。プロ野球の監督を一試合だけ務めること、名人戦の第一局の観戦記を書くことだった。

その後者が一九七四年の名人戦(中原名人―大山九段)第一局で実現した。山口の観戦記は、作家らしい洞察力のある棋士評、対局室の細やかな描写、独自に得た様々なエピソードなど、将棋関係者や読者に好評だった。敗勢になった中原名人の泣きそうな表情については、『市谷の自衛隊のバルコニーに立った三島由紀夫の顔だと気がついた』と表現した。また、『私は、棋士にはどうして「人間国宝」とか「無形文化財」の称号が与

えられないのか」と、棋士を称賛する持論を述べた。

将棋と棋士をこよなく愛した山口は、自ら将棋連盟の「宣伝部長」と名乗り、将棋の普及に尽くす労をいとわなかった。ところが、ある時期から将棋界や棋士と距離を置くようになり、将棋も指さなくなった。

治子夫人の話によると、将棋界の宣伝係として役目を果たした気持ちと、健康上の理由からだという。将棋を指すと血圧が上がリ、アイスノンを頭に巻いて指すこともあった。ほかに、あるトラブルが起因したようだ。詳細については言葉を濁したが、山口がとくに親しくしていた二人の棋士と考え方で行き違いが生じ、不和になったという。山口の思い入れが深くなるにつれ、それを鬱陶しいと感じた状況があったのかもしれない。山口はその後、甲子園で活躍した地元の都立高校の野球部を応援したり、温泉旅行に出かけたり、水彩画を描いたりして、余暇をのんびりと過ごした。

一九八七年に河口俊彦六段、観戦記者の東公平らが中心になって「将棋ペンクラブ」が設立された。将棋ジャーナリズムの活性化、将棋に関わるライターの待遇改善、文壇将棋会の開催、などを趣旨にした。山口はその際に相談を受けた。趣旨に賛同するとともに、優れた文章を書いた人たちに贈る「将棋ペ

ンクラブ大賞」の選考委員を引き受けた。さらに、山口は以前に勤務していたサントリーに持ちかけ、大賞の賞金を協賛するように話をつけてくれた。

山口は、将棋ジャーナリズムの確立をかねてから提唱していた。良い批評家がない世界は発展しないと考えていた。その意味で、観戦記者らの地位や待遇の向上を願っていた。実は、山口は作家になる前、少ないスペースで簡潔に書かなくてはならない、新聞の将棋欄の観戦記を読んで文章を勉強したという。とくに加藤治郎名誉九段の観戦記が参考になったそうだ。

私は、山口が長期連載していた『男性自身』シリーズでの軽妙で滋味あふれる筆致が好きだった。一九七八年から成人の日（当時は一月一五日）の新聞紙上にサントリーの広告が毎年掲載されたとき、山口は新成人に向けて簡潔なメッセージを送った。年に一回のうえに、翌年は対象の読者は変わるが、いつも素晴らしい内容だった。そのひとつを抜粋で紹介する。

『二十歳の諸君！ 今日から酒が飲めるようになったと思ったら大間違いだ。今日から酒を飲むことについて勉強する資格を得ただけなのだ。仮免許なのだ。酒を飲むことは分を知ること、酒の上の約束を守りなさい。諸君は、いつでも、試されているのだ。ところで、かく言う私自身であるが、実は、いまだに、仮免許がとれないのだ。諸君！ この人生、大変なんだ』

人生の先輩が新成人に助言する形になっているが、最後は年代の違いを超えて共感し合うことで、新成人だけでなく一般の読者からも評判を呼んだ。

山口は晩年、糖尿病を患い、前立腺がんの疑いで除去手術を受けた。ほかの部位にも腫瘍が生じ、入院を繰り返していた。入院する前に黒沢明監督の映画『生きる』を見ていたら、家族に「こんな映画を見るのか」と驚かれたが、山口は葬式場面の左ト全を見たかったという。入院中に検査の合間に外出許可が出ると、後楽園ウインズで皐月賞の馬券を買ったり、ホテルでコーヒーを満喫した。

一九九五年三月、私は風邪が悪化したので、地元の荻窪病院に行った。その待合室で山口夫妻とばったり会った。二月に受けた検査の結果を聞きに来たという。久しぶりに会った山口からは「君はエイズの検査かね」と、とんだ挨拶を受けてしまった。毒舌は健在だった。私が山口の姿を見たのは、それが最後となった。

山口の病状はますます悪化していった。それでも七月に直木賞の選考会に出席して、作家仲間と小説の話をしていると、体の痛みをしばし忘れたという。八月に容体が急変すると、小金井の病院のホスピス棟に緊急入院した。

そして一九九五年八月三〇日、山口は肺がんによって六九歳で死去した。

山口は『男性自身』のエッセーを三一年間にわたって連載したが、死が急であつたために、結果的に一回も休載することはなかった。その最終回には、『どうやって死んでいったらいいのだろうか。そればかり考えている。唸って唸って（あれを断末魔というのだろうか）。カクンと別の世界に入ってゆくのだろうか』という一節が書かれていた。

将棋連盟は、山口が将棋界に果たした功績に感謝し、七段の免状を追贈した。

私は、山口とそれほど濃密な付き合いをしていたわけではないが、その時々思い出は今でも鮮明に残っている。

山口は京都に旅行したとき、地元の知人に紹介されてよく通った祇園の店があつた。小料理屋「山ふく」で食事をしてから、バー「サンボア」に寄るのが定番だった。私も京都に行くと、同じコースをたどることにしている。

そのバーの七〇代のママは、マスターの急死によって三〇代で初めて店に入った。洋酒の銘柄もろくに知らなかったが、常連客の山口に助言されてカクテルの作り方を少しずつ覚えた。私がそのひとつのドライ・マティーニを飲んで、山口の思い出

をママに語っていると、当人が扉を開けて入ってくるような気がした。

私は東京・西荻窪の地元の居酒屋で、以前から知っていた山口の子息の山口正介（作家で映画評論家）をたまに見かけることがある。席が隣同士になると、生前の山口や山口組のメンバーについて雑談をかわした。山口の自宅にあった五組の立派な盤駒のことを聞くと、ある伝手を介してすべて処分したという。話しぶりでは、安価にたたかれたようだ。子息は将棋を指さないので仕方ないが、誰かに形見として一組でも譲っていたらよかったのにと、私は残念な思いをした。【文中敬称略】

文壇ゴシップと詰将棋

三浦 卓

新聞や週刊誌にとって、現在でも将棋は重要なコンテンツのひとつである。芸能ゴシップも同様であるが、かつては文壇ゴシップもまた然りであった。例えば1922（大正11）年に創刊された『サンデー毎日』にも将棋や文壇ゴシップが早い時期から見られる。ここで紹介するのは、その『サンデー毎日』1926（大正15）年10月10日号に掲載された、堤寒三漫作「文壇詰将棋新題」というその両者の融合ともいえる記事である。

堤寒三はこの時期の『サンデー毎日』に度々文壇を戯画化した漫画をよせているが、本記事も詰将棋の配された9×9の盤の上部に「菊池王将」、右に「中村飛将」、左に「佐藤角将」の似顔絵が描かれた漫画が大きな存在感を放っている。本文では、冒頭から「本局文盤の大局を見ますに、菊池王方は新進川端、横光、菅、石濱の歩が中心となつて防衛に備へ…」と作家たちが駒に喩えられていて、「攻方」もまた「渡仏昇天の龍と成つた中村飛車」「合評会あたりの連絡を示す佐藤角将」「猪突的不同調同人の香車を従へて」などと同様である。まだ歩にすぎない新感覚派同人を従えた菊池寛王に、『文芸春秋』への対抗の拠点として『新潮』のコラム欄の名を冠した『不同調』を主催した中村武羅夫と、原稿料をめぐる論争で菊池寛と対抗的な見解を示していた佐藤春夫が飛車角として攻め込むといった形で、文壇のある部分の構図が詰将棋として表現されている。指し手も「詰方△三三龍。（本局の主眼点はこの一手です。龍がフランスへの生命の洗濯に出掛る前、犠牲的に玉碎主義に出たら）」のように、いちいち文壇ゴシップ的文脈で意味付けられている。実際の詰め手にこういった意味を持たせ、しかも本当に詰む、という知的遊戯となっているのである。

将棋を比喻として用いる『小説神髓』以来の伝統と言えるのかはともかく、当時の文壇がどのように把握されていたのかが見えると同時に、文壇（ゴシップ）と将棋のファン層の重なりも感じさせる貴重な資料ではあるだろう。本当に詰んでいるのかは、詰将棋がてんで駄目な私には真偽が確かめられない故、国会図書館などで記事を探して各自確認されたい。

[志學館大学]

日本の近代小説は 将棋から始まった？

小谷瑛輔

一、日本の近代小説は将棋から始まった

将棋と文学の関係、という関心を日本近代文学研究者に話してみると、「何を奇矯なことを言っているのか」というような眼で見られるか、または好意的に受け止められる場合においても、「全く考えたこともない視点で新鮮だ」という反応を受けることがほとんどである。

日本の近代文学が遊戯ゲイム、特に将棋といかに関わってきたか、ということについては、文壇においても研究においても、これまで議論になる機会が乏しかったようだ。それはなぜだろうか？

それは一つには、「芸術」「文学」という領域をことさらに遊戯ゲイムと区別し、それとは無縁のものと見なすことによって、真摯で高尚なものとしてのイメージを構築してきた日本近代文学

の歴史によるのではないだろうか。本稿ではまず、この点について吟味しておきたい。

たとえば、現在でも様々な面で純文学の象徴と見なされている芥川龍之介は、「真の芸術家は勝負事はきらひなんだよ」と述べて、友人と遊戯ゲイムで対戦することを頑なに拒否していたという。また、戦後になって「文学」の理念を再建しようとした雑誌『近代文学』については、坂口安吾が「君たちの雑誌は肩が凝って仕様がなくて詰碁と詰将棋を載せてくれないかな、と言つて、平野謙に叱られた²」というエピソードも残されているが、高邁な文学理念を追求するためには、著休め的なものであつてさえ遊戯ゲイム的なものを近接させることは強く拒否しなければならぬ、という偏頗ともいえる価値観が形成されていったのである。

しかし注意したいのは、これらのエピソードは、本来的に遊戯ゲイムが文学から遠いものだったことを示しているのではなく、むしろ逆に、将棋という遊戯ゲイムが常に文学の近傍にあり、しかもそれが文学と深く関わるものとして立ち現れ続けていたからこそ産まれた、ということである。

そこでまずは、挑発的な仮説を述べることから本稿の議論を始めてみたい。そもそも日本の近代小説は将棋から始まったのではないか、ということである。

よく知られているように、日本で「小説」の理念を最初に説

いたと言われるのは坪内逍遙の『小説神髓』³だが、そこで彼は、次のように「象棋」の比喻を用いて「小説」を書くとはどういうことなのかの説明を試みていた⁴。

小説の作者たる者は専らその意を心理に注ぎて、我が仮作たる人物なりとも、一度篇中にいでたる以上は、これを活世界の人と見做して、その感情を写しいだすに、敢ておのれの意匠をもて善悪邪正の情感を作り設くることをばなさず、ただ傍観してありのままに模写する心得にてあるべきなり。譬えば人間の心をもて象棋の棋子と見做すときには、その直きこと飛車の如き情も尠からざるべく、行く道常によこざまなる心の角も多かるべし。桂馬の飄軽なる、香車の料簡なき、あるいは王将の才に富て機に臨み変に応ずる縦横無尽なるもあれば、ただ進むべき前あるを知りて左右に避くべき道を知らざる匹歩庸歩も尠からず。おのがじしなる挙動をして、この世局を渡るものから、直なる飛車も生長なればむかしの飛車におなじからず、角も世故に長ずるにいたれば、直なる道をも行くことあるべし、あるいは王将も匹歩の手にかかり、あるいは慮りなき香車にして金銀を得ることもありなん。囲棋者は造化の翁にして、棋子は即ち人間なり。造化の配剤の不可思議なる、傍観で観るとは大いに異なり。「彼の金ほどなく彼方へなりこみ進んで王手となる

べからん。」と思うに違いて、一匹歩にたちまち道をふたがれつつ避くべきひまだにのうして、桂馬の餌食となることあり。されば人間もこれにおなじく栄達落魄必ずしも人間の性質に伴わざるから、あるいは才子にして業をなさざるあり、あるいは庸人にして志しを得るあり。千状万態、千変万化、因果の關係の駁雜なる、予め図定むべからず。故に小説を綴るに当りて、よく人情の奥を穿ち、世態の真を得まくほりせば、宜しく他人の象棋を觀て、その局面の成行をば人に語るが如くになすべし。もし一言一句たりとも傍観の助言を下すときには、象棋は已に作者の象棋となりて、他の某々らが囲したる象棋とはいふべからず。「あな此処はいと拙し、もし予なりせば斯なすべし、箇様箇様に行うべきに。」と思わるる廉も改めずして、ただありのままに写してこそ、初めて小説ともいわるるなれ。

「小説」という概念は、現在ではもはや説明を要しない親しいものとなっているが、かつては「卑小な巷説であり、卑下すべきつたないたわむれの作品という意味⁵」でしかなかった。逍遙が『小説神髓』を書くまでは、現在と同じような芸術ジャンルとしての意味では「小説」という言葉のイメージは共有されていなかったのである⁶。もちろん、滝沢馬琴のような戯作のイメージならば共有されていたわけだが、逍遙はそれとは異

なるものとして「小説」を新たに提唱する必要がある、そのためには、日本人が既に知っている他のもののイメージを借りる必要があった。そして、その母体となったイメージこそ、将棋だったのである。

そのようなことが可能となったのは、将棋というものが、まさに人間たちの織り成すドラマを現実世界とは別の時空に再現してみせる一つの形態であったからにはかならない。

将棋という虚構空間に逍遙が見出したものを詳細に検討してみよう。個々の石の性能に区別のない囲碁とは異なつて、将棋には多様な性質の駒があり、それぞれの駒はその性質に基づいて動く。そのように、現実の人間世界においても、それぞれに個性的な性格をもった人々が、各自の性格に基づいて刻々と変化する人間関係や状況を形作り、その状況に合わせて人々がまた行動を起こすのであつて、それをモデルに小説を考えるべきだ。逍遙が言っているのは、そのようなことである。

しかしもちろん、現実の世界というのは、優れた者が勝ち、劣った者が負ける、というような単純なものではない。現実世界の複雑性も含めて「模写」することが新たな「小説」の使命であるならば、それぞれの性質が一定不変であり、ただちに結果に結び付くような単純な世界観では不十分である。

将棋の駒の性質は、必ずしも一定不変のものではなく、駒が

成つて性能が変化することもある。人間もまた、状況によって大きく成長したり、性格を変えたりすることがあり得る。また、歩で金に対抗することもあるように、個々の駒の優劣が結果の優劣に直結するわけではないのも将棋の面白いところだが、人間社会も同様で、「榮達落魄必ずしも人間の性質に伴わざる」のであつて、そうした複雑な様態を再現することを「小説」の目標とするにあたつて、将棋は格好のモデルとなり得たのである。

逍遙が言っていることには、もう一つ興味深い点がある。それは、将棋を指すように小説を書くのではなく、他人同士の将棋を観戦してその様子を報告するように小説を書くべきだ、ということだ。逍遙は、将棋の対局ではなく、将棋の観戦報告を小説創作に対応するものと考えたのである。

素朴に考えれば、作中の出来事というのはあくまでも小説の書き手が産み出すものであつて、小説を書くことに似ているのは、将棋の局面を作り出すこと、すなわち将棋を指すこと、ということになりそうだ。しかし、逍遙があえて観戦の類比を採つたのは、小説の書き手としての存在感や思想を露骨に見せてしまふ近世の戯作の文体を改め、ありのままに写し出すような文体、あたかも書き手の恣意などどこにも入り込んでいないかのように装う文体を目指したからである。

もちろんこの小説観自体は、のちの小説家の間でも見解が分

かれる点である。たとえば、物語を提示するにあたって、それを語る存在に積極的に目を向けさせる文体を模索した芥川龍之介などは、こうした逍遙のスタイルを欺瞞的なものとし、むしろ問題化することを試みたと言える⁷。柳田泉が、「逍遙は、傍観模写をつよく意識したあまり、さし手のあることを忘れたものであろう。駒は、さし手の意のままに動くので、ひとりでは動くのではない⁸」と批判しているのも同様の問題に関わる点であろう。

いずれにせよここで確認しておきたいのは、日本において小説の概念は将棋のイメージをその源流の一つとしているということである。また、小説の創作とは将棋における対局に対応するものなのか観戦に対応するものなのか、すなわち、作家の存在をどのように位置付けるのか、といった点まで考察することが可能となったのも、将棋のイメージを借りたことに依拠していたのだ。

二、将棋と日本近代文学の歩み

将棋が日本近代文学の成立に関わると言える点は、それだけではない。岡本嗣郎⁹は次のように述べている。

新聞将棋と新聞小説は不思議な相関関係にある。二つはその出発点から、ぴたり歩調を合わせて新聞の中にその地歩を固めていった。新聞の大衆化とともに、新聞社の販売政策に欠かせぬ娯楽として、将棋と小説が選ばれたことに、その原因はあるようだ

よく言われることだが、日本近代において小説のシェアが拡大していく決定的な契機として、新聞小説があった。小説が新聞を利用して読者層を拡大していったのと同時に、新聞もまた、人気作家の小説を掲載することによって部数を伸ばしたわけだが、この点において、小説とほとんど同じ位置にあったのが、囲碁や将棋であった。

たとえば、夏目漱石が朝日新聞社に入社したのは明治四十年四月で、大正五年に亡くなるまで専属作家として多くの作品を発表していくが、この時期は、新聞棋戦が定着していく時期でもあった¹⁰。

新聞棋戦を早くに採用した新聞は明治四十一年の『萬朝報』で、これに続くように多くの新聞が次々と新聞棋戦を取り入れていくが、『東京朝日新聞』が「敗退将棋新手合」として棋譜の掲載を始めたのは、明治四五年一月一日である。実はこの日は、いわゆる「修善寺の大患」後に、『東京朝日新聞』への復帰作を

とについて、自覚的だったように思われるのである。

漱石は、もっと初期の頃から、将棋を巧みに取り入れて創作を行っていた¹³。

「坊つちゃん¹⁴」は、「親譲りの無鉄砲で小供の時から損ばかりして居る」と書き始められ、「おれ」の様々な「無鉄砲」エピソードが挙げられるが、その中でも、事態が展開していく上で最も決定的となったのは、将棋をめぐる出来事である。

ある時将棋をさしたら卑怯な待駒をして、人が困ると嬉しそうに冷やかした。あんまり腹が立つたから、手に在った飛車を眉間へ擲きつけてやつた。眉間が割れて少々血が出た。兄がおやぢに言付けた。おやぢがおれを勘当すると言ひ出した。

この冒頭のエピソードは、物語の結末、袂に入っていた卵を衝動的に野だの顔面に叩きつけることから始まる乱闘の場面と類似したものとなっている。しかし、似ているのは単に、手元にあったものを相手の顔に叩きつける、という身体動作上だけのことではない。

「おれ」は、野だや赤シャツと対抗し、ある種の知恵比べによって悪事を暴き出し、追い詰めるところまでいくのだが、彼らは「言葉巧み」な弁解によって言い逃れをしようとする。言葉の

やり取りによつては相手がまだ降参していない段階で「おれ」が彼らに暴行を加えたとき、「是は乱暴だ、狼藉である。理非を弁じないで腕力に訴へるのは無法だ」と赤シャツが抗議するように、法的には「おれ」の側が瑕疵を抱えてしまうことになる。悪事を行つても、十分な証拠が残つておらず、「言葉巧み」な弁解が成功すれば法的には罰されない、というのが社会のルールであり、野だや赤シャツはそのルールの範囲内で戦おうとしているわけだが、「おれ」は、そのルールを守っていたとしても「卑怯」なふるまいというものがある、という価値観のもと、法を逸脱して「正義」の私刑を敢行する。この二つの生き方の対比に本作の一つのテーマを見ると、冒頭の将棋のエピソードは、まさにそれを象徴するものとして配置されていることに気付くのである。

ここでは将棋におけるルールは社会のルールの類比となっているわけだが、登場人物が物語世界内で社会のルールをこのように逸脱していくだけでなく、漱石の「坊つちゃん」執筆という行為そのものも、当時の文壇のお約束の逸脱としてあったということに注意したい。柄谷行人¹⁵は、当時優位になりつつあった「小説」というジャンル意識の貧しさや限界に漱石が自覚的であり、「小説」のお約束の逸脱を漱石が目指していたこと、小説とは異なるジャンルとしての「ピカレスク」たる「坊つち

やん」はまさにそうした作品の一つとして書かれたことなどを論じている。柄谷の議論が示唆的な点は、漱石はどのように小説から逸脱しようとして小説を書いていた、という逆説的なことを論じているところにある。稿者の立場から言い換えれば、そもそも小説というものには、小説からの逸脱、というような自己言及的、自己否定的なモチーフを扱う機能が備わっていて、それこそが小説というジャンルの重要な特徴なのだ、ということになる。そして、そうしたメタフィクショナルな回路を導入するアイテムとして、漱石は将棋を扱ったのである。『東京朝日新聞』が新聞棋戦を開始して定着させていく「彼岸過迄」以降の作品、すなわち後期三部作と呼ばれる「行人」「心」でも、漱石は将棋を作中に登場させる。

「行人」では、お重が岡田に「あなたの顔は将棋の駒見たいよ」と軽口を言うような形で「将棋」の語が登場する¹⁶のだが、残念ながらこの時期、『東京朝日新聞』では「敗退将棋新都合」の連載はちょうど休止中であつた。二月二六日から、「行人」の隣のページで「敗退将棋新都合」が再開すると、漱石は先の将棋のくだりを「将棋の駒がまだ崇つてると見えるね¹⁷」と登場人物が再び引き合いに出す会話を描いている。また、一週間後には将棋の駒を相手の額に投げつけるという「坊つちやん」のようなエピソードを再び描いてもいる¹⁸。「兄」の章から次の「帰

つてから」の章に移つても、やはり、顔を将棋の駒に喩える話が再度持ち出される¹⁹。これらは、作品そのものを滑稽で娯乐的なものとするためのアイテムとして、娯楽ジャンルであり新聞紙面上で隣に掲載されている将棋を用いている例と言える。

後期三部作の最後の作品「心」でも、将棋イメージの利用は継続される。青年の「私」が帰省した際、死期を悟つたような父親の言葉と、対照的に樂觀している母親の言葉との両方を聞いて、父親の病状を判断しあぐねている場面²⁰である。そこで父親の病状が実際はどうかを表現するのが、父親と将棋との関わりなのである。「父は此前の冬に帰つて来た時程将棋を差したがらなくなつた。将棋盤はほこりの溜つた儘、床の間の隅に片寄せられてあつた」というさりげない一節だが、この描写が、母親の樂觀が当たっていないことを示すという仕掛けとなつている。母親は「私」と父親に将棋を指すことを勧め、「私」は将棋盤のほこりを拭くのだが、その後、将棋が指される場面が描かれることはついにない。父親にとつて、健康に生きることのバロメーターはまさに将棋を指すこととして表現されているのである。これもやはり、掲載紙面の隣にまさに将棋が局面図付きでビジュアルに展開していること、健康な読者ならばそうした娯楽を日常的に楽しめる、ということのリアリティを活用していると言える。

ただ、これらを、新聞読者が小説と同時に視野に入れる手近なもの利用、あるいは安直な読者サービスとして理解して済ませるのは十分ではないように思われる。将棋は、たとえば「心」という小説内の父親の人生を象徴するものであると同時に、新聞紙上における、この「心」という小説作品そのものと機能的に等価なものでもあるからだ。「心」にとって将棋は、作品内のモチーフであると同時に、作品自身の娯楽的コンテンツとしてのありようを端的に示すイメージでもある。このように二重化した形で「将棋」と作品を関わらせることによって漱石が示しているのは、小説というジャンルが、メディアや社会における自己のありようを作中でも対象化してみせるような入れ籠構造を持ち得る、ということだ。

そうであれば、作中で表現されているのは、漱石が産み出した虚構世界であると同時に、それを産み出す漱石自身の問題、あるいは小説というジャンルの問題、さらには言葉という媒体の持つ問題であるかもしれない、ということになる。小説にはそのようなメタフィクショナルな機能が備わっているというところが、ここでひそかに開示されているのである。

三、小説と遊戯の差別化

前節のように見てくると、漱石はこれらの将棋作品を書くことによって、小説を将棋と差別化しようとしたのだ、と言えるかもしれない。すなわち、小説は新聞紙上において単に将棋と並列の存在となるだけではなく、将棋よりも一つメタのレベルに立つことができる、ということである。小説は、ひとまずは将棋と並列の存在であることは否定しがたいわけだが、そうした自己の位置を自己言及的に対象化する機能をも持っている点において、将棋とは差別化される。

もちろん、現代の将棋ファンの我々は、これが小説だけの特徴であって将棋にはあり得ないことだ、という見方が不十分なものであることを知っている。すなわち、将棋においても、将棋を規定する枠組みそのものを問い返すような指し手や詰将棋作品はあり得るからだ。詰将棋作品でいえば若島正『華麗な詰将棋』冒頭に掲げられた作品²¹や「最後の審判」²²が有名であるし、将棋の文化や世界を支える価値観を問い返すことが盤上で実現され得ることは、久保明教『機械カニバリズム』²³が近年のAI将棋の例から論じている通りである。

とはいえ、そのような将棋のポテンシャルが明晰に理解され始めたのは近年のことであって、漱石がそこに考えを巡らせる

ことはもちろん難しかったであろう。その時代的な限界のもとにおいて、漱石は、小説というジャンル、あるいは自身の芸術家としてのイメージを将棋とは異なる高みに位置付けようとも試みていたように思われる。

漱石が、自身が将棋的な存在であるというイメージに甘んじなかったということを、他の側面からも見てみよう。たとえば彼は「娯楽と云ふやうな物には別に要求もない。玉突は知らぬし、囲碁も将棋も何も知らぬ²⁴」と述べる談話を残している。

もちろん、これは韜晦である。新聞紙面に将棋と並ぶような形で自身の作品を発表し、作中でも将棋を取り込むなど、将棋と密接に関わって創作活動を行っていた漱石は、日常生活においても友人たちと将棋を指していた。

たとえば漱石の日記²⁵には「五月二十八日 金（中略）将棋をさす。豊隆に一度負ける。二度目には虚子の助言で勝つ。新とやる、うまく負ける。新と虚子とやる。勝負のつかぬうちに帰る²⁶」というようなくだりが見えるし、「火燵して得たる将棋の詰手哉²⁶」、「炭団いけて雪隠詰の工夫哉²⁷」というような、将棋を詠んだ俳句も残されている。自分よりも棋力の低い友人が将棋への興味を失わないように「うまく負ける」というような指導対局的な心配りや、詰将棋を解く日常の描写、また将棋をほとんど知らない程度の初心者が使うとは思えない「雪隠詰」

などという語彙から見ても、将棋は漱石の身近に確かにあったことが分かる。

そのような漱石が、あえて将棋を「何も知らぬ」とまで述べた理由は何なのか。それは、この談話に付された「文士の生活」というタイトルとも関わっているだろう。我々からしてみれば、漱石が友人たちと将棋を指している日常の一コマは、文士の生活として特に違和感があるものではないように思われる。しかし漱石自身が「文士」として読者に与えたい印象は、どうやらそれとは違っていたようなのだ。将棋のような遊戯^{ゲーム}とは本質的に懸け離れているものとして自身の小説の芸術的価値を打ち立てようとした芥川のような志向が、既に漱石にもあった、と見るべきではないだろうか。

冒頭でも触れた芥川の例に戻ろう。芥川もまた、「勝負事」を忌避していることを繰り返して語っていた²⁸わけだが、彼が遊戯^{ゲーム}を拒まなければならなかったのも、彼の生活や関心が遊戯^{ゲーム}と縁遠いものであったからではない。むしろ、芥川も実際にはやはり将棋に親しんでいた時期があったはずなのであり²⁹、また、作品の中でも、漱石に劣らずメタフィクショナルな仕掛けを産み出す装置として行軍将棋を用いた「少年続編³⁰」を書いている³¹。

また、芥川の友人たちも、揃って将棋を指していた。文壇将

棋のエピソードを集めた文献で頻出の名前を挙げていくと、菊池寛、久米正雄、瀧井孝作、佐佐木茂索、南部修太郎、小島政二郎、などとなるが、要するに芥川32の『新思潮』以来の盟友や、「龍門の四天王」達は揃って将棋を愛好していたのである。芥川に師事した堀辰雄についても将棋エピソードが残っている33し、同じく後輩筋にあたる横光利一と川端康成は、二人一緒に写っている写真の代表として現在知られているのがまさに将棋を指している写真である。これらはもちろん、文壇で強い影響力を持った菊池寛が将棋を愛好して周囲にも勧めていたことと無縁ではないだろう。

西井弥生子34が論じているように、菊池寛は、文学観、芸術観と深く関わる形で将棋を捉え、その考えに基づいて文壇で様々な活動を展開していた。「勝負事はどうもやる気が起らない35」との芥川の主張は、『中央公論』の「勝負事の興味」特集36で菊池寛らが芸術と勝負事を対置して勝負事の意義を芸術に拮抗し得るものとして論じるなど、芸術を将棋などの遊戯ゲームの類比で捉えようとする論調が強くなっている中で、それへの反発として現れたものであった。逆に言えば、彼の「芸術至上主義」的なイメージは、このように、ともすれば当然の前提として浸透しかねない小説と遊戯ゲームとの近接性をことさらに否定してみせる身振りによって演出され、提示された面もあったのだ。

芥川が、自身は決して将棋を指さないかのようなイメージをことさらに作ろうとしたのは、将棋と縁遠かったからではなく、全くその逆に、将棋が常に文学の近傍にあり、友人たちが、将棋と文学を近接したものと見なすような文学観、芸術観を提示してさえることに対して、あえて異なる芸術観を示す必要性を感じていたからなのである。

芥川の死後も含め、菊池寛は文藝春秋社の社長として文壇で影響力を強めていったが、将棋は、芸術理念的にも、文壇の人脈的なネットワーク形成上も、重要なものとして存在し続けることになる。人脈形成上、将棋が重要な役割を果たした大規模な例としては、井伏鱒二らの阿佐ヶ谷文士会も同様である38。日本文学史の歴史の側面は、そのように将棋との近接性を自然なものとして受容する流れと、漱石や芥川のように、それに深く影響されつつもそれにあえて対抗することによって芸術的イメージを打ち立てようとする流れとの拮抗として理解することができる。

四、将棋の文学論的可能性

冒頭で触れた坂口安吾と平野謙のエピソードも含め、日本の近代小説は、一方では遊戯と近接したものとして展開しながら、他方ではイメージの上において遊戯との差別化を図ることによっ

でジャンルの意義を打ち立てようとする流れも並行していた。大衆文学と純文学、というような二項対立も、こうしたことの延長に捉えることができるだろう。そして、権威や主流をことさらに形成しようとするのは、遊戯性を否認する側であった。

しかし、だからこそと言うべきか、そのように遊戯性を排除することの欺瞞を突くことは、文学論争の、あり得べき重要な論点として潜在し続けていた。

先に触れた坂口安吾は、織田作之助、太宰治らとともに、無頼派、あるいは新戯作派と呼ばれたが、既成文壇の権威に対する反抗をその特徴の一つとしている。当時圧倒的な権威と見なされていたのは、「小説の神様」とさえ言われた志賀直哉であった。その志賀直哉に彼らが批判を試みた文章には、共通して将棋が出てくるのである。

まず、織田作之助の志賀直哉批判の文章として知られる「可能性の文学」³⁸は、次のようなものである。

しかし、坂田の端の歩突きは、いかに阿呆な手であつたにしろ、つねに横紙破りの将棋をさして来た坂田の青春の手であつた。一生二代の対局に二度も続けてこのやうな手を以て戦つた坂田の自信のほどには呆れざるを得ないが、しかし、六十八歳の坂田が一生一代の対局にこの端の歩突きといふ棋界未曾有の

新手を試してみたといふ青春には、一層驚かされるではないか。

織田作之助は、無謀なほどに挑戦的な初手を指して敗北した坂田三吉に自らを重ねることによって、志賀直哉的なものとは異なる自身の文学観を示そうとした³⁹。

織田作之助がこの月、結核で大量咯血して倒れ、翌年亡くなると、安吾は「織田は悲しい男であつた。彼はあまりにも、ふるさと、大阪を意識しすぎたのである。ありあまる才能を持ちながら、大阪に限定されてしまった。彼は坂田八段の端歩を再現してゐるのである」⁴⁰と、織田の限界を悼んでみせるが、この文章で安吾は同時に、注目する棋士を坂田三吉から当時台頭しつつあつた升田幸三にずらし、また志賀直哉批判の論点も微妙にずらしながら、やはり定跡将棋の打破という観点からの志賀直哉批判というスタンスを受け継ぐ論陣を張っている。安吾はそれを、単なる織田の受け売りとしてではなく、「坂口流の将棋観」⁴¹として自身の名に引き受けて語りさえするのである。

将棋の勝負が、いつによらず、相手のさした一手だけが当面の相手にきまつているようであるが、却々そういうものじゃなくて、両々お互に旧来の型とか将棋というものに馴れ合つてさしているもので、その魂、根性の全部をあげてただ当面の一手を

相手に、それに一手勝ちすればよい、そういう勝負の根本の原則がハッキリ確立されてはおらなかった。これをはじめて升田八段がやったのだらうと私は思う。／私の文学なども同じことで、谷崎潤一郎とか志賀直哉とか、文章はあつたけれども、それはただ文章にすぎない。

こうした動きに呼応するかのように、太宰治もまた、志賀直哉を罵倒したことで有名な「如是我聞¹²」で、次のように述べている。

普通の小説といふものが、将棋だとするならば、あいつの書くものなどは、詰将棋である。王手、王手で、さうして詰むにきまつてゐる将棋である。旦那芸の典型である。

太宰によれば、志賀の小説は、相手のいる将棋の対局でさえなく、詰将棋に過ぎない。用いる比喩は織田や安吾と微妙に異なっているが、答が決まっているかのような窮屈な文学観を批判することにおいて、より強い批判となっているといえよう。

これらにおいては、定跡や詰将棋の比喩によって、単に既成文壇の権威やそれへの盲目的追従を表現した、ということに加えて、もう一つの効果が機能していることに注意したい。将棋を愛好し、自身の創作についても戯作性、「遊び」の側面を明示的に掲げた

彼らからすれば、小説とはそもそも遊戯^{ゲーム}的、将棋的なものである。志賀直哉的な作品の窮屈なところは、自らの内なる将棋性、遊戯性を否認するところにある。してみれば、彼らの比喩は、将棋の中で批判対象を定跡将棋や詰将棋に該当するものとして位置付けることだけに意味があるのではない。そもそも、他の文学観を将棋になぞらえて語ること自体が、批判対象の隠蔽されている性質を暴き出す、戦略的な比喩となっているのだ。本稿で挙げたのは、将棋と文学が関わる例のほんの一部に過ぎない。しかし、逍遙にせよ、漱石や芥川や『近代文学』同人の「文士」「芸術」イメージの形成の問題にせよ、志賀直哉的な文学観の是非をめぐる議論にせよ、文学とは何か、文学とはどうあるべきかをめぐるその時期ごとの中心的なテーマに、たびたび将棋が関わっていたということは、決して偶然のことではあるまい。繰り返しになるが、それらを可能としたのは、将棋というものが持つ、物語メディアとしての強度ではなかったかと思われるのである。

- 1 恒藤恭『旧友芥川龍之介』（朝日新聞社、昭和二十四年八月）
- 2 坂口安吾『娯楽奉仕の心構へ——酔つてクダまぐ職人が心構へを説くこと——』（『文学界』昭和二年十一月）
- 3 坪内逍遙『小説神髓』（松月堂、明治一八年九月）
- 4 日本近代文学会運営委員会『特集遊戯と文学の力学——将棋を視座として【特集の趣旨】』（『日本近代文学会会報』、平成二八年四月）はこの点に注目したものであった。
- 5 藤井貞和『日本へ小説・原始』（大修館、平成七年二月）
- 6 亀井秀雄『小説論——『小説神髓』と近代』（岩波書店、平成一一年九月）
- 7 この点については、小谷瑛輔『小説とは何か？——芥川龍之介を読む』（ひつじ書房、平成二九年二月）で詳しく論じた。
- 8 柳田泉『小説神髓』研究（春秋社、昭和四一年一月）。ただし柳田は「象棋については何も知らないのです、この例を是非することができないのが残念である（中略）象棋の例のところは、そのまま読み流してもらおうとする」とほとんど読み飛ばしている。
- 9 岡本嗣郎『9四歩の謎 孤高の棋士・坂田三吉伝』（集英社、平成九年三月）
- 10 本論集所載の山口恭徳論文に詳しいので参照されたい。
- 11 漱石「彼岸過迄に就て」（『東京朝日新聞』明治四五年一月一日）
- 12 矢口貢大氏のご教示による。
- 13 本稿で触れる漱石の将棋エピソード、将棋関連作品の多くについては、春原千秋『将棋を愛した文豪たち』（メディカルカルチュア、平成六年三月）でも整理されている。
- 14 夏目漱石「坊っちゃん」（『ホトトギス』明治三九年四月）
- 15 柄谷行人『増補漱石論集成』（平凡社、平成一三年八月）
- 16 漱石「行人 友達（七）」（『東京朝日新聞』大正元年二月二日）
- 17 漱石「行人 兄（二）」（『東京朝日新聞』大正二年一月一日）
- 18 漱石「行人 兄（九）」（『東京朝日新聞』大正二年一月八日）
- 19 漱石「行人 帰つてから（八）」（『東京朝日新聞』大正三年三月五日）
- 20 漱石「心先生の遺書（四十）」（『東京朝日新聞』大正三年六月一日）
- 21 若島正『華麗な詰将棋——盤上のラビリンス』（光文社、平成五年六月）。『盤上のファンタジア』（河出書房新社、平成二年七月）にも再録。
- 22 縫田光司「最後の審判」（『詰将棋バラダイス』平成九年一月）
- 23 久保明教『機械カニバリズム』（講談社、平成三〇年九月）
- 24 夏目漱石氏「文士の生活」（『大阪朝日新聞』大正三年三月二日）
- 25 『夏目漱石全集第二十巻』（岩波書店、平成一五年一月）
- 26 明治三二年頃に漱石が使用していた手帳、引用は『漱石全集第十七巻』（岩波書店、平成一四年八月）
- 27 夏目漱石、高浜虚子宛書簡、明治三三年二月一日、引用は『漱石全集第二十巻』（岩波書店、平成一四年一月）
- 28 恒藤恭の証言の他に、芥川龍之介「私の生活」（『文章倶楽部』大正九年一月）、「中央文学の問に答ふ」（『中央文学』大正九年六月）、「現代十作家の生活振り」（『芸芸倶楽部』大正一四年一月）など。
- 29 友人に将棋をやめるよう勧めていたことがうかがえる、小穴隆一宛書簡（大正一一年五月二日）なども残っている。なお、これらを含め、芥川龍之介の将棋関連文章については、章瑋「芥川龍之介と将棋とその周辺」（『将棋と文学研究会口頭発表、平成二九年一月一九日）で網羅的にまとめられており、本稿はその示唆に拠るところが大きい。
- 29 自身の体験を題材にした芥川龍之介「絹帽子」（未定稿、大正五年、大正一〇年補筆）、「SODOMY」の発達（仮）（未定稿、年次未詳）、「冬と手紙と」（『中央公論』昭和二年七月）などに、将棋に親しむ様子が描かれている。また、息子に西洋将棋を買ったことを妻に報

- 告する書簡も残されている（芥川文苑書簡、昭和二年三月一日）。
- 30 芥川龍之介「少年続編」（『中央公論』大正一三年五月）
- 31 これらの作品については、小谷瑛輔「芥川龍之介における「sentimentalism」、サンティマンタリズム」、「センチメンタリズム」——「羅生門」、「葱」から「少年」まで」（『芥川龍之介研究』平成三〇年九月）で詳しく論じた。
- 32 小谷瑛輔「将棋と文学研究文献人名索引」平成三〇年九月、http://www3.u-toyama.ac.jp/kotani/shogi/author_index.pdf
- 33 井伏鱒二「堀君と将棋の香車」（『文芸』昭和二八年八月）
- 34 西井弥生子「石本検校」の世界——菊池寛の将棋——」（『青山語文』平成二九年三月）
- 35 芥川龍之介「現代十作家の生活振り」（『文芸倶楽部』大正一四年一月）
- 36 『中央公論』大正一三年八月
- 37 青柳いづみこ、川本三郎監修『阿佐ヶ谷会文学アルバム』（幻戯書房、平成一九年八月）
- 38 織田作之助「可能性の文学」（『改造』昭和二年二月）
- 39 斎藤理生「方法としての坂田三吉——織田作之助の作品と将棋」（『日本近代文学』平成二九年五月）
- 40 坂口安吾「大阪の反逆」（『改造』昭和二年四月）
- 41 坂口安吾「坂口流の将棋観」（『教祖の文学』草野書房、昭和二三年四月、ただし引用は『坂口安吾全集』17巻、筑摩書房、平成二一年二月）
- 42 太宰治「如是我聞（四）」（『新潮』昭和二三年七月）

将棋と文学スタディーズ

発行 二〇一九年一月五日

監修 小谷 瑛 輔

発行者 将棋と文学研究会

<http://www3u.toyama.ac.jp/korani/shogi/>

編集協力 田代 深子

本研究会の活動は、JSPS 科研費（挑戦的萌芽研究）16K13192 の助成を受けて行われています。